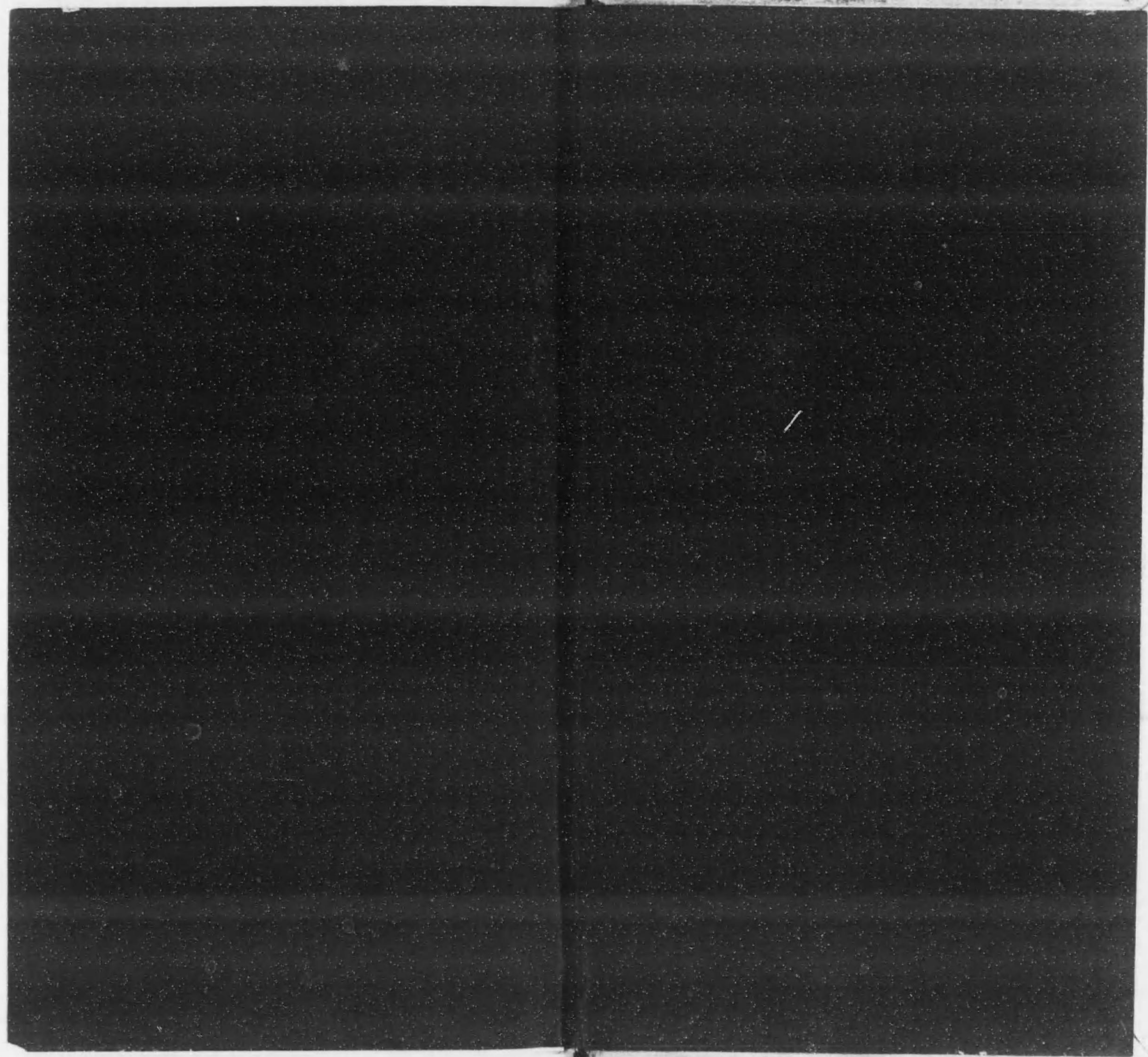


始





特110
425

幸田露伴校訂
柳亭種彦著

紫修
田舍源氏



日本文藝叢書
第四十八卷

(第
正
西) 7.4
丙亥

東京 東亞堂 藏版

文藝は人間の精華なり、其の尙ぶ可きや論ずるを須つ無し、而して其の重んず可きは世或は之を遺る、甚しきに至つては之を輕視し、布帛米麥の賤しきにだに若かずと爲すものあり。謬れりといふべし。それ文藝の人に於ける、其の身に近くして實に切なるよりして之を言へば、文や食ふ可からず、詩や衣る可からず、殆ど釐毫の益有る無きのみ。然りと雖も車轂窓孔、其の無に當つて其功存ず、有の用固より小ならざるも、無の功更に愈大なり、文藝の人を益するに於て、布帛米麥の寒を防ぎ饑を醫するが如き片功隻能無きは即ち其の大惠懿德、庶物の比す可きにあらざる所以なり。萬象に浹洽して其の養を爲すものは水也、百般を烹煉して、其の用を濟すものは火也、文藝は譬へば猶水火のごとし、水潤火烘の冥々茫茫の間に行はるゝや、天地焉に因つて以て立ち、獸畜焉に頼つて以て生く。文藝の人に於ける、其の功益、手提へ目睹る可からずと雖も、風氣之によつて涵漸せられ、性情之によつて熔冶

せられ、世運の推移、國勢の隆替、亦復之によつて左右せらるゝを免れざらんとす。其の關涉する所、廣大深長米麥布帛の類の豈敢て能く及ぶところならんや。近者文藝の尙ふべきを道ふもの甚だ少からず、而して其の重んずべきを道ふものに至つては却つて甚だ寥々たり。尤に憾む可しとす。たまふ、文藝叢書の刊行に接し、乃ち慨然として筆を援つて卷端に題す。

明治辛亥一月

露伴學人識

凡例

- 一、本書蒐め收むるところは、小説、傳奇、實錄、雜筆等すべて邦人の手に成り、邦文の體を爲せるものにして、士女の清興を惹き賞讀を値する文藝の書にかゝる。間々他邦の書に本づくところのものを探るも、亦皆邦人の靈腕妙手、璧を取りて櫃を返せるものを收む。日本文藝叢書と名つくる所以なり。
- 一、本書の刊行は、豫め全貳百冊を續出して世に薦むるを期す。半途廢刊缺功のことの如きは刊行者必らず之を爲さず。
- 一、舊本新刊、其の體裁に於ては固より舊に依る能はずと雖も、行文用字に於ては必らず原書に違はざるを力め、校正を嚴密にし、印刷を鮮明にし、以て江湖の愛賞を得んことを期す。時に舊刻の誤謬を正すことは之有り、自ら新訂の功勞を役するがごときことは必らず之を爲さず。特に幸田露伴氏を勞して本書校訂刊行一切の指導者として仰げるものこれに囚らずんばあらず。
- 一、解題評說亦之を幸田露伴氏に仰ぎて其の書の卷首に掲ぐ。

發行者識

四たび田舎源氏に題す

解

文の品や一ならず、而して人の才も亦等あり。品に高あり下有り、才亦大あり小あり。柳亭主人の文、謂つて最高の品となす可からずと雖も、また品の下なるものとなす可からず。其の人稱して大才と爲す可からずと雖も、また才の小なるものとす可からず。蓋し中品の文なり、中才の人なり。而して其の才を運するに穩和の性情を以てし、其の才を潤すに篤實の學問を以てす。品の中にして而して上に近く、才の中にして而して大ならんとする所以なり。柳亭の時に當つて、聲名相競ふ者、曲亭あり、式亭あり、十返舎あり。十返舎の文、俚陋蕪雜、たゞ其の野韵村趣、眞率人を動かす者ある、これ悦ぶべきのみ。其の人となり疎懶放逸、徒に盃酒に接するを好んで、几案に親むを能くせず、書を讀み知を積むの工夫に至つては、本より缺如たり。既に源を養ひ根に培はず、素質美なるありと雖も、成るところ限有り。一膝栗毛以外、世の稱するところとなる者無き、宜なるかな。式亭は稍々意を陳簡に留め、務めて目を世態に屬す。文の體たる、卑近にして、俗と相遠からんことを恐るゝものゝ如し。闕里の實を寫し、臧獲の神を傳ふる、勢おのづから是の如くならざる能はずと雖も、中に尖削銳利の處

題

1

ありて見はる。才の備また知る可し。然りと雖も、文や奔放に任せて烹鍊の致を缺き、人たゞ俊敏にして重厚の處無し。十返舎と彼此互に優劣ありと雖も、品等實に伯仲の間にあり。十返舎式亭に比して、文格竝に異に、才力また勝る者を曲亭となす。曲亭の人となり、偏強にして勝つことを好む。天の恵を享くる必ずしも多からずと雖も、自ら強ひて息まざる亦甚だ力む。才の足らざる、乃ち學之を補ひ、情の饒かならざる、智の之を援ふ有り。こゝを以て其の爲るところの者、富むこと理に於てし、備はること義に於てす。人或は眞韵に匿しく、妙趣に貧しきをいふと雖も、然も畢に蔚然たる一大家たるを碍げず。偉なりといふべし。柳亭の學は曲亭の學と異なり、彼や博を務む、此や精を務む。柳亭の性や曲亭の性と殊なり、彼やおのづから剛、此やおのづから婉。麤枝大葉は、曲亭の門風、小心細慮は柳亭の家法。理窟勃率は曲亭の骨氣、情懷縷縷は柳亭の心象なり。曲亭は理に喻り、柳亭は物に格る。曲亭は神鬼を好み、柳亭は兒女を説く。彼や崢嶸、此や媚嫵。彼や世を驚かし、此や俗に和す。曲亭の無きところ、柳亭之を有し、柳亭の敢てせざるところ、曲亭之を敢てす。人各々其の好むところを揚げ、好まざるところを抑ふと雖も、曲亭を悦ばずして柳亭を稱するものも亦多し。柳亭豈易るべけんや。予おもへらく、曲亭に許すある者、又むしろ柳亭に許すあるべし、山鳥水禽春又秋、啼聲羽色異

中同と。知らず人の點頭するや否やを、田舎源氏に題する、已に三次、復言ふ可き無し、乃ち柳亭と三家とを併せ評す。

大正二年初夏

露伴學人識

夫それりやうしやう 良匠みじかの家を作るや、先づ其材の多少たせうに任せ、長きものは棟むねとし梁はりとし、大なるは柱しらとし杭かとし、短みじかは桁ひちぎとし槽さうとし、細ほこは縁ゆかりとし檣たきとし、其後そののちしんせんもやふまゐはせ寝殿ねだん母屋もや葺ふ楯たて、妻戸つまど遣戸やりど乃至なほ簀子すゐこ等らを作りて後、是こゝを家いへといふが如く、作文ていの體たい又是また是こゝの如し。我わが才さいの多少たせうに任せ、とは聞きながら才さいの木きなく、學まなといふ竹たけもなく、請合うけあひあ普請しんの源氏げんじの間ま、五十四帖ごじゅうしよの廣座敷ひろざしき、柱印はしらじるしのいろはさへ、にちり書がきなる鐵釘かねくぎの折を直ただして打うつけ大工だいこうの、手際てぎはにゆかね大帳場おほぢやうば、てにをはの文廻ぶんまはし、語格ごかくの曲尺まがねを原もと來より知しらねば、他ひとの下墨下しもけずみさげ振ぶりに、かまはず曲まがりなりにして、先づ二十三帖じふさんまで、建たてては見たれど實ほんの形代かたしろ、源氏げんじの間まには似にもつかず、畫ゑの樣さまばかりは大造たいさうにて、譬たとへば麻木まがらに宮殿みやでんを營いとなみ、蜀黍もろこしがらにて樓閣ろうかくを、組くみあげたるに異ちがられば、漸しだ近ぢかづく卷まきの名なの、鈴蟲すずむし螢ぼたの籠かごにやせんかと不用ふようの工く手間てまを今更いまさら悔くみぬ。

天保十年己亥正月

柳亭種彦

修紫田舍源氏第三十編

嵐山院殿歸泉花生大禪定門と、金字に記し、一つの位牌を、一段高き處に直し、香華を供じ燈明を挑げ、その傍に菊咲は、綾の小袖錦の袈裟、雪の手許に玉霞、水晶の珠數を爪繰り、緑の髪は其儘ながら、浮世を思棄てたるすがた、光氏はきつと見やり、打驚くかと思の外、常に變らず親しく寄り添ひ、今宵は取り分けまめやかに、恨の數々云ひ列れ、左程に思ふか可愛の、一言なりとも聞かせ給へ、責ては夫を思ひ出に、忘るゝ便になさんなど、差添さへも傍へ、押遣り置きて用心の、體も見えれば水原はいと、心もと無く思ひけん、立ち寄る處を鐵蔓が、引き戻して薙刀の、石突取り伸べおし隔て、進み寄らんと爲しけるが、彼の光氏の打解けし、心の中を測りかれ、屏風の陰にひそみ居る。菊咲は涙を拭ひ、木でも石でも無い此身、その御心に絆されて、つい打ち解くる苦なるを、解けぬ心は申さずと、君には疾からよう御存知、都に思はぬ合戦起り、多くの人の失せたるは、皆父上の心から、其罪科の消ゆるため、責めて此身が尼となり、後弔はん豫ての願望、さはさりながら此儘に、髪を剃りなば彼女は、心動かぬ片意地者、光氏君の懇に、御心盡し給はるを、却つて五月蠅事に思ひ姿

を變へしと世の人に、謗らるゝのも厭はれど、正しき君が御心と、知らず善悪なき口端に、掛くるが恐れ多き故、心に思はぬ紅白粉、わが君も亦御心に、思はぬことをのたまひて、雪の夜道もお厭ひなく、通はせ給ふ戀人は、是にこそ侍らめ」と短刀一口取り出し、光氏の前に置き、「妾親子が鴨川の、邊に住みし其時に、御雨宿あらせられしと、のたまひたるは宗全が、娘朝顔なることを、知ろし召されし其故に、心を探り見ん爲の、御僞に疑なし。御手水を持って参りし折、君の御側にさむらひし、をこの名をば忘れしかど、父の使に彼の住家へ、來りし者といふことは、後にて思出したり。此方も素性を明したれば、御包みなく語らせ給へ」と、いふに光氏打領き、「推量に少しも違はず、彼者は片腕とて、山名に一度仕へしかど、我が腹心の家來ぞ」と言ひつゝ、件の短刀手に執り、鞘を拂ひ火影に透し、「是こそ眞の小烏丸、先年おん身の兄、統清の妻村萩に、奪ひ還させ我手に入りしは、是を模して新に鍛ちし、ものと知りつゝ心にひそめ、夫と言はぬは村萩が、折角の辛勞を、空しくなさんか憫然、且は家下郎等の、心を休めんその爲に、三つの寶は恙なく、取戻し、由披露に及び、よりく心を注げし所、御身宗全が愛女と聞き、若や此の手に在らんかと、戀慕に事寄せ問ひ寄りし、我心を悟り得たるは、感ずるに餘あり。さて問ふべきは嵯峨の館に、望んで奉公爲したるは、親の敵と我を恨ま

ん、其の爲ならんと心を付くれど、させる氣色は曾て見えす、今又事なく寶の劍を、還し、心の不審さよ」と、尋ね給へば鐵蔓が、「その事は私が申し上げんといひながら、屏風かい遣り恐れげ無く、御前近く進み出で、今更に若返る、心地せられて恥かしながら、昔の事より聞え上げん。室町御所に私が、宮仕へしてまだ年は、廿歳の上を多くも越えぬ、其頃に或人來り、山名宗全おん身を垣間見、妾に抱へたき由いへり。あの如く野鄙き、荒男子にてあんなれば、心には染むまじけれど、行末の爲宜からんと、言葉を盡し勧められ、此身の榮耀は望まれど、まだ其頃は世にありし、父と母とを安々と、過すが嬉しく媒介の、いひたる通り見るだにも、恐しげなる其人と、添寢は苦しく思ひながら、宜しく計ひ給はれと、遂に此身を打ち頼み、室町御所へは親の病氣と、御暇を願ひ出で、夫より山名の邸に奉公、この朝顔をまうけし後、只今の藤の方、まだ音川の館におはし、御名は確か猪名野谷と、呼び給ひし頃宗全が、年にも恥ぢず心を掛け、さまざまに言ひ寄りしを、彼方もうるさく覺しけん、尼になる由のたまひて、御假親を遊ばされ、室町へ移らせ給ふを、宗全が傳へ聞き、以ての外の憤り、その時私申すやう、義政公は御主君なり、音川は執權職と、いふ中にも取分け寵臣、何と思ほし召さるるとも、甲斐なき事に侍るなり。猪名野谷一人が女に非ず、何れなりとも御心に、適ひし人を迎へ給

へ、此事よりして音川と、争ひ給はゞ室町の、御憎みを受け給ひ御身の滅亡遠からじ、とさま／＼諫
 を入れしかど、富徴様の傳に、白絲とてその心、いと奸しき女あり。是よりさま／＼内通に、宗全は
 いよく腹立ち、かの鬱憤を聞えんため、長櫃の中に隠れ、忍び入らんと、其用意あるに驚き、是は
 勿體なき事なりと、止めてもいつかな聞かず、剩へ女のいらざる、諫言だてとて散々に、宗全妾を打
 擲す。此方も最早是迄と、胸を定め屹度居直り、左程までに御心に、叶はぬ者の産みし子は、御胤な
 がら憫然とも、可愛とも思はされまじ、されば此處には置き難しと、この朝顔を掻い抱き、立ち除く
 時に追ひもせず、其後便も無かりしが、如何なる邪慳の心にも、我子が不憫と思ひけん、月を経て後
 妾親子の、隠家を聞き出し、十年餘りの久しい間、世を安く送くる程、貢がる、中折に觸れ、此子を
 連れて再び館へ、歸るやうにと誘はれしが、主人ながら行の、邪曲非道の疎ましき、朝顔さへも送り
 遣らず。扱去る年宗全が、合戦敗れ討死の、はや三日前私の、住家へ忍んで自ら來られ、絶えて久し
 き朝顔と、親子の對面ありし時、宗全が申すやう、幸ひにして此娘、今迄館にあらざれば、我が胤と
 知る者なく、室町よりの咎も有るまじ、若しやその沙汰あるならば、鐵蔓よりしてこの劍を、光氏に
 還し與へ、娘が命を乞ふならば、助けぬ事はよもあらし、光氏は義を守り、仁心厚き者にてあり。我

が斯くなりしは自業自得、誰を恨まん道理もなし、人死する時言ふこと善しと、今こそ吾身の非を知
 りしと、言ひ棄て立ち出で給ひしが、此世の名残に侍るなり、此事治まり明石より、君御歸洛の其後
 に、都の人の取沙汰して、去頃山名の亡びしは、光氏が宗入の、加勢を止めし故にてあり、彼の君だに
 世に無くば、宗全も嗚呼の者、よもやみ／＼とは討れじと、密々と語るを聞き、わが爲に敵も主人、
 味方も主人といふ中に、足利の恩は薄く、山名の恩はいと厚し、男なら弔合戦、協はぬ迄も企てれ
 ば、ならぬ處と思ふより、仰せの如く機を伺ひ、君を密に害せよと、朝顔に言ひ含め、御奉公に差し
 上げしが、其後彼れが申すには、父上も仰せの通り、光氏君は道を守り、手易く人を罪し給ふ、御本
 性には侍らず、親の事を悪様に、いふやうなれど己れが罪、己れに酬ゆと御自ら、懺悔ありしを今更
 に、讐敵なんど、又向ひなば、孝は却つて不孝とならん、私と従姉の朝霧殿、その生み給ひし姫上は、
 尙更に御寵愛、それ羨むでは無けれども、同じ血筋にありながら、山名の娘といふ事だに、ならぬ此身
 は日蔭者、はかなく凋む朝顔と、名を附けたのも因縁か、妾や父様が恨めしい、少しも早く尼になり、
 心靜に暮したいと、くよく／＼歎くが道理さ、夫なら寶の御劔を、光氏君に參らせよと、扱こそ斯くは
 計らひし。又是よりは宗全が、妾鐵蔓光氏君に、問ひ參らす事あり、夫君子は其罪を悪んで、其

人を悪まずと、御口癖にもものたまふよし、夫に何ぞや宗全が、首を竊みて築き込めたる、塚を無残に發かれし、此の御辨解なき時は、恐れながら薙刀の、切味御目に掛けたため、山名の館に仕へし折の、姿に復へりて候ふ」と、襦袢の裾ひらりと羽織り、薙刀おつ取り突き立つたり。此時既に夜は更けて、風の氣色も物凄く、鐵蔓が顔色も、先に變りて凜々しげなり。光氏は莞爾と笑み、彼の塚を築きたるは、御身親子が業なりと、今迄は知らずと雖も、忠臣か孝子ありて、然せしならんと心には、感じ思ひし夫故に、發き棄てしと言ひ觸らし、實はその儘据ゑ置いて、一字の堂を建て、隠せり、その證據を言ひ聞かせん。彼の御身等が建てたる墓に、あらし山名におふ花と、山名の文字を、籠めたる發句を彫りてあり、其意を棄てず尼鳳山、名双禪寺と我れ名附けぬ。山號の山寺號の上の字、もとの如くに山名と續けし、夫のみならず双は宗なり、名双禪寺と稱ふる時は、文字こそ變れ山名宗全、又實名を持豊と、呼びつる故に持を尼にかへ、豊に鳳のひびきを假れども、我名附けし故世の人の、心付かぬか又偶々、心附く者ありと雖も、憚りて言はざるか、是迄その沙汰する者なし。田貫が亡せて後、彼處に住する僧のなく、尼の字のあるも奇縁と云ふべし、御身親子を彼處に住ませ、尼寺と改めん。朝顔は槿花禪尼、鐵蔓は其儘に、鐵蔓尼と呼ぶべし」と、仰せに歎ぶ母娘、願ひを協へ給はるか、あら有

難しと朝顔が、筭抜けばばつたりと、前に落ちたる島田鬚、思ひ切髪潔し。後れじ者と鐵蔓も、髻拂ふ薙刀の、蛭巻の名も恐ろしや。無限に沈み修羅に迷ひ、浮む瀬更にある間敷を、仁有る君が徳風に、迷の雲を吹き拂ひ、眞如の月を眺めんと、言ひつゝ立つて宵の程、縫ひあげ置きし衣包、開く中には豫てより、娘が願に調へけん、振袖に見し色ながら、法の衣は派出ならぬ、花の帽子も取り揃へ、差し出せば朝顔は、靜に上に打ちばなり、禮義亂さず跪居たり。光氏はいよく感じ、松枝は何所にかしと、仰にはつと次の間より、立ち出づるさほしが姿、見しには變る振の袖、やの字結びの館風、お刀捧げ端然に、御後に控ふるにぞ、是はくと親子が驚き、光氏立つて衣紋を正し、「不審に思ふは道理至極、この女は島山、重篤の娘松枝、先年より稻舟の、傳にて糺にあり、心利きて賢しき性質、いつぞや此處にて使女を、尋ねる由を聞き出し、彼を語らひ住み込ませ、密に様子を問ひしかば、何かは知らず朝顔が、大事に掛けて肌身に添へ、所持なす短刀あるよし告げつ、夫ぞ小烏丸ならんと、今日しも詮議に來りしなり。宗全が舊領は、吾請ひ受けて稻舟へ、贈りし故に今其夫、足利義兼それを知行す、其中よりして尼鳳山への、寺領を附けさせ置きたれば、朝顔の父舊地を、受け繼ぎしも同じ事、旁不平は有るまじ」と、仰せに二人は手を合せ、たゞ伏拜むばかりなり。水原は下坐へ膝行

出で、斯くまで御手の届かせられし、共知らずして調太夫、さまざまにお諫め申し、年寄て用にも立たぬ、私までに斯々せよと、言ひ付けた愚さを、嘸御心の中にては、可笑と今迄思しけん、此後屹度差し出ぬ様に、申し聞けるでござりませうと、いふを光氏押し止め、然ないひそ調太夫、なかつせば此の朝顔を、宗全娘と如何でか知らん、されば御劔戻りしも、其方の夫の功なりと、又此方を振り返り、松枝は事馴れぬ、下さまの奉公して、思ひ掛けなき辛苦をしつらん、夜も明け行かば朝顔親子を、名双寺へ送り届け、夫より糺へ歸るべし。吾も歸館の其後に、彼の寺の事共は、人を遣はし取り賄はん、今宵眞の小烏丸、手に入りし事どもは、夢々洩らす事勿れ、却つて人の疑はんしと、打ち私語きて出で給ふ。此時空は晴れ渡り、月照り出でて薄らかに、積れる雪に光り合ひ、いと面白き夜の様なり。光氏は人知れず、小烏丸を室町の、寶藏に納めんとて、夫より御所へ駕籠を向け、其夜は彼處に宿直して、嵯峨へ歸り給はざれば、紫は心ならぬ、風情は人に包めども、ほろ／＼と打ち零るゝ、涙を怪しと傍の、女共は思ふめり。やう／＼次の日午下りに、立ち戻り給へ共、心地悪しげに紫は、然々物をも給はず。光氏は打微笑み、常に變りし紫が、其氣色こそ心得れ、鐵蔓の病に託ち、彼の菊咲を問ふなどと、告げたる者のある故か、今ぞ實を委しく語らん。彼の鐵蔓を伯母なりとは、跡形もなき偽りにて、又菊

咲に心を懸げし、様に見せしも空事なり。仔細ありて彼等親子は、髪を斬つて尼となり、菩提の道に入つたる間、名双寺へ送り遣りぬしと、宗全が娘なる、事をば包み其餘の事は、細々語り給へども、思ひ掛なき事なれば、紫更に眞とせず、いよ／＼背きて物も聞えず。光氏はなほ親しく、好々左迄に疑はしく、思ほさば明日にも彼の寺へ、詣で給はゞ自ら、菊の着せ綿花の帽子に、變りし様を見給ひてん、年月慣れし我心を、知らざる様に曲るとやら、燻るとやらいふ其の振舞。嫉み恨みは斯々する、者と教へし事はなし、誰に習ひて歎ちぐさ、葉末の露本の雫、人の命は明日知らぬ、浮世は物事打ち捨て、心長閑に暮すぞよきと、さまざまに日一日言ひ慰め聞え給ふ。又今朝よりして雪降り添へ、いたう積りし前栽に、竹は皆な横折れ伏し、松は眞直に立ちながら、梢下枝も重げなり。夕暮よりして空晴れ渡り、月山の端をさし昇れば、御姿もてり増り、打並びておほする様、其儘に繪に描かまほし。光氏空を打仰ぎ、人の心を移すめる、花紅葉の盛より、冬の夜の澄める月に、雪の光あびたるこそ、色はなき物乍ら、面白さも哀れさも、是に上越す眺は無けれ。凄じきものの例に言ひ置きけん、昔の人の心淺さよ、なんどとて、障子を残らず明けさせ給へば、月は尙隈なく照り、一つ色に見え渡され、凋れたる庭の陰、心苦しう遺水も、いたく凍りて音もせず、物凄き様なりければ、何をがなして紫の、

沈みし心を引き立てんと、彼の新参の山吹が、傍に在りしを顧み、女童共を呼び出ださせ、指圖をしつゝ庭へ下し、雪轉しを爲させ給ふ。中にも大きやかなるは、事馴れ顔に裳をかゝげ、袖捲りして立ち向ふ。姿は月に映えてをかし。まだ小さきは縮無き、帯をも結ばず歡び走るに、鼻紙扇も取り落し、いと大きく轉ばさんと、思へど力の足らざれば、押し動かす得ず立ち騒ぎ、髪の亂るゝさへも知らず。鬢は損れ或は歪み、元結切れて肩に掛るも、白き庭にて隈なく見ゆ。大吉などは縁に立ち、まだ小さきに彼方の方へ、轉してよなど思ひくくの、事をいひつゝ打ち笑ふ。聲を聞き付け董野は、何事かはと姫君に、傳き参らせ立ち出づれば、機嫌宜げに姫君は、つくづく立ちて面白き、事を爲るぞと思はしけん、母上彼れを見給へと、紫の袖を捉へて、引き立て給ふ愛らしさに、やうく此方も心解け、いざとて自ら掻き抱き、端近く歩み出で、外の方を打ち見れば、雪の光月の光、皓々と澄み渡り、いと靜なる夜の様なり。暫しが中は姫君も、打ち眺めておはせしが、睡たくやなり給ひけん、莞爾笑ひ紫の、懷へ手を差し入れて、小さき乳をかい探り、顔に顔を押し當てつゝ、餘念もなげに睡り給ふ。面差の能く似通ひて、花と苔に異ならず、誰かは他人の胤と見ん、光氏もさぞ心の中に、嬉しう思ひて眺むるなるべし。其年も程なく暮れ、是より二年ばかりが間、記すべき事なくて過ぎぬ。(扱是よりは

乙女の巻にて、玉葛は又例のみこのくだりにあんなれば、其中に取交せて、綴りたれども狂言多く、意は違ひたる事のみなり。)

先の年々霧丸の、幼名は早似合すとて、雲井之丞と光氏の、指圖に因りて名を改め、是よりして若君と、いふこと勿れとのたまひければ、赤松の館の人々、雲井の君或は又、冠者の君とも申しけり。年よりは大人びて、見えさせ給へど小毬は、只何時迄も幼きやうに、思ひとりて片時も、御側を離れ得ず、夫も實に道理なり。まづ主従の禮義は差置き、取り別けて寵愛せし、二葉の形見は此君のみ、されば同じ孫なれども、柏之助をば左迄に思はず、只明暮に冠者の君に、傳く事のみ所在として、後世の勤も怠りぬ。又高直に雁金とて、人品容貌美しく、いと利發の娘あり。是は妾の生みたるにて、其女は暇を乞ひ、今は他へ嫁入して、實の母の有らざれば、高直が本妻たる、篠清が手に掛けんよりはと、幼き時より小毬が、引き取りて育てしにて、初花には二歳ばかりの、姉にはあれど本妻の、生みたるなられば却つて彼を、妹の様に人の貶しめ、初花のみを傳きけるが、過つる年義植公の、お年の程には初花が、似合はしきとて辱なくも、室町へ迎へられ、富世之前とて比びなき、幸福あるを姉の身にては、嘸羨しく思はんかと、一入に雁金を、小毬は不憫と思ひ、是をも亦手許を離さず、されば

彼の冠者の君と、一つに育ちたりしかど、各々十歳に餘りて後は、假令近しき縁者たりとも、女の身にては男子に、打ち解くまじき者なりと、父高直が雁金に、教訓なして近頃は、隔つる様にぞ爲たりける。されども幼き時よりして、花につけ紅葉につけ、武藏双六難遊、中睦しく戯れし、其の癖付きて冠者の君の、兎角に彼を心安く、待遇し給へば雁金も、左迄に今も恥ぢらばす。小毬は夫れも是れも、子供の様に心得て、一つに遊びておはするに、心を付くる氣色もなし。さて光氏は雲井之丞に、元服をさせんとて、其催し有りけれど、小毬は例の如く、稚兒の様に思ふが故、笑しきあの御前髪、剃らせ給ふはまだ早しと、只管惜み歎きしかば、老たる人の志、破るのも悪しからんと、其事はまづ光氏も、思ひ止まり給ひしが、何時迄も館にのみ、籠らせ置きて世間の様子を、見せざる時はその心、頑固なる者にてあり。さらばまづ御所の様をも、見習はせんとて雲井之丞と、駕籠を並べて室町へ、或時に出仕あり。赤松の館の人々、雲井の君は御所始め、御方々へも始ての、見参にて在すなれば、烏帽子装束華やかに、粧はせ給ふらんと思ひの外に其事なく、平侍の姿にて、同道ありしは何事ぞと、筈々と語り合ひ、小毬は取り別けて、打ち恨みし由光氏に、告ぐる者ありければ、さもあらんとて打領き、少し日を経て何氣なき、風情に持做し赤松の、館に至り給ひしが、高直は家にあ

らず、直に奥へ打ち通り、雲井之丞小毬を、押し並べて靜に坐し、二人に向ひてのたまふやう、予母上に別れしは、僅に五才の時にてあり、夫故やらん父君の、御寵愛殊に深く、奥殿にのみ成長たれば浮世の中を更に知らず、夜晝お前にさむらひて、學問はしつれども、夫も深くは學び得ず、賢き父の御教訓も、愚なる身の悲しさは、夫をよく心に留め、廣く渉らん事能はず、果敢なき遊びの笛琴の、調さへ音の足らざれば、況てや其の餘の藝能は、人に及ばぬ事多し、甲斐なき親に子の勝る、例は難き事にてあり、雲井之丞は我に劣り、其子は彼に劣りなば、行末如何にならんかと、心元なく思ふが故、學問怠る事勿れと、年頃月頃言ひつるなり。位高く勢ある、人の子と生れし者は、書をも讀まず藝も勵まず、心高ぶる者多し、時に隨ふ世の人の、胸の中には物知らずと、譏り乍らに表面には、追従しつゝ機嫌を取り、従ふ中は人がましく、見ゆれど其の父亡せぬれば、人に輕しめ侮られ、寄邊なき身となるものなり。されば廣く書に渉り、萬の道に委しければ、年を積む程人も崇め、世に用ひられ榮ゆべし。われよりはなほいと早く、母に離れし雲井之丞、可憫と思ふ其故に、却つて優しき言葉は掛けず、小毬もよく心得て、稽古怠る其時は、叱り懲してわが亡き後も、人に笑はせ給はるなと、聞え給へば小毬は、打ち歎きつゝ顔を上げ、恐れながらお學問は、生博士は及ばぬ程、日を逐つて御

上達、先づ夫れはさし置き、親の權威を借るべからずとの、仰は道理さりながら、正しく君の御總領、初めて御所へお参りに、御家臣並の御衣服、例に違ひし遊ばし方、冠者の君にも口惜しと、思召し、と言ひ掛くるを、光氏は押し止め、さては彼まで大人がましく、某を恨みしな、嗚呼まだ心はいと幼し。學問勵みて今少し、物の心を知るならば、其の恨は自ら、解けなんものをと言ひ捨て、其日は歸らせ給ひけり。母の早くも世を去りて、祖母の手に育ちし子供は、成長りても柔弱にて、無藝になるがいと多し。其の故を如何にと云ふに、我子を育てし頃とは變り、教へ諭さん氣力薄く、且はまた親の無き者なりとて殊更に、愛しみ甘やかし、子より孫には何とやらん、義理のある心地せられ、叱り懲す事をせず、我儘にさせ置くより、斯く無能にはなれるなり。されば晝夜小毬は、冠者の君を愛しみ、只幼子の様に持做す、その様を光氏は、見給ひて心に覺ほすは、何時迄も彼處に預け、物習はせては用には立たじ、靜なる處に籠め、思ふさまに學ばせんと、彼の朝霧を住まさんとて、造はれたる東の、館へ頓て雲井之丞を、迎へ取りて氏仲と、これより名乗らせ給ひけり。扱今迄の學問の、師を下ぐるには非ざれど、なほ廣く學びし者を、撰出して教へさせん。八才にして小學に入り、十有五にして大學に、入るは聖人の道にてあり、さらば都にて名たる儒者の、貴賤を選ばず呼び集め、詩

を作らせ文を書かせ、學力を試みんと、其日を定めて觸れられければ、今勢ある光氏の、召を如何にか否むべき、吾こそは吾こそはと、各々嗟峨へ集まる由を、聞き及ばれて四郎正尙、こは珍しき事なりと、弟小五郎晴命はじめ、夫かれを誘ひあひ、彼の當日には午下る。頃よりして彼處へ赴き、光氏の側に在りて、追々に入り來たる、學者共を見給ふに、つぶつぶと肥えたるあり、哀げに度せたるあり、或は髪を荆に亂し、或は繪に描く達磨の如く、鬚勝なるを剃りもせず、容貌の清きは一人もなし、其中にはいと貧しく、今日の衣服に差支へ、借着をやして來たりけん、行丈の合はざるを、引き伸ばし押し縮め、兎角すれども鄙野しき、姿を恥づる氣色もなく、其面相聲遣ひ、容體らしく持做しつゝ、座に押し並び漢土の、禮にやあらん作法を始め、見も知らぬ進退の、可笑さを正尙始め、若き者は堪へ兼ね、目を見合せて微笑ぬ。光氏は之を制し、惟吉に溫和き、人を添へて銚子盃着を座に列れさせ、まづ打くつろぎ酒飲みてよ。我はさらなる姿にて、此の席には列り難しと、御簾屏風の陰に隠れ、方々が人品の、善惡をぞ御覽じける。されば昔も今の世も、漢學する輩に、下戸なるはいと稀なれば、辱なしと一禮し、引請く飲む程に、思はず酔ひてお前も忘れ、誇顔に一人が、盃を取り上ぐるを、今一人側より咎め、「申さば今日は此殿の、若君が大學に、入らせ給ふ御式なり。最前より伺ふに、

御身更にその作法を、辨へざる様子なり」と、云へば此方も言葉を荒らげ、「我々風情は輕々しく、出づる事も叶はざる、御前にて御酒までも、賜はるは是非常なり。されば作法も式も棄て、御意に隨ひ打つるべき禮を捨つるが則ら禮なり、さいふ御身は誰なるぞ」と、目に角立つれば咎めし男、悠然と髯搔撫で、「あはれ我名も知らずして、儒者など、は嗚呼がまし」と、大聖孔子の再來せし、顔付するが可笑さに、人々は皆聲を上げ、笑ぬれば彼男、「あら音高し鎮り給へ、甚だ以て無禮なり、座を退かれよ」などとして、赫し掛くれば有合ふ者共、愈々笑ひて鎮まらず。口々に喧しく、罵りを顔どもも、夜に入りぬれば中々に、燈火の影いと明く、かの怪しげなる姿まで、鮮明に見え渡るを、正尙などは珍しく、興ある事に思ひけり。扱光氏は珍しき、題を數多撰り出ださせ、彼の儒者共に賜はりて、律詩作るべき由を命じ、自ら正尙氏仲等は、絶句を作り給ひしが、夜の短き頃なりければ、明け果て、後近習の侍、靜に披講に及びけり。元よりもさる事に、慣れたる者にありければ、讀み上げたるほど面白し、方々は斯る貴き、家に生れて榮華にのみ、誇り給はん御身なるを、あるは窓の螢に睦み、或は枝の雪に馴れ、學び給ひし事なれば、光氏のは更にも云はず、正尙も氏仲も、心々に作りたる、句毎にいと面白く、漢土にも持ち渡り、傳へま欲しき程なりとぞ。光氏は猶儒者共が、作りしを手許に取り

寄せ、熟々と見給ふに、其中に取り別けて、日出度詩二枚あり、誰が作りしかと問ひ給ふに、衣裳殊に見苦しく、片隅に打ち屈まり、始よりして物をも云はず、二人共に一對の、憔悴しき男なり。彼等は浮世の避者にて、人に追従する事なく、諛ふ術を知らざる故、才程は用ひられず、貧しき生活をするなりと、能く知れる者ありて、委しく申し上げしかば、光氏は打ち鎮き、「夫こそ心奥床し」と、直に館に止め置かれ、其餘の者にはさまぐの、物を賜はり又遅く、來りて這入る席のなく、控へ居りし儒者までへも、賜物多くありければ、歡びてこそ歸りけれ。斯くて後氏仲に、彼の留め置きし二人を附け置き、學問をさせ給ひ、僅に月に三度ばかり、小毬が許へ行く、事をぞ許し給ひける。氏仲は今迄知らぬ、人の中につと籠り居て、心細く幽鬱き餘り、我を何とて父上の、辛く待遇給ふならん、斯く苦しき目を見ずとて、立身なして世の人に、用ひらるゝは多くありと、恨みし事もありつれど、心溫和の性なれば、是も親の慈悲ならんと、熟々と思ひ返し、さらば早く書を讀み果て、人に交はり世に出でんと、只四五ヶ月ばかりの中に、史記などいふ書は皆明らかめ、愈勵みて僅の間に、學問上達赤松の、館に在りし其頃の、師は及び難き程に、文章などを綴り給ふを、高直は拜見し、驚き褒めて父正則、今まで存生あらんには、嘸歡び候はんと、猛き目元に涙を浮め、恐れ入れば光氏は、一入

に機嫌よく、斯く出精するならば、才なき吾には勝るべし、子に比ぶれば愚なりと、人に親を譏らする、夫こそ却つて孝なれしと、氏仲に教訓し、彼の僻者の儒者二人を、御前近く呼び出し、御身等の丹精は、早顯れて過分ぞしと、身に餘るまで祿を賜り、此の恩德にて忽に、生れ變りし身となりぬ。況てや此氏仲君、世に時めき給ふ時節の、來たらばいよ、二人は、御用ひのあらんかし。又此頃の事なりけん、或時遊佐の國助が、妻の梓は藤の方の、御機嫌を伺ひに、室町へ出でたる折節、藤の方には此の梓の、娘薄雪召連れられ、庭の御茶屋へお出での由、聞いて梓は直様に、御後を慕ひ參らせ、人丸の祠の前にて、御目に掛り御茶屋へ、お供なして四方山の、物語ども聞え上ぐる、その序に不圖いひ出づるは、妾の夫國助こと、前々の御所様より、相變らず御恩を蒙り、總領民部太郎國繁、先づ年に召し出だされ、父諸共に御所の勤め、その姉娘賤機こと、是も早く一色多京、泥廉の許へ嫁し、女の子を一人設け、其次は吾子といふも、畏れある嵯峨の内君、されば此三人は、心に掛かる事もなし、只々行末の案じらるゝは、それに居る薄雪ばかり、血の餘りとか下々の、諺に申す通り、特別國助愛子故、兎角に彼が身の上を、宜しき様に御計ひ、給はる様に御機嫌を、見合せて願へよと、兼兼夫の申し付けしと、傍に人多からぬを、幸ひとして染々と、打ち歎きたりければ、藤の方も去る年よ

り、梓が爲には繼子の紫、世に時めくを羨しく、思ふならんと推察し、實の娘薄雪を、迎へとりて義植公へ、差上げんと思はれし、事にあれば斯く云ふも、道理なりと梓には、よしなに答へて返し遣り、程も無く薄雪を、義植公の側仕に、差し上げ給ひけりとなん。此の催は藤の方、心に夙くよりありしかど、光氏よりして出されし、磯菜が事にて今迄は、引きしろひて置かれしが、早程も過ぎ薄雪も、年頃に成りしかば、斯く計はれしものなるべし。

雲井之丞氏仲は、赤松の館に成長、今の左衛門高直が、總領の柏之助。又其の弟梅之助と、いふ者などを相手とし、殊更に雁金とは、いと親しくて他所目には、まだ物心も無き様に、見ゆれど如何なる中なりけん、離れがたなき様なりしを、思ひ掛けなく去る頃より、嵯峨の館へ氏仲は、住居變りて一月に、三度ばかりの逢瀬となりしを、雁金はいと心憂く、冠者の君も又彼を、忘れ難う思しつ、筆の運びは幼けれど、美しき手に書交はず、文などをまだ締氣なく、袂へ入れしが自ら、落ちる事も度々なれば、當吉初め雁金が、腰元の女共は、ほのく知れるもありけれど、誰に語らん様もなく、御似合の御中らひと、思へば假にも二人の中を、隔る様にはせざりけり、小毬は其昔、二葉の上の化粧所を、住居となして遙に左衛門、高直が居間よりは、隔りて遠ければ、日毎には親と子の對面

もする事なし、其上今は亡父の、職を高直受け續ぎて、室町への出仕繁く、母小毬とは自ら、疎々しく過ぎたるが、或時常より早く下り、明日も幸ひ取り急ぐ、事も無れば長閑なる、心地せられて一ト渡り、時雨降り過ぎ只ならぬ、萩の上風そよくと、いと静なる夕暮方、母の機嫌を緩々と、伺はんとて此方へ來り、久し振にて雁金に、琴など弾かせて聞きたるに、小毬は若き程、糸竹の道に委しく雁金には幼きより、能く教へしと覺しくて、年の程に合すれば、いと床しう調べけり。高直心の中に感じ、「琵琶こそ女の彈するに、容は醜き様なれど、華やかならぬ其の音色は、却つて床しきものにてあれ。されど是は今の世に、名を得たる者を聞かず、女の中には光氏君、大井の里に籠置き給へる、人こそ其父に習ひ、殊に上手と聞き侍れ、彼の宗入は其道の、達人に隨つて、傳授を受けし由なれども、夫は早昔となり、濱邊に年を経たる人、左程に優れし藝とも覺えず、況てや娘は其に習ひ、彈合すべき者もなき、田舎に成長光氏君の、お耳に留り其噂を、折々仰せある程の、上手となりしは珍しし、琵琶と申せば母上のを、打ち絶えて承らず、御慰みに遊ばせしと、勧められて打ち笑ひ、「四つの絲より六時の勤めも、近頃は思ひも出さず、撥持ち様も忘れし」と、口には云へど一手二手、面白う弾き鳴し、「朝霧と言ふ御方は、藝能ばかりか御心も、人に優れていと賢く、溫和におはするものならん。

光氏君には御子少く、殊には又珍しい、女の御子を擧げながら、自らの手に養はず、時めき給ふ御方へ、譲り給ひし取り計ひ、並々の頑固い、女心に及ばぬ事と、母の言葉に、「さればく、女は只心ばせの、善きより世にも出づるなり。今の内君富世の前、幼き時より教訓し、直よかに養育し、夫故にこそ今斯る、幸は得給ふなれ。世に有り難き事ながら、只々心に懸れるは、動ともすれば彼の磯菜に、蹴壓れ給ふ御有様、とかく浮世は思ひの外なる、事の出来る者にぞ侍る。月日の經つはいと早し、香壽君の御元服も、只今の事なるにより、其時には此の雁金をと、人知らず思ひしに、明石の浦より呼び上され、淺くは覺さぬ彼方の、御腹といひ殊には嵯峨へ、移し裁みてし姫百合の、咲き出で給はん花の御所、此上に超す人や有る。されば又此事も、叶ひ難し」と打ち歎けば、小毬も、吐息をつき、「二葉の上の御機嫌よう、渡らせ給はゞ其様な、苦勞も無くて何事も、心の儘になりなんを、世を早う過ぎさせられ、剩へ正則殿も、逝去られたれば誰に斯うと、問ひ談合の相手も無し」と、なほさまさまに打ち案ずる、心の中はつゆ知らぬ、雁金は又琴引寄せ、調子を變へて弾きすさむ。譬はゞ花の半開、柳の髪に焚きしめし、伽羅の灰に打ち薫り、嬌かしきを、高直が不圖打ち視れば恥らひて、少し背くる横顔の、なほ艶麗に左に拍子をと、取る手付など雜師が、作りし様にて美しきを、小毬は限り

なく、可愛く思ひて眺め居たり。
 高直は由なき事を、云ひ出だして母の心を、痛めしを悔い思ひ、氣を慰めんと傍に、ありあふ笛を取り上げて、吹き合する音のいと冴えて、庭の梢もほろ／＼と、木葉残らす翻るゝは、此の響きかと人々も、屏風の後に擧り寄り、感に耐へてぞ聞き居たる。高直興に入つたりけん、雁金に尙琴を弾かせ、其の唱歌を歌ふ聲、面白ければ小毬は、餘念も無げに聞き惚れて、孫は更なり四十にも、早速からの高直をも、いと可愛しと思ふ折、又愛しみを添んとや、冠者の君参り給へり。御供には梅之助、御刀を持て畏まる。高直驚き雁金を、まづ退かせ此方にとて、上座に請じ引き下り、「室町御所の事繁く、近頃は嵯峨の御館へ、罷り出でず候間、打ち絶えて御目に觸れず、さて御學問御出精は、一段の事ながら、餘りに深く其道に、染みれば却つて頑固に、心のなりて世の人と、立ち交はるには妨となる事ありとは光氏君、思し知りておはすれど、左様に御意のある時は、君には夫を善き事とて、更に書を讀み給ふまじと、態と殿しく片時も、怠るなどはたまふならんが、斯く引き籠りておはしなば、御病氣の出でんかと、恐れながら母小毬、心を痛めて居る様子、御隙あらば繁々に、渡らせ給ひて又外の、御遊びをも遊ばすべし、禮と樂とは聖人も、並べ云ひて笛の音にも、古事はなほ傳はる物と、

承りて候しと、差し出せば氏仲は、取り上げていと若う、優しげなる音に吹き立つるが、面白ければ小毬は、吾を忘れて拍子をとり、其身若くば立ち上り、舞もなすべき有様は、郭公より聞く度に、甚珍しき心地なるべし。高直少し膝を進め、「御父君も此様の遊びを、好み給ひて室町の、忙はしき事共は、大方己に譲らせられ、次第に逃るゝ御心なり、誠に思ふ儘ならざる、浮世の中には吾が好ける、遊びを爲して暮すこそ、身の得ならぬなどいふ中、昏うなれば火を點させ、御湯漬果物など、饗應しまゐらせなほさま／＼、物語りに時移り、さて御暇賜はらんと、母小毬にも別を告げ、高直は立ち出でしが、夫よ／＼忘れたりと、獨領き臺子の間の、此方まで立ち戻り、邊を見れば幸ひに、當吉が居たるを呼び、「雁金に贈らんと、篠清が物好にて、衣を染めさせ置きつるが、縫はせんに箆丈知れず、手本に彼が小袖を一襲、持たせ歸れと言ひつるなり。仕立揚げなば篠清が、自らはへ持て來るならん。先づ夫迄は母上にも、知らさぬやうに其の手本に、すべきを早うと言ひければ、當吉は心得て、立ち行く跡に高直は、人に逢はんも懶く思ひ、身をか細りて忍び居る、とは知らずして茶の間には、腰元女が寄り集り、「皆は何と思やるぞ、今迄一つに置き申した。若君と雁金様、此頃俄に中を避け、今日も偶々若君が、お出でなさると彼方行けと、琴の音さへも聞えぬ程な、遠い處へ逐ひ遣られ、雁金さま

は悲しからう、雜事にも是か若君、これが私と押し並べ、羽子板持つても殿様内儀様、頓て中能く斯うしてと、みわたし嫁御になるのが楽しみ、御物心も筑波根の戀ぞ積りしお二人の、中を今更隔てたて、もう所詮仕方は無いしと、云へば一人か打領き、「ほんに此館の殿様ほど、御伶俐な人は無いと、世間でも云ふけれど、何時迄も子供ぢやと、思うてお出で遊ばしたは、餘り賢い沙汰ではない、親馬鹿とやら世話にもいふ、子に掛つては平常の智恵も、役に立たぬ」といふ側から、又一人が差出でて「まだ若君が此方に御座つて、子を見ると親に如かずと、書をお読み遊ばすを、度々聞いたが然して見れば、書物も當てにならぬなど、吾身の噂を高直は、耳を留めて篤と聞き、思ひ寄らざる事にあられど、まだ幼し稚しと、心の油断は吾が過失、世は憂き物にありけるかなと、熱々思ふ其處へ、當吉小袖を持て來しかば、直に引き連れ音もせず、出で行く影を彼の集りし、女共は遠目に見付け、殿は今こそ歸らせ給ふ、何れに隠れて居給ひけん」と、一人が云へば皆々驚き、「御袴の音のしたは、冠者の君の慥にお出で、さうならよし聞えても、宜からうと思ふたから、言ひたき儘の今の陰言、若しお聞きなされたら、嗚御苦勞に遊ばさう」、「其の御苦勞はよけれども、情無い奴等ぢやと、私等の御暇が、出やうも知れぬ」と投げ首溜息、顔も青菜に萎々と後は言葉も無かりけり。是より二日計り日を

置き、高直また小毬の方に來れり。繁々見ゆるを嬉しと、思ふか殊に機嫌よく、笑を含みて何や彼や、聞ゆる母の言葉も耳に、入らざる體にて高直は、常に變りて氣色悪しく、斯く坐して在る其中にも、吾が顔を女共が、打視らんかと恥しく、「素より愚の身なれども、母の仰せば聊も、背かじと思ひしを、娘が不所存なるにより、御心に逆ふべき、事の茲に起りしなり」と、いふを聽きて小毬は、笑を含みし顔色たがひ、眼も大きうなり、「そは如何なる事にかあらん、餘命も無き老の末に、心掛りの事を聽くこそ、安かられしと、驚くも、惘然けれど高直は、憤り鎮め難くて近く進み、「娘一人は何事をも打ち頼み置き參らせ、己れ夫婦は中々に、幼き時より目も掛けず。扱其妹は篠清が、手許に育ちて室町の、内君とはなつたれども、御寵愛深からず、其事を歎くに付けつゝ、責めては是なる娘なりと、人に爲さんと樂みしを、思ひの外なる事こそあれ。冠者の御才智、殊に賢く天下に、並ぶ人なき學者とは、なり給はんが高直は、初よりして吾娘と、妻さんの心にて、館に止め置き參らせしと、人の譏りを受けんも嘆てし、媒介無くての婚禮は、賤者だに忌む事にて、冠者の君の御爲にも、善らぬ事にて候ふなり。只さし離れ珍らしき、處へ嫁らせ娶るにも、知らざる女を迎ふるが、善しとは今更申さずとも、誰々も知る事にてあり、今室町にて時めく機嫌は、君より遙に年上なり、いと若やかなる御程には、物

心知る御側仕が、御機嫌に入る者なる故、雁金をば香壽君に、奉らんと思ひたる、事も甲斐なくなり行きし、光氏君も其事を、薄々知ろし召したる故、此頃嵯峨へ冠者の君を、迎へ取られしものなるべし。況てや朝夕御側に、付き添ひ給ひし母上の、左様の氣色を御覽じ知らぬ、事の無しとは思はれず、冠者の君も御孫なれば、其の愛に溺れ給ひ、年月幼き人々の、心に任せて棄て置かれしか、恨しう候しと、言葉忙しく聞えけり、夢にも知らぬ事なれば、小毬はいと淺間しう、覺えていよく顔色變り、さうの給ふは道理なれど、神掛けて此の人々の、下の心を更々知らず、甚口惜しとは御身より、妾が況て思ふのを、二人の者と心でも、合はせた様に此身にまで、罪を負はせて恨みやるのが、又此方からも恨めしい。幼き時より預りて其方達が思はぬ事まで、兎や角と心を附け、育て上げしが心の闇に、惑ひていつが何時までも、子供の様に思ひしは、老に盡たる私が過失。さて其事は誰が告げし、讒言を眞言とせば、君の御名や汚れんと、いふに高直懷より、一通の文取り出し、「淨きたる事には侍らず、彼に列らなる女共は、殘らず知りて母上と、予のみ心付かざるを、目引き袖引き笑ふなり、なほその上に雁金が、小袖を縫はせん手本にと、持たせ歸りし彼が衣の、襟に挟みて此の文あり」と、見すれば小毬いひ争ふ、言葉も無くて吐息をつき、「腹の立つのは道理ながら、もう云ふても詮ない事、篤と心をま

づ沈めや。あの犬猫といふ者は、常は中よく戯れ睦み、遊んで居れど食物に、臨む時は夫を争ひ、中惡くなる者にてあり。人は女の色香に迷ひ、又子の愛に溺るゝ二つの、争ひよりして親しき中も、疎くなるのが世の習慣、是等の事より必ずしも、光氏君を恨めしと、假にも思ひ給ふな」と、教訓すれば涙を浮め、「子の可愛さに心迷ひ、女色に耽りて君恩を、打ち忘れ候ふ程な、道知らずにもはんべらす。大井の里の妾は、己れ心を掛けたる女、夫のみならず若き程、通ひ馴れて女の子迄、生せたる黄昏と、申す女の候ひしが、其の母の好しき、心に倦じて金を與へ、縁切つて後光氏君、我が事をば知ろし召さず、彼が許を問ひ給ふ、微行お供を命ぜられ、其上に彼の黄昏を、連れ退き給ふ其夜さりば、御跡へ入り變り斯々せよとの御指圖、夫さへ否み奉らず、夫迄は彼等親子に、逢はざる様に計らひしが、今は早爲ん方無く、見咎められなば夫迄と、臥したる折柄彼が母、立歸りしが大方ならず、心急ぐ事あるにより、某を見忘れて、立ち騒ぐが可笑さに、吾こそ太郎高直と、名乗りてもまだ心附かず、尤も是は光氏君の、御計策のある事にて、強ちに黄昏に、御心を掛けられしと、にもあらねど二心を、懷く者なら病氣と言ひ做し、此の御供をば致さぬ答、宗入に我貰ひ掛け、呉れぬ娘に手をついて、敬ひ傳き其事此事、口外へ出さぬは、君を大事と思ふから、されば娘が事に付きて、光氏君

と挑み争ふ、心は更に非ざれど、いと口惜しく安からぬ、事には思ひ候」と、座を蹴立て、立ち上れば、彼一夜の陰言の、女共は顔見合せ、何の爲にか打ち解けし、物語りをしたりけん、夫から起りて御不憫や、皆様へ御難儀掛け、このまア末は何うなる事と、打ち擧りてぞ歎きける。雁金は此事を、聞きしか未だ聞かざるか、何心なく居る様の、いと愛らしきを高直は、部屋の口より差覗き、幼心の果敢なくて、誘はれし儘何時となく、遂打ち解けしものならん、然とは知らず行末は、人は勝れし身とせんと、思ひし吾こそ彼にも増して、果敢なければとて出でんとせしが、なほ憤ほりに堪へ兼ねや、雁金が乳母を始め、傳女を呼び集め、さまざまに叱り懲し、さいなみければ女共は、更に返さん言葉もなく、皆さし俯伏き居る中より、當吉は恐るゝ、少し前へ進み出で、「彼様の事の過失は、天子様の大事に遊ばす、姫君にさへありし由、昔々の物語に、記したるは誰も知る、夫は大方媒介の、勧めし事にはんべれど、是は明暮立ち交り、年頃おはしましつるにて、まだ幼なき程なればと、後室様の其儘に、さし置かるゝを私共が、隔て参らす様は無し。一昨年よりは彼方の仰を、守らせられて御遊びも、一つには爲給はず、冠者の君はお行儀正しく、戯言などは假初にも、のたまはぬお性質故、よもやと思ひ誰々も、心の油断に此頃まで、夫と知りたる者は無し、只今となり斯々と、申上げても詮ない事、

夫故控へて居りました」と、言解れて面を和げ、「早隠れあるまじき、事なるべければ此上に、二人の噂をする者あらば、曾以て無き事と、浮名を言ひ止む様にせよ、近き中に雁金も、吾方に引き取らん、彼若君と語らひしを、其方達も善事と、思ひはせまじ」と言ひければ、乳母共は悲しき中にも、嬉しき仰せと打ち悦び、「女御更衣その上にも、位の高い御人があらば、お育て申した身の冥加、夫にして上たい願ひ、冠者の君も優美に、おはしませども光氏君の、お若い時に似申したら、夫れや是れやで雁金様の、お氣の揉める事があらうと、案じこそすれ宜い事とは、更々存じませぬ」など、いふを高直打ち聞いて、「さもあらんさもあらん。雁金はまだ教訓も、言ひ甲斐なき幼ない性質、夫故今は強ひても聞えず。汝等我に成り代り、能く説き諭せ如何にして、不品行にならざるやう、なすべきなんど咳きつゝ、なほ忍びて彼が事、女共に言ひ置くを、此方の一間に洩れ聞く小毬、夫も是も可憫く、思ふ中にも冠者の君、斯くと聞こし召されなば、嗚や悲しと思すべし。昨日今日迄懐に、抱かれておはせしが、早くも大人恥しき、心にならせ給ひしと、彼の過ちを爲給ひしが、尙更に愛らしく、心に思ひ餘りけん、當吉を呼び寄せて、「高直は冠者の君の、御事を情なく、世にあるまじき事の様に、云ふのが私は合點が行かぬ、其方も豫て知つての通り、雁金は妾腹、其の女も程なく下り、高直も如何い

ふ事か、雁金をば愛がらす、篠清は尙更にて、傳く者の無いのが哀れさ、私が手許へ引き取つて、彼様に美しう、育てた故に香壽君に、奉らんの心も付け、夫程大事の娘なら、初から側を放さず、屹度番して居るが宜い、已に去る年高直が、湯殿係の女に手を懸け、是も女の子を生みしが、篠清がむづかりし、故は知られど其女に、娘も付いて館を出でし、今程は近江の國に、居るとは風の便に聞く。雁金も其の通り、妾が取り上げ養はずば、何處に住むも覺束ない、身に成つて居やうも知れぬ。さて室町の内君にと、思ひしのが外れなば、冠者の君より其の外に、勝りし人はよもあらず。雁金も愛しき、孫なればこそ許しもすれ、若し又冠者の君ばかりが、私の孫におはしなば、誰あらう室町御所の、御後見の御惣領、御容御才智、等しき人の世になき公達、月卿雲客の姫上とも、縁を組み赤松づれの、娘を手易く嫁には取らぬと、思ふも愛に溺るゝ故か、其方は何と思やる」と、いふ 此方に高直は、まだ立ち去らず、聞きたるか、聞かすか夫はよくも知らず、若し漏れ聞きなば小毬を、いよく心に恨むなるべし。

修紫田舍源氏第三十編終

修紫田舍源氏第三十一編序

道中雙六の宮の所と、源氏繪の玉葛には、必ず船がなくてはなられど、走馬燈釣花生、折居の舟までも、はや前に出したり。三挺猪牙のやうな形は、後の浮舟に用あれば、なうく此舟畫てたべと、五渡亭の註文に、ほとく棹の、さしつまり思ひつきたる寶船、江戸は正月二日なれど、京は節分の夜にてあれば、それにならひし夢物語、筑紫を出でて都まで、浪乗船の音信に、よき便きく初瀬まで、長き夜並に按じても、とをの眠りの目さましき、趣向の胸にうかばれば、是はことに作りさま、異なる冊子に侍べらず、唯早舟のばやきを専とし、いそげど近づく歳暮、ひびきの灘は物かはなる、大晦日になりしかば、ちひさき提燈飛ぶやうに、來などいふは海賊の、ひたふるなるよりおそろしき、掛乞の迫來にやと、思へど更にせんかたなし。やうく鷄のうたふ聲に、少しいきいづる心地する。

天保巳亥元旦

修紫田舎源氏第三十一編

田舎源氏

赤松の館にて、斯る騒のありし事は、氏仲夢にも知るし召さず。何心なく渡り給へり。是去りし夜は人目繁く、思ふ事共雁金に、聞えず空しく歸りしかば、押し續けて靜なる、夕つかたおはしゝなるべし。小毬常には待侘し、其様面に顯れて、悦び打笑み歡待すを、今宵は何か物ありげに、あるべきかゝりの御物語、聞え上ぐる其序に、君の事より事發り、高直妾を打ち恨み、側仕の女共は、散々叱り懲されたり。如何なる高位の姫君を、迎へ給ふも御心の、儘なる御身におはしなから、淺々敷事をしも、思ひ初めて妾に迄、物思はせて給はるが、心苦しく侍るになん。此事言はじと思ひしかど、人の斯く迄言ひ騒ぐを、知るし召さでおはさんも、可憐ければ聞ゆるなり」と、涙差汲み摺寄るにぞ、氏仲は元來も、心に懸る筋なれば、ハツと思ひて面も赧み、暫時言葉も無かりしが、さあらぬ體にて打ち含笑み、「何事にか侍らん。靜なる處に籠り、學問にのみ心を入れし、其後には打ち絶えて、人に交はる事なければ、恨を受くる覺えもなし」と、口にはいへど恥かしき、氣色に見ゆるが哀さに、小

第三十一編

毬も打ち笑ひ、「過ぎつる事は是非もなし。今より人の口の端に、懸らぬ様に御心を、付け給へ」とて物語を、他へ移せど氏仲は、何事も耳に入らず、是よりしては文などを、通はさんも難かるべしと、思へばいとゞ歎しく、御湯漬など持出づれど、欲く無しとて箸をも取らず、閨へ入れども浮々と、心も空にて眠り兼ね、人靜りしを窺ひて、中障子を開かんと、すれども常には尻差を、差固めもせざりしが、今宵は錠をや差したりけん、押せども引けどもいと固く、更に開くべき氣色無く、人音もせず秋風に、燈火屢々瞬きて、心細さは限なし。閨にも戻らず其儘に、彼の中障子に打ち凭れ、吐息してこそ居たりけれ。此時に雁金も、閨にて不圖目を覺し、軒端に近き吳竹の、風に戦ぐもいと寂しく、我名の雁の鳴き渡る、聲も仄に聞ゆるにぞ、まだ年足らぬ心にも、兎角に思ひ亂るゝにや、雲井の雁も我が如や、悲しと啼きて過ぬるか」と、獨語する其様子、いと若やかに愛らし。冠者君の寢所と此處は、其間遙に隔たれど、聞き馴れし聲なるが故、氏仲之を聞き付けて、心もとなく思しけん、「此處開けよ此處開けよ、當吉は何處にか」と、呼び給へども音もせず。此方の一間に雁金も、耳を欬て當吉を、呼び給ひしは若し今の、思はず言ひし獨語、君は洩れ聞き給ひしかと、いと恥かしく夜着の中へ、顔引入れて臥したれど、同じ思に是も亦、胸のみ跳り目も合はず、されば二人が

閨近く、今宵臥たる女共は、其方此方の氣色を悟り、御心根を可憐と、思へど慰い物言は、悪かり
 なんと互に思ひ、更に知らぬ風情して、偽寝してこそ居たりけれ。雲井之丞はなほ一人、歎息しつゝ、
 小夜半の、風も一入身に染みて、(吹き添ふや雁金だにも寂しきに)と呟きけるが小毬の、部屋に並び
 て臥したれば、若しや目覺めて聞かんかと、其後は聲をも立てず、打ち寢めども何と無く、恥かしう
 て朝風く起き、去る頃迄住み馴れし、一間に到り引隠し、文は書けども當吉初め、親しき女に出で會
 はれば、それを贈らん便無く、さればとて又雁金が、部屋へは今更行き難く、胸塞りて熱々と、心の
 中に打案じ、只口惜しく思ひながら、悄悄々嵯峨へ歸りけり。雁金も亦高直が、言ひ騒しゝ事共は、恥
 かしけれど斯くて我、身の末如何ならん、人々は如何思ひて居るやらん、と迄は深く心も付かず。常
 の如くに女共と、打ち語らひてさまでに父の、打ち腹立ちしを嘆かざる、幼心を乳人共は、あはれ
 と思ひ折に觸れ、早御年も加はれば、假初にも男子とは、親しく語らひ給ひそと、さまざまに諫る
 にぞ、自らも我君と、今迄心安かりしを、悪しき事とや知りたりけん、是より絶えて文も贈らず。さ
 れ共久しく仕へなれ、年長けし女などは、人目の隙を覗ひて、一言許の通はせの、便りは偶々有り
 しなるべし。

高直は小毬を、恨めしと思ふにや、夫より絶えて此方へ來らず。或時妻の篠清と、物語する其序に、
 我室町へ出仕の度々、今の内君富世の前の、御有様を見上ぐるに、晝夜君の御側を、離れずおはしま
 すなれば、其の身は更なり近侍の、女共迄暫しが内も、打寛ぐ暇の無く、苦しと思ふ折もあるべし。
 故にまづ此館へ、迎へ參らせ緩々と、御心を慰めて、其後歸し奉らば、君も一入珍らしと、御覽して
 御寵愛も、増すならんと思ふなり。内君館に御逗留の、其中の御伽には、雁金を召し寄すべしと、彼
 の冠者の君の御事は、景色にも顯はさで、自らに其中を、裂かんと心一つに思ひ、只内君の御氣晴の、
 事に託ちて聞えければ、篠清も打ち絶えし、御顔を見上ぐるが、いと嬉しと歎ぶにぞ、さらばとて高
 直は、取り急ぎて御所へ赴き、件の事共言上に、及びて未だ義植公は、然々に内君へ、御暇の許も無
 きを、なほさまざまにいひ做しつゝ、富世の前の近侍へ、俄に用意を觸れければ、君も今は止め難く、
 思はしゝにやさもあらば、暫しの中はと遊々に、御許容ありしを高直は、打悦びて其の次の日、おの
 れが館へ内君を、請じ參らせ御饗應の、事共は篠清に、打任せ置き夫より直に、母の住居へ立ち越え
 て、今日室町の内君の、渡らせられし事を語り、近く摺り寄り言葉を低くし、今更申すに及ばれ共、雁
 金事は御手許へ、預け置き參らすれば、心懸りは非ざりしが、彼もはや大人に近く、成長もなしたる

なれば、生心付かせられし、御方と立ち交り、へだてなき遊など、爲させんははや憚あり、されば彼を我方へ、一先づ渡し給はれしと、思ひ込んで述べければ、小毬は本意なく思ひ「唯一本の二葉の上、枯れ果て給ひし其後は、心細くいと淋しう、過ぐせし折に嬉しくも、あの孫を得て死ぬまでの、傳き種と思ひ取り、老の心のむづかしきも、是にぞ今迄慰めぬ。夫に思はぬ事起り、御身の心に何とやら、隔てあるこそ辛けれ」と、熱々顔を打視られ、高直は恐れ入り、「如何でか隔の候べき、隔の無き故心に思ふ、事を其儘聞えしなり。只今も申す通り、富世前の御心、餘に屈し給はんと、館へ迎へ参らせたれば、雁金も諸共に、遊びて慰め申させんと、思ふより外仔細なし。長の年月養育み給ひ、人となさせ給ひし大恩、よも疎略には思はじ」と、屹度見上ぐる其の容顔、所詮今更止めても、止まるまじき様なるを、小毬は見て取りて、いと口惜しく思ひけん。常より言葉も荒々しく、「あゝ世の人の心程、定り難き者は無し、冠者の君も雁金も、互にさういふ心なら、疾くより妾へ諷示し、給はゞ計ひ様もあらうに、心に隔のありし故、人の難非を受けらるゝ、併し是は幼き同士、高直は又物事に、よう行き届くと世の人には、誓めらるゝ身にありながら、兎角に妾が心を疑ひ、今雁金を連れ行くとも篠清とはなさぬ中、美しうは行かぬが習、殊には仕へ参らする、其の内君は彼には妹、繼しき母の實の

娘と、思へば幼い心にも、しんせつには大切と、思はぬよりして持憐み其方後悔しやるな」と、涙ぐみつゝ云ふ折しも、冠者の君参り給へり。是は若しも隙あらば、雁金に物云はんとて、月に三度の掟を破り、此頃繁々おはするなりけり。高直が近習の武士、遙か此方に控るを、氏仲は遠目に見付けて、扱は左衛門此處にありと、心付くより恥しく、小毬の方へは行かず、我が住み馴れし一間の内へ、徐隠れて入り給へり。御供には、高直が、子供を初め兒小性など、數多附き添ひ來りしかど、此君の御容顔の、艶麗さには似る者無し。高直は室町へ、是より又出仕して、雁金の迎には、夕つ方参らんと、出で行きながら冠者の君の、渡らせ給ひし様子を知り、扱は兎角に彼が事、思ひ切られぬものなるべし。さ無きとても今迄の、噂も高くはや人も、知りたる上は香壽君の、御添臥には差上げ難し、されば此儘冠者の君に、参らせんかと思ひしが、又熟々と打案じ、さする時には館の内に、亂がはしきとありしを、明々地に知らする道理、先一度は引放ち、其後事を計らふとも、また遅からじ内君の、御徒然に託けて、此方も彼方も取繕ひ、何事なく我方へ、連れ行く初めの思案ぞ善きと、心に問ひ心に答へ、忙しげに歸りけり。小毬は高直が、後影を遙に見送り、腰元女に打向ひ、「最前儘か雁金も、此次の間迄來懸りて、今の様子を立隠れ、聞いて居たのを誓と見た。高直、こそ今迄とは、打つて變つ

て妾が氣に、逆らふ故に此方から云ふ、詞も兎角稜立つなれ。雁金は此の祖母を、よもや恨みもしや
 るまい、さすれば心置かずとも、此方へと呼んで来てたも」と、言葉の中に雁金は、姿をかしく引繕
 ひ、静やかに入來たる。年はやうく十四なれば、大人と子供の間と云ふ、中にも何處やら幼げにて、
 まだ子めかしく美し。小毬熟々顔打守り、今迄片時側を離さず、明暮の弄び、物と思つて樂みしを、
 彼方へ渡さば淋しうて、妾は命もたまるまい、命と云へばもう先の、短い齡の其内に、其方の嫁入は
 見られまいと、案じてゐたれど生きながら、見捨てられんと云ふ事は、更に思ひも付かざりしと、涙
 落せば雁金も、いと恥しきとかなしきに、顔をももたげず泣きにけり。當吉は出で來り、「氏仲君はまだ
 御腹に、おいでなされた昔から、御附き申して居つたれば、大事に存じ上ぐるのは、申さずと知れて
 ある。雁金様をも其君と、同じ様に心得て、お側に仕へ馴れたるを、此方へ遣せと殿様の、御意は餘
 の御我儘、若し雁金様此上に、父君が餘所外へ、縁付けと仰やるまい者でも無いが、必ず御合點遊す
 な」と、云はれて彌々恥しと、思ふか更に詞も無し。小毬は珠數爪繰り、六ヶ敷い事云ひやんな、定
 め難きは人の宿世、善きも悪きも因果ぞ」と、念佛唱へて居たりけり。當吉なほ差し出でて、「冠者の君
 を平武士の、妾で御置き遊ばすを、殿様迄が侮り給ひ、輕蔑して御坐れども、あれは彼方の御學問を、

勵ませ申さんその爲に、光氏君の御計ひ、今に御出世遊ばすと、頭の上がる者はあるまい、人に劣り給
 はぬを、早う御目に懸け度いと、腹立たしさに精一杯、云ひつゝ一間を不圖見れば、屏風の後に冠者
 の君、半ば隠れて此方を窺ひ、人や咎めん怪しまんと、思ひ給ふか身を潜め、心細げにおはする風情、
 御痛はしく思ひ遣り、小毬には御佛に、はや御燈を上げたれば、御看經を遊ばせと、兎角其場を取
 繕ひ、夕暮の騒しき、人に紛れて雁金を、冠者の君の忍ばせ給ふ、其傍へ當吉が、誘引ひて行きしか
 ど、面と面を會はすれば、流石互に恥しく、胸塞りて物言はず、只差俯向き居たりしが、やゝありて
 冠者の君、「高直が心辛く、我事よりして人にまで、難儀を懸くるが苦しき故、思ひ絶えんと思ふ程、
 生憎になほ忘られず、一つに住みし年頃は、さまでに思はざりしにや、語らふ暇の有る時も、隔てゝ
 住しが今更に、悔しうこそ」と、聞ゆれば、「此方も同じ思ひぞ」と、微に答へ雁金が、打泣く顔を哀
 れと守り、「御身も我も父と父の、許へ是より引分れ、顔見る事も叶はぬ様になりなば淋しき折々は、
 戀しう思ひたまはんや」と、いと無邪氣問ひ給へば、少し合點きたりし様、なほ幼げにて愛らし。此
 時に早座敷々々は、銀燭を點しつれ、晝よりも尙明かにて、殿の渡り給へると、先觸れの聲聞ゆるに
 ぞ、雁金はいと恐ろしく、身も打ち震ひ逃げ退かんと、するを氏仲「まづ暫し」と、押し沈めて靜に坐し、

致へて驚く風情も見えず。是は所詮高直に、云ひ騒がれて立ちたる浮名は、今更に消え難し、人目を深く忍びしは、只恥しき故のみなり。我に向ひて何とかせんと、心を定めし故にてあり。はた雁金の傳にも、彼の當吉に引換へて、高直が機嫌に入らんと、追従する女共は、「雁金様は何處にぞ」と、彼方此方と走り廻り、遂には此處に尋ね來り、此體を見て打罵き、「後室様の御部屋のお次、さすれば彼方は御存知でか、若し此事を殿様が、御聞き付けなされたら、夫れこそいよく後室様を、お恨みなされて親子御の、御中が御不和にならうも知れぬ、早く此方へ」と雁金を、無理に誘ひ行く折節、はや高直は入り來り、雁金が出迎へしと、思ひ違へて打ち悦び、「能くこそ能くこそ母上に、御暇乞なすならば、いよく名残を惜しませられ、御歎きを増さんな必定、直様我と來たるべし、跡にて宜しく申しなさん」と、心動まぬ雁金の、手を取り其夜は小毬に、對面もせず引返せば、氏仲は歸るにも、歸り難くて止りしが、人の輕蔑思はんかと、心疚しく例の我が、住みし一間に臥したりしが、廣庭傳ひに人の行く、聲の間近く聞えしも、次第く違さかるは、是れ高直が歸るならんと、思へば心も靜ならず。小毬は冠者の君の、おはしまし、事を聞き、此方へ渡らせ給へとて、腰元に云はせけれど、寢たるやうにて動きもせず、寂しく明かして霜のいと、白きに急ぎ出で給ふ、人に面を見

らるゝが、いと恥しく小毬に、逢ひなば其事此事を、打ち歎かんも苦しければ、嵯峨へ歸りて心安く、一人住まんと朝未明に、取り急ぎ出で給ふなりけり。道の程心細き、事のみ思ひ續くるに、空の氣色もいたう曇り、まだ暗かりければ霜氷、結ぶに袖へ何か降る。(乙女の巻は暫く置き、玉葛の巻へ移る。)

遂に年月古寺の、草葉の露と消え果てし、彼の黄昏が哀れなりし、様を光氏今に忘れず、葦野が召仕の、山吹をさへ其形見と、思へば去る年取上げて、明石姫の傳に、加へさせ給ひければ、山吹は世に有り難き、惠みを嬉しく思ふにつけ、是も如何なる縁やらん、只黄昏の事のみ戀しく、今迄存生居給はゞ、紫の上程の、御寵愛はあらずとも、朝霧の御方には、よも劣り給ふまじ、さまでに深くは思はさる、方々をさへ夫々に、捨てさせ給はぬ御心の、長さを見るに是は況て、思ひ染みさせ給ひし御様子、氏ある人と一列に、こそあらざらめ何れへか、御下館を營まれ、長閑に住ませ給はんものなと、返らぬ事のみ悔みつゝ、詮ては彼の玉葛が、行方を尋ね仕へんと、心に思へど打出しては、言はぬ色なる山吹の、様子を光氏推量し、人無き暇に彼に向ひ、「其方が兼々戀しう思ふ、彼の黄昏が遺子は、予も床しく見ま欲し、館に在りて心のみ、暮ふは詮無き事なれば、京は更なり近國を、

廻りて行方を聞き出せよ。其事とはなしに我がよしなに、計ふべし」とて明石姫、猶壯健に成長すべき、其爲に所々へ、祈願を籠めしと代參を、山吹に言ひ付けられ、近き邊の加茂貴船、松尾鞍馬を初めとし、或は近江の比良唐崎、或は浪華の住吉など、残る隈なく尋れさせ、給へど未だ是ぞと云ふ、手懸りだにも無かりけり。抑彼の玉葛が、幼き頃の事どもは、前の巻に山吹が、物語に粗聞えしかど、猶繰返して昔の事より、委しく茲に記すべし。光氏のいと若き頃、京西洞院に、大兒彌五六郎と云ふ、者あり、妻を朽葉と云ひ、三人の子を持ってり。總領を春之助、二男を彌次郎末の子は、女にて宮城と呼べり。既に前にも云ひし如く、彌五六郎若き頃は、凌晨の父、板島教具の家臣にて、伊勢國に在りけるが、心正しき者なる故、教具が道ならぬ、行を見るに忍びず。度々諫言したりしかば、教具大に憤り、遂に家を追ひ出だしぬ。彌五六郎は力なく、此の西の京へ立ち退きし、程なく教具謀叛を企て、籠城なし、が遂に協はず、義政公に打滅され、板島の家絶えしかば、彌五六郎は口惜しう、思へど更に詮方なく、元より二君に事ふべき、心も無ければ浪人し、其後朽葉は娶りしなり。彼れ板島家に仕へし頃より、美食を好まず衣裳を飾らず、儉約を守りしかば、貯蓄乏しからざりけん、斯く三人の子を持ちし後も、さまでに家は質しからず、朽葉が父の故郷なる、肥前國に些少ながら、豫て田地を

求め置き、彌次郎をばはや疾くに、彼地へ一人下し遣りつ。斯くて後に彌五六郎、五條の町を通りし時、とある家の門にぞむ、女の顔を不圖見れば、故主の娘横雲の、面差に能く似たり。いと不審く近邊の人に、様子を問ふに彼こそは、凌晨と云ふ寡婦なれ。娘と二人住むよしを、語るを聞いて扱は姫君、落城の時遁れ給ひ、憚りて名を呼び換へられしに、疑なしと横雲凌晨、縁ある言葉に大方悟り、直に其家に行き、凌晨に對面し、我事をまづ先として、語り合ひしに教具の、息女に相違無かりしかば、彌五六郎大に悦び、是より度々音づれしが、もと凌晨は武士の娘に、似合はず若き頃よりも、蓮葉の生れなるが上、今はなほ更世に零落、年を積みて我儘募り、彌五六郎が物堅く、主人の如く敬ふを、却つて五月蠅事に思ひ、常に病氣と言ひ做して、偶々ならでは會ひもせず、自ら遠ざくる、風情を悟る彌五六郎、且其行の亂らなるを、見聞く度々深く歎き、嗚呼世に従れて淺猿しや。板島の姫君と、云はれし御身が只一人、擧げられたる娘御に、翌君を迎へんの、心も無くて遊女も、同じ振舞させ給ふは、如何なる事ぞと心には、思へど語らふ者もなく、打ち過ぐる内黄昏が、生みし娘の玉葛を、人に遣らんと云ふを聞き、正しく主君の曾孫にてあり、我れ守り育てて貴ては夫れを、人がましくなし參らせんと、貰ひ受けて山吹が、望むに任せ預け置き、猶凌晨の家の様子を、餘所ながら窺ふに、比

頃は光氏の、忍びおはすと云ふ取沙汰、是はけしからぬ事なりと、思ふ程なく月見の夜、凌晨も黄昏も、何地行きけん更に知れず。其の次の年彼の親子は、某と云ふ古寺にて、自害して亡てたりと、告ぐる者のありければ、心得難く彌五六郎、妻の朽葉を誘ひて、彼の古寺へぞ到りける。

いと物凄く荒廢し、書院と覺しき縁先を、差視いて案内を乞ひ、去年八月月見の夜、しかくの事ありしやと、懇に問ひければ、預りの僧にじり出で、「如何にもさせる事のありし、委しき事は存せれど、光氏君にて在すとやらん、實に光る許なる、若き殿の顔美き娘と、只二人宿られし、夜中許に彼方なる襖を、蹴破りて怪しき女、顯れ出で、其の殿を、害せんと懐劍抜き持ち、突き懸くるを物蔭より、差視きて見たりしが、其様の恐しさに、徐々と其處を立ち退き、其後の事をば知らず。後にて聞けば怪しき女は、初めの娘の母なるが、光氏君に何やらん、恨みある者のよし、光氏君に撃たれし共、又及ばざる無念さに、自害せしとも區々の、噂は定め難けれど、云はるゝ如く親子ながら、此處にて亡てたり」と語るを聞いて、彌五六郎心に驚き、立ち歸る途中朽葉に向ひ、「光氏は凌晨様の、爲には親の敵の子なり、夫と知りつゝ家に宿し、響應るゝは心得すと、思ひ居りしが扱は娘を、囃鳥にして釣寄せ置き、責ては敵の片割なりと、撃つて恨を晴さんの、御心にてありしよな。然らば是より教具の、

餘類の詮議嚴しくあらん、疾く浪人はなしたれども、元板島に仕へし某、捕へられなば言分むづかし、何とかせん」と案すれば、朽葉も胸を痛めしが、心付いて打合點、「それには幸ひ玉葛様の、臍の緒の書付に、赤松太郎高直の、娘なる事書きてあり。此人は今勢ある、左衛門正則殿とやらんの、嫡子にておはするよし、是に便りて御身の難義に、ならぬ様に計らひ給へ、後の證據と思ひし故、玉葛様を預くる時、取り隠して茲に在り」と、見すれど夫は頭を掉り、「道理に似たれど其も危し。我行々は肥前へ引込み、世を安く送らんと、おもひしゆゑに彌次郎は、早く彼處へ下し置く、家内を引連れ彼國へ、我も行きなば安泰ならん」と、遂にこれに心を定め、忙しく用意を整へ、密に家をも人に賣り、彼の山吹に預け置きし、玉葛を暫しが内と、云ひ欺きて迎へ取り、夜に紛れて都を出でぬ。宮城は其年十三なれど、いと賢しき生れなれば、まだ頑是なき玉葛を、さまざまに賺し、こしらへ、起上小法師振鼓、山崎の小櫃など、路々に玩弄物を、調へて機嫌を取り、早く宿り晩く立ち、緩々と浪華に到り、船を索めて各々取乗り、少し心は安まれど、玉葛は山吹を、慕ひて兎角むづかり止まず。朽葉もさまざま介抱し、「あの山吹と云はるゝは、貴方の實の母上ならねば、さまでに戀しう思すな」と、聞いて幼き心にも、不審うや思ひけん、「夫なら實の母様の、處へ連れて行きやるのか」と、片言交りに云ひける

にぞ、「其の母上は」と顔見合せ、朽葉も宮城も打泣くを、彌五六郎制し止め、「船にて涙を零すのは、不吉なりとて思む事なり。御利發ながらまだお四歳、浮かとした事聞ゆるな、いと美しう只今から、氣高く清らにおはしますを、雜人共の乗る船にて、御傳もしかなく、いとあはれなる御有様、先祖よりして高恩を、蒙りたる主君の形見は、此一方より他に無し、赤松の父君に、ほのめかせよと此頃朽葉は、勧めしかども疾く縁を、絶れて見知り給ふまじ、よし又夫に定められ、取上げ給はば彼方へ置かれ、最早お顔も見られじと、夫も悲しく誘ひ申し、人がましく爲し參らせん、心なれども我は早、六十近く御成長まで、傳かん餘命はなし、朽葉は未だ四十に足らず、我が亡き後も御主君の、御血筋と云ふ事を、必ず忘れそ大切に、守り奉れ」と思はずも、目をしばたけば總領の、春之助が差出でて、「母上や妹の、打泣きたるを止められし、貴君が不覺の御落涙、心得難く候なり。及ばすながら私が、命に換へても玉葛様は、世に出だし參らせて、御本意は達します」と、父にも劣らず心いと、正し者きにてありければ、親切見えて聞ゆるに、彌五六郎も氣を取直し、「オ、頼母しく、彌二郎と語り合ひてよしなに頼む」と、又物語を他へ移し、教具君の御氣性を、受け續がれて、凌晨様は、御心暴々しく、其上若うおはせし頃は、御身持も良らぬ様子、何者を夫にされしか、語られもせず問

ひもせず。夫に引換へ黄昏様は、物事優しく御氣輕にて、心若き方なれば、斯く船路の面白き、所を見せ申さば、嗚御悦びなさうに、併し此世に御座るなら、我等も筑紫へ下りませまい」と、聞いて朽葉も宮城は殊更、京の事ども思ひ出で、返る波も羨しく、心細きに船子共、暴々しき聲打揚げて、「田舎女郎に京女郎、何故に京から此處へ来て、波に揉れて濱風に、色の黒いが御笑止や。」と謔ふを聞いて母娘、二人對ひて泣きにけり。尙人々の心々に、語り合ふ言種は、哀れなる事いと多く、五月蠅ければ書き漏しつ。鐘が岬などを過ぎ、日數を経て志す、處に到り着きしかど、彌二郎の外には一人も、彌五六郎は身寄なく、朽葉も都の生れながら、父の故郷なるにより、彼の彌二郎を打頼みし、従兄弟再従兄弟など云ふ、遠き由縁の者は多し。まづ是を力として、やう／＼に住み着きけれど、遙に都の隔たりしが、心細う其方の空のみ、眺められて只玉葛を、傳きものに明し暮し、少し心も静まりければ、まず當國に聞えたる、鏡の宮に參詣し、御行末の事どもを、頼み置かんと彌五六郎は、彌二郎に案内させ、春之助を留守に置き、家内を引き連れ立ち出でて、彼の御社に到り見るに、山はさまでに高かられど、木立物古り神々しく、向ひは名に負ふ松浦濁、砂は玉を敷きたる如く、風に狂ひし松の姿、浪に晒し、巖の形、鹽屋の煙は近く靡き、帆懸けし舟は遠く走り、其の景色云はん

方なく、是にぞ少し月頃の、物思ひは忘るゝなるべし。これ夏の頃なりにけん。路に咲きたる姫百合を、宮城が手折りて玉葛の、手に持たせしを彌五六郎、打見遣りて莞爾と笑ひ、「折も折所も所、是姫百合と御名を更へよ、との御神の告なるべし。其事を如何にと云ふに、今迄度々聞えし如く、板島の御血筋に、紛れ無ければ我知らず、姫君よ姫上よと、呼参らする事のあり、若し人の怪みて、咎むる時は姫百合と、呼ぶ故なりと云ひなせば、何の仔細無かるべし」と、是より假に名を改め、家内の者は君と謂はんも、耳立たんとて姫様と、呼べば田舎の心安さは、誰聞き咎むる者も無く、却つて近邊の人は、大兒の姫君彌五六郎の、孫姫は好子なりと、取々に噂しつゝ、是より事無く年月経ち、春之助は妻を迎へ、宮城には婿取せしが、何れも心信實くしく、夫婦中宜く父母に、孝行をともし盡し、玉葛へ大切に、仕へて睦しかりければ、次第に家は富裕になり、田地を多く買ひ求め、彌二郎は又商賣の、道を覚えて京浪華へ、常に往來ひなんどして、夢の間に早や玉葛は、十三になりければ、彌五六郎今は早、心安く思ひつゝ、子供の年も加りて、處にも住み着きたれば、己れは無くとも事關けまじ、さればまづ姫上を、京へ誘ひ参らせんと、其の用意をこそ爲たりけれ。此時に彌二郎は、例の商_{ちぎなひもの}品_をを積み、去る頃船出したりしが、漸くに都まで、行き着きぬらんと思ふ頃、早くも歸り、近きに

父が、玉葛に傳きて、登りなんとする由を聞き、草鞋も解くや解かず、彌五六郎に打ち向ひ、「未だ聞し召されずや、都には山名音川、今合戦の眞最中、加之室町の、御二男の光氏君、須磨とやらん明石とやらんへ、下らせられて西國武士、山名へ加勢する者を、制し止め給ふとて、船の通ひ手易からず、己れも夫故播磨より、乗戻して候なり。假令勢ある人にもせよ、彼處は通り難からん、御上京はまづ暫く、待たせ給へ」と止めければ、清々しくも出立たず。躊躇うちに彌五六郎、重き病に打臥して、死なんとする心地にも、玉葛が美しき、有様を熟々眺め、「母上は疾く亡せ給ひ、頼み給はん方も無し、我さへ打ち捨て参らせなば、如何なる御身に成り行かん、賤しき田舎に生ひ立ち給ふも、畏れ多き心地せられ、何時しか京に御供して、縁を求め父君初め、それへ知らせ申し、世に出し参らせんも、都は廣き處なれば、いと心安かるべしと、急ぎつるを此儘に、命絶ゆるぞ口惜しき、さは云へ積る年の上、歎くも愚痴の至りなり。三人の子供等よ、唯此の姫を都へ遷し奉らんと思ふべし。我が後世を弔ふは、心に懸けそ」と聞え知らせ、婿と嫁との二人へは、主の血筋と云ふをば知らせず、我孫ながら傳くべき、事由ある方と云ひなして、兄と妹が上京せば、淋しからんが此處に留り、家を大事に守れよと、残る事なく遺言し、其夜俄に亡せぬれば、家内の歎き大方ならず、其等の事を

記さんには、冗長しければ例の漏しつ。程なく忌も明けければ、唯京の立立ちを、人々心に懸くれ共、彼處の合戦なほ亂れ、宗全が軍兵共、はや浪華まで押し下り、光氏君の假館を、焼き拂ひたるに因り、彼の君明石へ移られしを、宗入の一人娘、膽切とか打切とか、甘さうな名なれども、心飽くまで不敵にて、戀慕に事寄せ光氏君を、害せんとせし天罰にて、高潮寄せて海に沈みし、靈魂龍女の形と化し、夜毎々々海に顯れしを、鬼得院と云ふ修験者、祈り沈めん其爲に、御祓に出でしを過つて、光氏君に射留められ、彼處の騷動都に勝り、彼の軍兵共此國へも、今に攻め來るなるととて、ありし事を其儘に、語りてだにも物凄きに、偽をさへ取交せて、風聞しきりにありければ、京上りの事は更なり、此處に居るだに恐ろしく、我にも非ず年を過ぐすに、苔なりし玉葛が、花の顔漸咲き出で、母黄昏にも清らさば、勝りし上に父高直の、胤さへ加はる故やらん、人品の打上り、美しげにて心いと、賢けれども打見には、只柔和にて人愛能く、假にも蓮葉の事は無し、元來も春之助、孝心厚き者なれば、父が臨終に言ひ置きし、事どもを心に懸け、年月経れども露忘れず、此の姫君に傳くこそ、即ち父に事ふるなれと、入費を厭はず京よりして、腰元を召し抱へ、又は琴を教ふる者を、家に留め置きなどして、都の風を自から、玉葛に見習はせ、彼處へ登りし其折に、人に笑はせ參らせじと、彌五

六郎が世に在りし、時にも増して心を用ひ、何不足なくしたりしかば、さらぬだに田舎には、似氣なく見えし玉葛の、益々高位の姫君にも、恥しからぬ行儀となり、手なども拙からず、歌俳諧の道さへも、大略は覚えしかば、遠き近き田舎人、其姿を見たるは更なり、只聞き傳へし者さへも、戀ひ慕ひつゝ、傳手を求め、文玉章を贈る事、更に其數を知らず、又押し付けて婿にならん、嫁に迎へんなんども、云ふ、媒介は引きも切らず、彌が上に重りて、門前は市をなし、腰元共は玉葛が、手にだに觸れぬ玉章を、取り捨つるを勤めとし、母の朽葉は媒介に、斷り云ふに日を暮し、更に暇の無かりしかど、如何でか斯る片田舎の、人に添はせ參らせん、忌々しやと思ふが故、誰のもく聞き入れず、見給ふ如く容貌は、まづ普通に侍れど、甚しき不具者なれば、中々人には參らせ難し、尼になして我が生涯、傍に置く心なりと、云ひ散らしたりければ、媒介初め戀ひ慕ひし、人々は不審して、故彌五六が孫娘は、不具といふ事にてあり、ア、あたらず惜むべし、我は一度垣間見しが、指も五本、目も二つ、確にあれば啞かも知らじと、云へば一人が頭を振り、琴を弾いて唄論ふを、己れば日外洩れ聞きしが、其聲の麗しさ、谷の戸出づる鶯の、初音も如何で及ぶべき、されば啞にもあらじかし、思ふに夜半に首が抜け出で、油を舐むるにあらんなど、心々に噂するを、朽葉は追々傳へ聞くと、又忌々しく如何

にもして、都へお供し父君に、知らせ申さん斯くばかり、艶麗なる御様を、見せ参らせなば疎略には、爲給ふまじなど云ひ歎けば、春之助宮城等も、心の中には京上りを急ぎ思へど妻を呼び、夫を迎へて其等の者の、身寄を初め知人も、次第に多く初めには、厭ひし田舎に今は住み馴れ、却つて離れ兼ねたりし、都は遙々遠離り、年月も経ちたれば、如何あらんと覺束なく、出で立ち兼ねて躊躇ぬ。玉葛は早十は廿と、云ふ年も已に近づき、熟々と案するに、母には幼き時に別れ、父はあれども傾り無し、元は家來の筋にもせよ、さまでに縁由も無き人に、養はるゝこそ怪しけれ。兎にも角にも世の中は、憂き者なりと思ひ知り、守袋に大和國、初瀬寺の觀音の、御體ありしを亡母の、形身と思ひ明暮に、念するのみにて強ちに、京へ上らん心も無し。此大兒の住む所は、平戸の莊となん云ひける、其邊に近き者、玉葛が日に添ひて、なほ麗しく尼にもせざるを、見るからに彼の不具と云ひしは、偽なりと悟り知り、媒介共絶えず音づれ、彼よ是よと云ひ入るゝは、耳聳しきまでになん。茲に隣れる肥後國に、信樂現太夫とて、親族一類いと廣く、彼處にては名をも知られ、勢嚴しき士ありけり。郷士にはありながら、代々此處に住み馴れて、田畑多く持ち傳へ、家富み榮えける程に、させる由緒もあらざれど、貧しき活計の百姓共、彼が目の前に出づる時は、太夫の殿太夫の殿と、尊敬するに

思ひ上り、陸言に現太めと、誹らるる事をば知らず。普通の國司は、予には及ばじものをとて、日に沿ひ心猛々しく人を恵み人に情を、懸くる事は露知らぬ、斯く野卑き男子ながら、女にのみはいと優しく、思ふ儘に美貌ある、女を集めて見んと思ひ、これには財を聊か惜まず、數多妾を抱へけるが、肥前國より來たりし者共、玉にもあれ衣にもあれ、白く艶ある物を見ては、大兒の姫のやうなりと、言ひ合へるを不圖耳に止め、遂に此玉葛が事を聽き付け、其は何程の不具なりとも、打見だに苦しからずば、我が廣き住居の奥に、籠め置きて人にも會はせず、隠し持たんに憚り無しと、いと懇に人を以て、云ひ入るれど例の如く、尼になりなん願なりと、答へて更に承引かざれば、現太いよく其は惜しき、者にてありとて思ひ止まず、なほ大兒の家内の様子な、聞き合するに春之助は、唯一向に心正しく、頑固にして斯る筋の、談合人とはなし難し、其弟彌二郎は生業の爲め京へも往來、人に多く交らひて、心輕き者なりと、或人の云ひければ、夫こそ善けれと現太は悦び、急ぎ彼彌二郎を、吾家へ呼び迎へ、酒肴を列れて饗應し、扱玉葛が事を聞え、己れが思ふ様になりなば、何れもと縁者なり、心を協せて萬事を執行は、勢を、近國に振ふべし、米穀織物綿の類、何にもあれ商賣物、皆手許より送るべし、和殿も三十は越え給はんが、未だ妻女の無き由聞けり、吾が召仕の女共、心に

叶ふ者あらば、何れなり共望み給へ、見苦しからず仕度して、参らせんなど善事を、揃へて語り聞かせしかば、始めの内こそ此現太が、妻と爲し参らせんは、餘りに似氣無くいと惜しき、事なりなんと思ひしが、遂には慾に心迷ひ、彌二郎は打合點き、さ程迄に思されなば、母の手前を取繕ひ、兄にも得心さすべきなり、夫々の所迄、跡より來たられ音づれを、待ち給へとて手筈を定め、彌二郎は家に歸り、朽葉が機嫌を見合はせて、彼の現太夫が玉葛を、理無く懇望する由を、言葉飾り云ひ陳れ、彼の國人は恐ろしき、人のやうにも言ひ做せど、是れ皆富貴を羨ましく、思ふよりの嫉みにて、仁義の道をも能く辨へ、其の行いと正し。されば是より吾々が、身の寄邊と頼まんに、上も無く頼母しき、人と云ふは此の現太なり。其の恩を蒙る者、此國にさへ多ければ、彼が詞に従はず、惡みを受けなば此の近き、邊に住居は難かるべし。姫上は貴人の、御血筋とは申せども、其の父君も取り上げ給はず、人にも知られずおはしなば、何の甲斐かは候べき、假令素性は卑しくとも、黄金を積み足なき、此人の斯く懇に、思ひを懸けて言ひ寄るは、御幸とこそ覺ゆれ、よし逃げ隠れ給ふとも、是に上越す事はあらず、彼者負けじ魂に、怒る時んば如何なる仇を、爲さんも知らじと云ひ嚇され、如何にせんかと母朽葉、春之助を見返れば、莞爾と笑ひ膝行出で、「是は珍しき事を聞く、京に誘ひ参

らせよと、吳々父はのたまひしが、田舎人の妻にせよとの、御遺言は覺えずしと、更に承引く氣色なし。宮城は涙目に持ちて、父上の仰には、黄昏様は優しきお性質、家に迎へて侍かんと、思ふに甲斐なく御行方知れず、剩へ古寺にて、果敢なくならせ給ひしと、聞きしに相違はよもあらじ。さすれば貴方の御形見は、此の姫上とていたはらせ、給ひし者を荒男子に、立ち交り給へるを、など打ち眺めて居られんかすと、泣き惑ひなどする事は、夢にも知らず現太夫、己れ斯くまで心を盡すを、彼方にも疎略には、思ふまじと自ら誇り、早くも此國に立ち越え、彌二郎と語らひ合ひし、所にまづ足を留め、其所より文など書きておこす。漢土の紙の美しきに、目の止りけん玉葛が、宮城とよもに披き見るに、手などは左迄に穢なげなう、文章の續け様、いとをかしう書きたりと、己れは思ひしなるべけれど、其の言葉ぞ田舎びたる、打ち笑ひて搔遣り捨て、重ねてのは見る者だに無し。現太夫は心苛れ、彼語らひし彌二郎と、打ち連れ立ちて案内もなく、押し付けに此家に来れり。年の程三十許り、丈高う物物しく、肥りて穢氣なけれども、思ひなし厭しく、暴なる振舞は、赤本に畫がきたる、公平とも見ゆれど、己れば顔色愉快に、皺枯聲を打ち揚げて、彼是と囁り居たり。抑女を慕ふ者は、夜に隠れて來るこそよけれ、さらすば秋の夕なら、哀れにも見えなました。是は様の變りたる。春の晝にて華麗し。

朽葉は豫て勢ある、者なる由を聞きしかば、其心に逆はじと、まづ出會うて初對面の、禮儀を述べれば現太は、う、う、と計り答ひて罷搔撫で、「此處の主人彌五六殿、人を懐け世帯を賑はし、手廣にさるゝを傳へ聴き、何時ぞは音づれ相親しく、語らはんと存ぜしが、其の志も見せざるうち、逝去られたる代りには、孫姫なりと迎ひ取り、責ては年忌佛事なりと、執行ひて亡き後に、事ふまつらん志を、起して今日は只管に、罷り出でて候が、其の姫上は實は貴人の、御胤なる由承はる、さすればいと恐れ多し。妻女と申すは公然、内々は主君と思ひ、某が此の頭上に、捧げて敬ひ奉らん。御身の何か溢々に、おはしげなるも疾く承知、宿に良らぬ妾なんども、數多抱へて侍るを、聞し召れし故ならん、など此奴輩と同じ様に、取扱ひ申すべき、姫上をば后妃の位に、劣らぬ様に侍かん」と、いと宜氣に云ひ續く。朽葉はほつと息を吐き、「斯くのたまふは幸ながら、如何なる前世の報にや、人に見せんは憚りある、御身に生れ付かせられ、其の仰にも従ひ難き、妾が心苦しさを、推し給へ」と云ひければ、呵々と打ち笑ひ、「イヤ其遠慮は更々無用、假令盲目、壁でも一旦貰ひ受けたるを、見捨つべき某ならず、肥後は更なり此邊の近國、社の破損寺の修繕、やれ敷石の鳥居のと、云ふまでも皆己れが厄介、すりや國の中の佛神は、皆靡き従うて、彼方から却つて此方を拜む。夫等の者に言ひ付けなば、如何

なる不具も癒るは必定、扱そればかりの事ならば、何も他に障は無い、當月の廿日過ぎ、幾日が宜しう御座らう」と、己一人で了解顔、朽葉は殆ど持て餘し、「三月は櫻醒とか思む月なれば、跡々から申し上げん」などとて、云ひ遁るればさらばとて、現太は下りて行く際に、歌詠まゝほしかりけん、稍久しく思ひ回らし、やうく發句に取り纏め、(違はじな花の鏡の神かけて、)「彼處に清き御手洗を、花の鏡に取りなしたる、此發句は吾ながら、吟し得たると存するが、御返りは如何にぞ」と、打ち笑みたるも初心らし。朽葉は彼が暴々しく、物云ふだにも恐しければ、更に返句の胸に浮ます、宮城や嫁に勸めても、斯る事は知らずとて、取り合はざれば詮方なく、「只口に出る儘に、(散りやせん花の鏡の宮なれば)」と云ふ聲も戦慄たり。現太は是を聞き咎め、「違はじとこそ吾は云ひつれ、花に比へて仇々しく、心の散らんと疑ひしは、心得難し」と思ひも懸けず、目に稜立て、立ち歸る、其氣色の凄じさに、怯えて朽葉は色も無し。宮城は遠く立ち退きて、只打笑ひ居たりしが、朽葉が驚き恐れたる、有様を見て走り出で、現太が前に手をつかへ、「今母の申しゝは、お心の散る事ならず、君の浮名が花の様に、潑と立たんを厭ひし意、鏡の宮の神懸けて、それに違ひは侍らじ」と解き諭せば、「如何様然う、如何様然う」と打合點き、扱面白き言ひ廻し、己れ杯は田舎者の、名こそ侍れ物知らぬ、土百姓とは等し

からず。都の人とて何も別に、變りしことは無き者なり。京鎌倉の事どもは、よく知りて侍れば、思ひ悔り給ひそとて、又歌詠まんとさまぐに打案すれど詠み得ずやありけん、其の儘彌二郎を、引連れてこそ出で行きけれ。朽葉は心も心ならず、「二郎が彼に荷擔して、御筋目の事不具とは、偽りなる事云ひしと覺し。今迄頼みにしつる子さへ、斯く恐ろしき心となれば、はや此の國に姫上の、おはさん事は危し」と、春之助に京上りを、急ぎ責むれば小首を傾け、「如何にしてかは此處を逃れん、のたまふ如く弟まで、讐敵と成つて語ひ合はさん、人とても他に無く、彼の現太に悪まれては、身動きせんも難かるべし、なまじひなる事仕出して、姫上迄憂目を見せ、奉らんも量られず」と、途方に暮れば玉葛が、差寄りて聲を潜め、「折々妾が夢の中に、妾は其方の母なりと、いと艶麗なる女中の見え、物語などし給ひしが、涙の草と思ひし故、御身達には今迄語らず、此の春の節分に、數寢したりし寶船、次第ノノに大きうなり、寢屋は忽ち青海原、怪しと見る内例の母上、妾の手を取り彼の船にて、東の方へ行く時は、幸ありとて諸共に、乗るかと思へば夢は覺め、餘り不思議と寶船は、流しもやらず茲に在り、正しく母の告なれば、都へ誘ひ給ふには、何の障も無かるべし」と、語るを聽いて春之助、若し今之を否みなば、思ひ詰めて姫上の、御自害あらんも量られずと、心付きてさあらばい

よく、御供せんと二郎にも、隠して用意を整へければ、現太はこの事夢にも知らず、日毎の様につるゝを好き程に答へ置き、春之助を先に立て、母の朽葉妹の宮城も、玉葛に附き添ひて、夜逃げ出でて船に乗る、現太夫は肥後に歸り、四月になれば日を撰び、迎へに來んと云ひつる故、其前にとて逃ぐるなりけり。宮城も都へ立ち歸るは、嬉しきものから年月馴し、夫を此處に残し置くと、松浦の宮の前の渚の、景色のみは忘れ兼ね、顧み勝にいと悲し。斯く逃げぬる由自から、聞き出さば現太夫、例の負じ魂に、追ひ來ななかと思ひ量り、早船とて造り様、異なる船を借りたるに、追風さへも吹き進めば、危き迄に走り登り、音に響きの灘も過ぎ、海賊の船にやあらん、小き舟の飛ぶ様に、來るなんどいふものあり、海賊よりも恐しき、彼の人の追手かと、魂も身に添はず、唐泊を押し行きて、川尻近くなる程に、早や此處迄は追ふまじと、息出づる心地すれば、又國の事案じられ、夫や妻の旅立つを知らざることばよもあらじと、跡に残し、二人の者を、彌二郎が呵責んか、此事も言ひ置くべきを、夫々も忘れたりと、少し心の静りてぞ、さまぐに思ひ續くる。實に此の人々の身の上は、岸を離れて波風に、漂ふ舟よりいと浮きたり。現太に悪くまれ家にさへ、中違ひし者出來しかば、歸るべき處も無く、又た都に行き着くとも、これと頼まん方もなし。唯姫上の御爲と、父の臨終の言葉を

守り、淺慮あはれいにも立ち出でて、末は如何にならんずらんと、今更呆あきれて覺ゆれど、如何せんとして急ぎ登り、九條に昔朽葉くちばが知れる、人の残りてありしを訪ひ、其の邊あたにまづ住ひけり。

修紫田舍源氏第三十一編終

修紫田舍源氏第三十二編序

羽二重はぶたへは絹きぬの最上さいじやう、なれども雨衣かづはにしたらんには、兜羅綿とうるめんにだに劣り、縮緬ちりめんの前垂まへたれも、手を拭ぬぐふに心地こゝち悪く、木綿もめん程用はたりまじ。野良帽子やらぼうしの紫むらさは、承應しょうおうより今に廢すたらず、赤裳あかもひきと誄よみしを見れば、萬葉時代まんやふじだいも長編ながびは、緋ひなりし事必せり。されば色も地ぢあひも、ありふれたるに及しく事なし、とは知りながら足利あしかが絹きぬで、五ツ衣ぎんを仕立したてかゝりし、不案ぶあんじもとかくして、十二重じふにじゆうの十二年じふにねん、續つづきて乙女おとめの卷まきに至り、五節ごせちの舞まひの衣裳いしやうにこまり、大原祭おほはらまつりの田舎模樣いなかもやう、梅うめに鶯うぐいすの卷まきの、男踏歌おとこたがと縫ぬいあはせ、玉葛たまくさの筑紫綿つくしわたを、おしこんでは見たれども、原來もとより雅言みやげんの借物かりものなれば、横よこ豎たても揃そろねを、知らぬ書房ほんやは是をさへ、春着はるぎにせんと急いそぐもをかし。

天保十年庚子孟春

修紫田舍源氏第三十二編

大原野の祭は、二月はじめの卯の日なり。彼の業平の朝臣が、神代の事も思ひ出づらめと、詠み給ひし處にて、いと舊き御社なれば、祭祀も古への風俗残り、をかしき事どもいと多く、田舎びたる嫁娘を、所柄なる黒木賣、又は潮汲む蟹などに装たせ、神輿に附いて大路を練行き、或は濁たる聲打上げ、今様めきたる小唄を歌ひ、聊か舞振など模すもありて、中々に興ありと、義尙公聞き及ばれ、東山へは彼處より遙々の道ながら呼び寄せて、見物せんかと、光氏君にのたまひければ、其は御慰めに然るべし、序ながら我方へも、招きて見んと目を定め、其事を大原へ、言ひ遣はし給ひければ、里人共は打歡び、其日は取り分け粧ひ飾り、夕暮方より出で立ちしが、まづ東山に赴きて、夫より嵯峨の館へ参る、道の程のいと遠くて、夜の明方になりけり。入方の月曇りなく澄み増りて、薄雪の少し降れる庭の景色も唯ならぬに、彼の田舎の娘共は、揚うてや爲けんしかくくに、唄歌ふ者も無く、たゞ差俯向き恥かしげに、練り行くのみにて一差の、舞まふ事もせざりけり。内君はじめ方々は、物

見に渡り給ふべく、豫て光氏觸れ置きければ、右左の廊下を劃り、棧敷として夫々の、席へ列り給ふ序に、花里は紫へ、目見えなし、が見物の、問はこれにとのたまひて、一處におはする故、屏風ばかりを隔てたり。雲井の承より案内ありけん、高直が悴ども、此方に罷り集ひしが、鶴鶴様の若衆髪櫛簪の飾も見えず、伽羅の匂も無きものから、何れも容貌艶なれば、女に増りて花々し。借又庭へ女の分は、貴賤を撰ばず立ち入りて、見物苦しからざる由、觸れられければ聞き傳へ、群り集まる其中に、惟吉が妻の手巻、夫の妹小藤を誘ひ、たち隠れてありける中、夜はほのくと明け行くに、雪や、散りてそゞろ寒きも厭はず、社人は神樂を奏し、練子共のやうくに、唄ふも彼の鄙びたる、聲の却つて溫和しく、棧敷の御方々、何れも劣らぬ今様の、縫箔、摺箔、染小袖、袂も裾も御簾屏風に、翻れ出でたるその色合、春の錦に譬へたる、柳櫻をこき交ぜし、霞の中かと思渡され、實に心ゆく観物なり。此の惟吉が妹小藤は、年は待宵程なれど、顔は櫻、姿は柳、梅の匂を掛香の、蒸りもいと婀娜しき、風俗にてありければ、暗き中こそ人々の、心も付かれ曙の、空白みゆく頃よりは、誰々も目を止むる、風情を手巻は心づき、明け果てぬ中家に歸り、彼の祭の興ありし、事ども良人に物語れば、惟吉は眉を顰め、「己れば元名乗り出づる、苗字だになき軽き者の、悴なりしが光氏君の、

御相手に不圖召し出だされ、須磨明石へも御供し、其方も彼處の浦曲まで、辛き目を見て立ち越えし、夫れ彼の功あるにより、竹藤といふお家にて、舊臣の苗字を賜はり、赤松仁木の歴々には、劣ると雖ども昵近の、武士の中には重立ちたる、人に登庸給ひしなれば、昔の如く軽々しき、夜行きなどとは然るべからず。彼の明石への御使の、其の折汝も紫の、上より直の仰せも受け、お目見えは尙更以つて、度々なし、事なれば、練物見物いたし度、願を言ひ上げ御次へ、何とて罷り出でざるぞ、雑人どもに打交り、御庭先へ立ち入りしは、はした無き事なりと、いひ諭ししが、夫より四五日、過ぎて俄に惟吉に、罷り出でよとの御召あり。何事かはと取る物も、取り敢へず立ち出でければ、光氏邊の人を遠ざけ、惟吉を近く呼び、「大原祭は昔の風俗、残りてありと義尙公、聞及れて東山へ、此頃招きて見物あり。我が此館へも喚び寄せしが、又其事を室町へ、申し上げたるものありけん、吾も見んとの仰せあり、されども何れも田舎人、唄ふ歌は片言まじり、風俗も不束にて、御目に觸れんは憚あり、さればかの今様めきし、小唄ををかしく作りかへ、練子の女も見苦しからぬを、此方に撰り出で彼の神事の、様を模して室町の、御覽に入れんと思へども、此館の腰元女を、出し立て、は珍らしからず、此の頃神事の其夜さり、汝が妻の手巻が、顔よき一人の娘を引連れて、庭の群集に打ち紛れ、イみ居

たるを見たりし故、歸途に人を付け、委しき事を聞き來たれと、言ひ付け遣りしがその者歸りて、彼の娘は汝の妹、名は小藤といふよし告げつ、斯く愛らしき妹ありと、今迄更に知らざりし。彼の室町の御覽の練子に、彼を某差し上げん、御目に留れば止め置かれ、召仕はれんの御沙汰なり。明日はまづ我方へ、夫彼集ふ筈なれば、汝も小藤を連れ來れ」との、仰に「畏み候」と、惟吉は又取り急ぎ、立ち戻りて妻妹に、件の事ども委しく語り、我にも言はず小藤を誘ひ、嵯峨のお庭へ祭の夜、参りたる過失の、功名となり光氏君の、御目に留りて斯る仰は、世に有り難き事ながら、其儘御所へ止め置かれ、召使はれんは願しからず、云はずと知れし某は、光氏君の御取立て、その妹にて有んなれば、室町の朋輩に、侮られんも愕然、且は君の御手の掛るを、待ちてしかせしなどとして、人の譏もうたてしと、云ふを手巻が取り成して「内々にては姫君と、傳く程な歴々の、娘御さへも御所勤は、願うて上るが世の習慣、何の恥かはんべらん」と、道理を盡しなほさまなく、言はれて惟吉手を又き「嗚呼同じ宮仕も、嵯峨の御館にあるならば、快からん者を」とて、いとわびしげにて居たりしが、仰せなれば力なく、小藤を明日は参らすべき、其の用意をこそ爲たりけれ。次の日に嵯峨の館へ、召に應じて集るは、仁木良清が娘の紋彌、是は良清勘當を、受けざる前に擧げしにて、幼き頃より其の生みし、妾に

預け置きたるを、此頃邸に迎へしなり。糺よりも神事の練子を、参らせんとて島山、重篤が季の娘、八重梅をぞ出さるゝ、介添は早百合なり、大井よりは愛らしきが、よきとや由縁に千鳥が添ふ、其外近習の侍ども、或は娘或は妹と、美じきを撰り整へ、夕掛けて集りければ、光氏は機嫌よく、我も御所へ奉らん、その爲に設け置きし、童ありとて先刻に、呼び寄せ置きし例の小藤を、招き寄せ給ひければ、打ち羞らひて跪居たる、その艶麗さは花の中の、花と云ふべき様なるを、早百合は熟々打視り、「何處よりも艶ある、玉を取り出でこれ見よと、お心憎い遊ばし方、さりながら糺には、玉にも優る黄金あり、お次までは誘ひしが、二人まで差上げんは、如何と存じ差控へ、待たせ置きてはんべる」と、聞え上ぐれば光氏打笑み、「遠慮なすも事による、夫こそ望む處なれ、早々是へ」とのたまへば、早百合は靜にたちながら、「彼をお前に出だしたなば、今迄花と見給ひしも、深山の朽木とならんのが、如何にしてもお笑止なし」と輕蔑笑にお次へ出で、頓て誘ひ御前近く、押直すを見給へば、思ひがけなや彼糺の、荒れ果てし頃門守の、翁が愛女なる、はなの色の紅なり。早や四十歳にも近からんを、眉を濃く島田を高く、又と等しき振の袖、いと華々しく粧ひたり。物に動ぜぬ光氏も、是には流石驚きけん、言葉もなくて打視るに、其の昔黒髪ばかりは、若やかなりしも年頃に、衰へ行きて瀧つ瀬の、

白き筋さへ打交り、變らぬものは霞にも、紛れぬ花の色のみなり。打ち向ふだに恐しきや、光氏少し顔を背け、「稻舟が然々せよとの、指圖が早百合其方の案じか、襦袢にせし織物は、美しけれど丈高く、瘦せたる故か見すばらし、唯綿厚うふくくと、したる小袖が似合んと、仰せに紅輕忽に、聲を出して打笑ひ、「内君や彼早百合が、之を着ると姿が宜う、なると云うて皮胴着も、取られて寒く侍る」と、いふ聲も戦慄て、身を打ち震ふが哀れさに、絹綾綿など取り寄せて、光氏は彼に賜ひ、何れも是より館に止め置き、神事に委しき大原の、巫女を呼び寄せ、集め置きし女共に教へさせ、衣裳の事など取り急ぎ、はや室町の御覽に入れても、恥しからず稽古も整ひ、萬揃ひし趣を、聽いて光氏さあらばまづ、其の下演習打馴しは、此館にて爲させんと、以前の如く棧敷を構へ、かの廣庭を渡らせて、舞振を見給ふに、取々に美しう、棄てんと思ふは一人もなし。氏仲君は胸のみ塞がり、物などもしかなく参らず、打臥してのみおはしゝが、唄歌ふ聲太鼓の音、いと賑しきに彼處へ行き、見物なさは少しは心の、慰む事もあらんかと、立ち出で紛れ歩き給ふ顔のいと麗しく、沈着にして何となく、媚かしき様なりければ、まだうら若き腰元などは、我知らず目を留むるなるべし。常々は紫の、おはする方の障子近くも、光氏制して寄り附けず、これは自から若き程、藤の方に親しくなし、浮名をとりしに

懲りたる故か、今日は此の騒しき、ものゝ混雑に女のみ、住む方までも遠慮なく、立ち入り遊び給ふなりけり。はや神事舞は一渡り、濟みて暫時暇を賜はり、只有る座敷を衝立屏風に、割りて假の樂屋とし、練子共の打ち休みて、居る邊まで氏仲は、浮々と打ち回り、何心なくやをら寄りて、覗き給へば最前の、舞にやいたく草臥けん、襖に凭れて顔に手をあて、羞俯向き居る娘あり。彼の雁金が年の程と、覺しく見えて今少し、丈は高き心地せられ、姿なんどのをかしき様は、夫れよりも勝りて見ゆ。暗薄ければ細やかに、見えぬといとよく似通ひて、戀しき人の殊更に、思ひ出でられ強ちに、心移ると云ふにもあらねど、只打ち過ぎんも心に掛り、衣の裾を曳き鳴らせば、女は何の心もなく、怪しと思ふ様なるに、「誰が注連をかけて折らせぬ伊勢櫻」打つけなりとや覺はされんと、言ひ掛け給ふはいと若う、をかしき聲と聞きながら、誰人なりとも女は知らず、物むつかしとや思ひけん、「顔直さんに鏡臺へ、燈を近う」とつと起てば、遊び歩きし介添女、また襖けなき男の子、此の聲聞いて立ち戻り、近う寄りて衣裳を着せ替へ、それ紅い眉刷よ、と人騒しうなりければ、いと口惜しう氏仲は、其處を空しく立ち去りしが、四五日ありて此祭、室町御所の御覽も濟み、其後人の噂するを、氏仲心を付けて聽くに、此度の練子共は、光氏君と良清のは、勝れたりと愛で罵る。其中にも取り別けて、美

しげなる其様は、光氏君の方こそ勝らめ、髪かみの飾衣裳かざりいしやうの文あや、當世風あたよふうに仕立てたる、容態ようたいなんどの殊更ことさらに、觀所みどころありてをかしかりしと、言ひ騒ぐを聞き若し夫れかと、夫とはなしになほ委しく、人に尋ね問ひ給へば、果して我が目の留りしは、父光氏の出だされし、小藤と云へる娘にて、惟吉これきちの妹なり、直様に室町へ、留め置れんとありしかど、病氣びやうきと言ひ立て惟吉が、連れ歸りたる由を聞き、されば彼處へ今更に、尋ね行く共其の邊、近くへだにも寄せまじと、まだいと若く恥しき、程にてあれば心には、歎しけれど思ひ止みぬ。されども彼が容姿さまかたち、目前めまへにありて高直が、心辛くて引放ちし、人の代に見んものと、案じ怪びて居たりしが、去りし夜小藤に附き來たりし、彼の醜みにくげなき男の子は、惟吉の悴せむにて、三作と呼び年よりも、無邪氣むじゃぎで可笑きを、紫の上愛せられ、折節せりふせ召さるゝ由を聞き、是幸ひと氏仲は、彼の三作を度々招き、手馴てなづ附けおきて或時に、常よりも親しく語らひ、姨あやめの小藤は又何時か、踊まどりに來ると問ひ給へば、「確しかとは存じませれども、七月は上りませう、何故に夫れを」と不審さうに、云ふに氏仲聲を潜め、「いと美しき顔を、坐まゐに戀しう思ふなり。其方が常々見るであらうと、思へば夫れが羨まし、何がなして又我にも、見せてたまや」とのたまへば、三作は頭を振り、「私が迂濶うつけと見て居てさへも、人の顔に祭は渡らぬ、何をきよるく、男の子と云ふ者は、何事も暴あやくれしう、己は

嫌ひぢや其方行けと、近くへさへも寄せ付けければ、況てや貴方にお見せ申す、事は自由になりませぬしと、云ふに氏仲打點頭き、「夫れなら切めて此の文を」と、渡し給へば小首を傾け、「斯様事の取次は、せぬ者ぢやとて父が常々」、「はてさて夫も人に依る、惟吉は父上の、家來なれば己れも主人、更々呵ることでは無い、其の代りには此頃響めた、硯箱も机も遣る、言ふ事聞かぬと腹切つて、己れは死んで化けて出る、早く歸れ」と嚇されて、恐さも恐し子心にも、御心根をいたはしく、思ひやしけん、「左様なら持つて參つて見ませう」と、遊々お前を引き下り、家に歸りて小藤が部屋を、覗けば一人机に凭れ、手習なして居たりしかば、恐々側へ立ち寄つて、「雲井の君が伯母様へ、これを」と言ひて差出す。小藤は年の程よりも、ざれてやありけん又は君の、心を掛けて贈られし、文とは心附かざりしか、左迄に恥づる氣色もなく、手に取り上げて打ち見るに、縁と黄なる薄葉を、いと好もしく打重れ、手は若けれど生ひ先き見えて、いとをかしげに書き續け、「桂より心掛け、り花踊」二人打寄り見る處へ、惟吉不圖入り來れり。恐しう呆れ惑ひ、引き隠すべき分別もなく、面を打蔽め、逡巡すれば惟吉は、疾くも文に屹度眼を注げ、「やよ三作、戻りし事を我にも告げず、小藤と何か潜めくを、心得難く思ひしが、善からぬ取次爲たりしな」と、目に角立つれば震ひく、逃げ行くを近く呼び付

け、「年も足はぬ己を瞞着し、此の文は誰が頼みしぞ、さア有様に云へ聞かん」と、呵責めば愈々畏れ、「冠者の君が其方の姨の、處へ之れを届けてくれ、否と云ふと己は此處で、腹切るとおつしやるから」と、聞いて惟吉恐しげに、今迄遊面作りたる、顔を俄に和げて、莞爾くと打笑ひ、「はて愛らしき御戯心、三作汝も若君の、御年に餘り違はれど、紙鳶に走り廻り、犬子を抱へ歩き、明けても暮れても悪遊戯、貴方がたと比べては、役に立たぬ實の子供、手巻く早うまづ、此處へ來て此のお文を拜見せよ、文章と云ひ御手の見事、恐れ入つたと」類に響め、手巻に見せて偕云ふやう、「私連の妹でも、人と覺し召れなば、當もない室町の、宮仕へより此方から、願うてなりとも差上げん、御父君を見習ひ給はゞ、一旦見染め給ひし者をば、無下には棄てさせ給ふまじ、されば行末頼母しよ、宗入は兄に與せず、利口者幸福者と、世の人彼を擧つて譽む、運よくば此の惟吉も、彼程にはならんしなど、はじめには引換へて、機嫌よけれど底氣味悪く、三作引き連れ小藤は急ぎ、其場を起ちしが恥しう、思ひやしけん御文の、返書は途になさゞりけり。氏仲も又彼方より、返辭もなきに押續け、文を遣りなば輕々しき、心なりとて笑はれんと、思へば重ねて音づれず、只雁金が事心に掛り、月日の經つ程なほ床しく、何時か逢はんと思ふより、他の事なく赤松の、館に行けども年頃日頃、遊び馴れたる處の

み、思ひ出でられ其人の、見えぬに愈々胸迫れば、小毬よりは繁々に、迎へをおこせど彼の館も、心憂くて此頃行かす。又我が部屋に籠り居て、人にも絶えて逢はざりければ、光氏は此體を見て、心許なく思ひつゝ、彼は素より小毬が、寵愛深く女の中に、成長たるものなるを、俄に是へ呼び迎へ、見も知らぬ男子のみ、付けおく故に住み憂くて、心結ばれ夜晝とも、只打臥して居るなるべし。如何にかせんと熟々思ふに、花里は其昔、蓮葉なりしに引き代へて、今程は行儀正しく、假にも人と争はず、心素直になつたる間、氏仲を彼に預け、暫時彼處に住ませんと、或時に花里の、部屋に誘ひ行き給ひ、「知つての如く此の冠者は、生れて直様母に離れ、祖父正則もはや世を去り、赤松の館にも、小毬ならで眞實に、可愛と思ふ者はなし。其の上是も年老いて、頼み少く思ふが故、我此の東へ迎へしが、餘りに彼處は人氣遠く、淋しき體にて何とやら、氣むづかしきを見るのも苦しく、同道なして來たりしなり。御身は元赤松に仕へし者にてあんなれば、小毬が亡後は、彼に代りて氏仲に、傳きくれよ是よりは、心安く見習はせん。其の爲め預けて置くべし」と、聞え給へば何事も、のたまふ儘に承引きて、心素直になりたる花里、これは悦しや願うても、無き幸ひと深く歡び、若き心の惡戯より、正則様御夫婦の、御機嫌を背きたる、其昔の申譯、愚なる身の心限り、氏仲君に仕うまつらん、御心安う思召

せしと、夫よりしていと大切に、扱ひながら餘りに折目、正しくなさば氏仲の、氣詰ならんと宜き程に、體しう語らひなどし、日敷を經れば氏仲も、離館に在りしより、少しは心も晴れやかに、なりて學問怠らず、其暇には花里と、雙六などを打ちながら、熟々と見給ふに、顔も姿も此處こそ宜けれと、思はるゝ處はなし。赤松の館に古く、仕へ馴れたる腰元の、口惡きが問はず語りに、中空と言ひし昔の、噂も豫て聞きしかば、心の中に不審しく、何の故にか父上は、彼方へ移し此方へ迎へ、彼を憐れみ給ひしならんと、思ひしが又打返へし、容姿佳しとて雁金が、如くに絶えて音づれせぬ、無情者を思はんより、彼様に心柔らかにて、情深きが添ひ馴れては、よき故いたはり給ひしか、さはさりながらさし對ひ、見苦しきのも甲斐なしと、固より人に語る可き、事にしあらねばさまなくと、心に思ひ亂れけり。實に夫にも道理あり。小毬は白髮の、髻、切り拂ひて打見には、恐ろしきやうなれども、人柄の打上り、年老いぬれど顔清し。其處にも此處にも腰元にて、仕ふ女は容貌を撰び、醜げなるは近くへ出です。人は容のよき者と、夫れに目馴れてあんなるを、花里は素よりも、勝れし姿と云ふにもあらず。若き程は飾粧の、華かなるにて目を注ぐる、人も有りしが稍盛りも、過ぎて化粧に顔は荒び、瘦過ぎて髪も少く、なりたる様を氏仲は、斯く譏らばしく思ひしなり。

九月の節句の近づく儘、小毬は冠者の君の、室町へ参り給ふ、御小袖よ上下よと、さまざまに物好しつ。雁金には打絶えて、逢ひだにせれば此君の、御事にのみ打ち懸り、取り急がせているくなるを、清らに仕立て上げたる所へ、氏仲折よく來たりしかば、小毬は打ち歡び、これは御氣に入らざるや、彼こそは宜からめなど、目通りへ持ち出るを、見るも懶く氏仲は、庭の方を打ち眺め、「節句などには室町へ、行くべき心更になし。何の爲にか其様に、俄に仕立て給ひしならん」と、聞え給へば打微笑み、「荅のお年にありながら、老い頼れたる人の様に、今の仰は何事ぞ、思々しや」と諫むれど、氏仲は尙打ち濕り、「老いれど心は頼れし」と獨語の様に言ひさし、俯向いて居る風情、もし高直が連れ行きし、雁金の事御心に、掛りて斯くはのたまふかと、思へば心苦しくて、小毬は聲を潜め、「男は假令下様の、奉公しても身の程より、心高く勢ある、者は必ず世に出る、何故その様に心を屈し、浮々と遊ばされぬ、自ら不吉を招くとて、夫れは慎しむ事なり」と、云はれてやう／＼顔振り上げ、「某には今以て、素袍をだにも着せられず、何時も變らぬ四布袴、綾や錦で仕立てても、人は輕しめはんべるなり。暫時の中の事ならんと、思へど夫故式日には、猶更出仕の心に染ます、正則此世におはしなば、戯れにも人の侮る、事は更々あるまじと、思へど夫れは甲斐なき愚痴、父君も隔てなく取り扱ひては

給はれど、餘りに嚴しくさし放ち、容易は御側へも、参り馴ればんべらす、只花里が住居へ偶々、渡らせ給ひし時ばかりは、御前に侍るなり。嗚呼花里が心を用ひ、我に仕へていたはり呉る、夫に付けても思ひ出す、其秋風に柞葉の、散り失せ給はず此の園に、茂りておはしますならば、何に付けても物思ふ、事はあらしを御顔だに、知らぬ中に」と翻れ落つる涙を紛らし給へる氣色の、いと哀れなるに小毬は、尙ほ、と打ち泣きて、「母に早く離るれば、悲しき事も多けれど、親はなくても子は育つと、下世話にも云ふ通り、人となるのは夢の中、年加はれば自から、輕しむる者はない、さういふ事をば心に掛けず、御身を大事に持ち給へ。光氏君のおはすれば、何御不足はあらねども、のたまふ如く正則が、今暫時世にあるならばと、思ふに叶はぬ事のみ、多きが故に憂き世と云ふ、高直が志は尋常ならずと世の人の、譽め種なりしも昔に變る、事のみ増るがいと悲しく、命長きも恨めし。夫には變り生ひ先きの、遠き御身に聊かなりと、御心を屈しさせしも、只今申した昔に變る、彼が心一つより、出でたる事にや侍らんと、思ふに付けても怨めしき、世なるかな」とて泣き居たり。(作者申す。又玉葛の卷へ移りこれより前のことより記す。)

春之助親子三人、玉葛に傳き上り、假り住みせしは九條にて、都の中にはありながら、いと寂しげ

に挿々しき、人の住みたる邊ならず、すはいとか云ふ女商人、かもし捨る妻の脱買ひ、借は怪しき説教讀、猿曳なんどの小家の中にて、鬱悒につけ世の中を、愈々思ひ續けつゝ、兎角する間に秋にもなりぬ。殊更に淋しき彌増し、來し方行先さまなく、悲しき事のいと多かり、抑、肥前の國よりして、此人々の立ち出でしは、今年の春の末にてあり。此處に宿を求めし頃、朽葉は昔黄昏の果敢なく消えし古寺を、彌五六郎と連れ立ちて、訪づる事のありければ、玉葛を彼處に誘ひ、黄昏の墓を尋ね、詣でさせしが思ひの外、石の玉垣五輪の塔、塵も無く掃き清め、潔く立つてあり。是光氏が彼を憐み、密に營み得させしなるべし。夫より後も玉葛は、宮城なんど、連れ立つて、此處へ度々参りしとぞ。借前にも云ひし如く、春之助は其心、いと頼母しき者なれば、如何にしても玉葛を、世に出さんと思へども、今世に時めく高直に、表立ちては言ひ入れ難く、さればとて又密に、知らせんには便宜もなし、只水鳥の陸に迷へる、心地なして爲ん方盡き、只浮々と用もなく、明し暮して淋しき餘り、熱々と案ずるに、弟にさへも中違ひ、夜脱けにしたる國へ今更、おめ／＼とは歸り難し、返す／＼も是ぞといふ、目的も無くての京上りは、我が過失にありしよと、口に言はれど心の屈託、自然と顔に現はるゝを、母の朽葉は見て取つて、「御身は西の京にて生れ、故郷ながら今程は、はや相識れる人もなき、所

に再び彷徨ひ來て。苦勞しやるを明暮に、見るも可憫思案を仕變へ、國へ戻つて又何がしと。いふを打ち消し莞爾と笑ひ、「私が身は瑣細な事、玉葛様の御身にかへて、零落るなら零落次第に、父上の御遺言を、守るが道と申す者、住ひつけた肥前に在りて、假令は何程勢ある、身の上と我なつたりとも、姫君を現太輩が、妾に爲し参らせては、本意に背きて快からず。却説姫君の御出世は、神佛の導に、依らずば急には挿取るまじ、此所よりは程近き、八幡の宮と申すのは、誰々も知る應神天皇、また肥前の國にて玉葛様の、御信仰あられたる、鏡の宮は神功皇后、即ち八幡の母上にて、同じ社に候ふなり。當春國を離れ給ふ、其折も姫君の、鏡の宮に數々の、御願籠めりし由は、宮城よりして承はる、さすれば八幡に詣で給ひ、神の利益の著るしく、今程は恙なく、都に住家求めしと、禮を述べられなほ行末の、事ども祈られ然るべし。道すがらの秋景色、御慰めにもならんか」と、云ふに朽葉は打悦び、「夫には幸ひ八幡の坊に、私の知りし老僧あり、まだ諭のいと目出度、この頃途にて行き遇ひし、是を頼みて姫上を、詣でさせ奉らん、又彼の御神に打ち續き、利生あるべき御佛は、何れならん」と問ひければ、春之助打點頭、「抑佛の御中には、大和の國初瀬の觀音、此の日本はいふも更なり、昔々吉備大臣、遣唐使に赴かれ、野馬臺の詩をよみ侘たる、其時に彼の御佛、蜘蛛と現はれ導き給ひし、天

よりなして顯著なる、驗を現はし給ふとは、漢土にさへ聞えしとか、是を祈り給はんには、及くべからずしとぞ答へける。此時に玉葛は、次の一間にありけるが、洩れ聞いていと嬉しく、隔ての襖おし開き、亡き母上の御形見と、妾に與へし守符の中に、今物語りし初瀬の御影、此の如く入れてあり。扱は母の信心ありし、御佛ならんと思ひ取り、筑紫に在りし時よりも、朝な夕なに拜みしぞや、なほも我身を觀世音に、打ち頼みまゐらせなば、惠あらんに疑ひなし、疾く／＼連れて」とありければ、さればとて取り急ぎ、乗物の用意などするを、玉葛押し止め、「此の山城とは隣國、さまでには遠からぬ、處と兼々聞いて居た。假令遠くとも歩みを運ぶが、即ち佛に仕ふるなり。只此儘に」と言ひけるにぞ、春之助は何事も、玉葛の言葉を背かず、さらばとて徒歩よりと、定めて打連れ出でにけり。斯くは言ひしが玉葛は、遠き徒歩路に習はれば、いと佻しく苦しけれど、宮城が語り慰むる、夫を力に歩みつゝ、如何なる罪の深き身にて、かゝる憂世に漂泊ふならん、父上もはや此世に、おはしまさずば自らを、哀れと覺し冥途とやらんへ疾く導き給はれかし。若しも此世に居給はゞ、一度逢はせてたび給へ、母上は御顔だに、覺えぬ中に過ぎ行き給ふ。殊更これに非業の御最期、助け給へや觀世音、繰言ながら親達の、おはしましなば斯様に、悲しき事はあるまじと、我身の詮方無き儘に、其の事此の

事取り重ね、心に歎き辛うじて、椿市といふ小初瀬の、麓の里の京の住居を、出でしより四日目の、巳の時ばかりに活きたる心地も、無くてやう／＼着きにけり。甲斐々々しげには出立ちながら、脚の裏動かれず、詮方無くて打ち休めぬ。昔は此椿市に、妻を持ちたる僧のあり、參詣の人を宿し、旅籠の事など賄ひければ、春之助はよき程の、家を見立て、宿を乞ふに、主の僧は他へ出で、妻の留守してありけるが、快く承合ひて、座敷を拂ひ入れけるにぞ、人々漸く心落着き、扱草臥も安まらば、今宵御寺に通夜なさん、百八の燈火を、御佛に獻まつる、その料は何程か、宜に計ひ給へなど此家の女房に頼み置きて、湯を浴ひ兎角するうち、秋の日のいと短くてはや暮れぬ。主の法師立ち歸り、此の人の宿りし體を、打ち見遣りて妻に向ひ、「去頃も兩三度お宿をしたる都の女中、今宵は又おはすべし、報知のありて御迎へに、今朝早く立ち出でしと、知らざる事はよもあらじ、夫に我にも語らずして、田舎人と覺しき者を、何故留めては置きつるぞ、相宿ありと云はゞ、御機嫌を損ねべし」と、打腹立ちて言ひけるを、快らず春之助、洩れ聞く中に彼の主人が、迎へし人々入り来る。物の隙より玉葛宮城も、差覗いて熟々見るに、是も徒歩にて來りしにや、乗物はなく荷物なば、馬に附けて後より曳かせ、闇うて定かに見えねども、宜しき女二人ばかり、下女下男も、數多き有様にて、深く忍び

て扮装ながら、清げなる男もあり。主人の僧はさまざまに、彼の人々に追従しつゝ、此處に宿さま欲しげにて、頭掻きつゝ、彼方此方を、走り歩くを春之助、打見るも氣の毒ながら、今更宿を取り直すも、佗しければ連れ來りし、荷持の男を彼處へ遣り、此方は人も多かられば、奥の方の小座敷へ、打集り申すべし、遠慮なく其の方々を、是へ請じ給へと云はせ、皆一處へ集りければ、主人は深く打歡び、屏風衝立やうの物を、隔てとなしてぞ設ひける。此の來たりし一群も、主人と見ゆるは女にて、綺羅綺羅しくは装はず、いかうやつして物言ひも、心輕げに主に向ひ、「連れ來りし者は皆、外にて宿を取らず可し、彼方のお客の狭からぬ、程に宜しく計ひ給へ」と、打潜りて是も亦、心遣ひを爲たりけり。扱此女を誰ぞと云ふに、別人ならず山吹なり。前にも度々説きし如く、紫の上に仕ふる、入々のまじらひも、快からぬ身を倦じ、如何にもして玉葛の、行方を尋ね傳んと、光氏の許を受け、處々を打廻り、黄昏が世に在りし時、此處の御寺の觀世音を、深く信心したる事を、不圖思ひ出で此の春より、度々參詣爲たりしかば、はや事馴れて都より、さまでに遠くも今は覺えず。されども徒歩路に歩み草臥、倚り臥しながら彼方を見れば、一人の男隔ての屏風の、もとに寄り來て膳を手づから、拭ひ清め其の連の、婦人に面ひ密々と、「これを彼方に差上ぐべし。器具は小さく椀は大きく、さて取合

は見苦しけれど、旅にてあれば詮方無し、塵汚穢しく覺はさんなど、云ふを山吹洩れ聞きて、扱は主人に傳きての、參詣ならんと思ひつゝ、不圖彼の男を差覗くに、見し心地する顔ながら、誰とは確に覺えやらず。是はいと若き頃、逢ひたる儘にて年月たち、肥満黒みて窶れたれば、春之助といふことを、急には思ひ出さぬなりけり。又彼處にて年老いし、女の聲して娘々、姫上の召しますよと、呼ばれてあいと出で來る婦人の、顔も亦見しやうなり。不審に思ひ熟々と、打ち案するに宮城に似たり。さては男は彼が兄、春之助に疑ひなし、姫上とは若し彼の方の、御事なるかと胸轟き、近くよりて差覗けど、燈火暗くて其方は見えす、彼人の連れ來りし、下女を招きて問はんとすれど、食物に食入りて、物言ひ掛けても見向きもせず、山吹はいと悪く、我が連れ來りし女を呼び、宮城の方を指さしなし、彼の女中は妾の知る人、お目に掛からん此方へとて、誘ひ申せ」と言ひ遣りければ、其の女に引き立てられ、濫々宮城は出で來たり、貴女は更に覺えぬお方、筑紫の國に廿年ばかり、住家求めし卑しき身を、京上藤の知らせ給はん、由縁は更にはんべらず。都の人よ能く見給へ、人違ひにこそおはすらめしと、寄り來たるその風情、強々しき衣など着て、髪の掛りも何處やら田舎び、いたう肥大て年長けたり。京に住みし其頃は、まだ子供にてありける者が、斯く姿の變りしを、思へば我身は猶更に

顔も變り年も老い、見苦からんと山吹は、恥かしけれど燈火を、近く寄せて、「よく見給へ、我をば見識り給はん」と、顔さし出せば宮城は手を拍ち、「山吹様にておはしけり。嬉しや〜何として、此處へは來らせ給ひし」と、言ひつゝ涙さしぐめば、山吹は忙はしく、「まづ彌五六殿御夫婦は、御無事にておはするや、玉葛様は如何にぞ」と、問はれて宮城は眼を拭ひ、「父は去る年亡せ給ひ、母は今に壯健にて、彼へ來ておはするなり。玉葛様もはや大人に、ならせ給ひて其の御身のお願ひに付き此處へ參詣、まづ此の容子を母様に」と、走り入りて物語れば、朽葉は夢の心地して、春之助と諸共に、出で來りて此の隔ての屏風、残りなく取り拂ひ、山吹と顔見合せ、暫時言葉も泣き交し、茫然として居たりしが、朽葉やう〜涕打拭み、「貴方へ昔預け置きし、玉葛様を只一夜、泊りに借りると虚言云うて、肥前の國へ連れ申し、下りし後に嘸や嘸、お腹立もありしならんが、是には深き譯あること、恨を棄てて此子等が、力となりて給はれかし、今は都に知邊も無く、明日をも知らぬ老の身の、我を便とするなれば、嘸かし心細からんと、夫のみ心懸りぞ」と、又打ち泣けば山吹も、眼に持つ涙ふり拂ひ、「夢になりともおはします、所を見んと大願を、立つれど其の甲斐なきのも道理、さては今迄遙なる、世界に住ひ給ひしとな、風の音にも聞き傳へぬが、甚しく悲しかりしなど、夫彼の事一つ二つ、物語る中

主の僧、罷り出で、「御燈明ははや捧げ候ふなり、疾く御參詣あるべし」と、急がしたつれば朽葉親子、何か心の忙しく、「さあらば御堂へ參りて後、又緩々と」と暇を乞ひ、起ち上れば山吹も、いざ諸共にと思ひしが、供の者の怪まんと、心附きて少し下り、別れ〜に宿を出で、人知れず彼の人々に、目を留めてよく見れば、其中に田舎びす、美しげなる後姿、旅に疲れて鬢の髪、打ち亂れしも愛らしく、氣高き性質の娘あり。四歳の時に別れしは、是にこそあるらめと、思ひながら山吹は、少し足馴れたりければ、思はずも此人々を、打ち越して疾く御堂に着く。朽葉等は玉葛が、歩み憫むをいたはりつゝ、兎角隙どり寺にははや、初夜の勤行をする頃に、やう〜に上りけるが、參詣の人立ち込みて、思ひの外に騒がし。抑此の初瀬山は、豊山長谷寺本願院と號し、本尊は十一面の觀音にて、大門より九十九間の、廊下を傳ひて詣づるなり。さて山吹は東の方を、假の局に設備へて、佛のお前にいと近し、これは親しき坊ありて、夫れの法師の差圖なり。玉葛は遙に遠き、西の座敷を借りて居れり。朽葉は急ぎ山吹を、尋ね來りてありし事ども、先づ概略語りて後、帛紗包を取り出し、差寄りて聲を低くし、「これが彼の玉葛様の、御臍緒にはんべるが、赤松太郎高直の、娘と確に記してあり、過ぎ行かれし彌五六殿、思ふ仔細のある間、玉葛様に此事は、まづ申すなど言はれし故、今に隠して見せ申さ

す。されば却つて自らは、父の御名を慥には、知らせ給はでおはすべし。此の春京に上りて後、夫とはなしに人に問へば、高直様は壯健にて、おいでなさると云ふ取沙汰、さればとて迂濶には、言ひ上げ難く春之助、思案にあぐんで居る様子、何卒して逢はせませす。便宜を求めて給はれしと、頼めば莞爾と打笑ひ、「其事は必々、お心配ひ遊ばすな、よしなに計ひ参らせん、先づ夫れはさし置いて、玉葛様のお局は、佛の御前と隔りたれば、是へ誘ひ参らせん」と、心安げに山吹が、云ふに朽葉は歡びつゝ、直に彼處へ迎へに行き、春之助に後の事、任せてとつかは玉葛に、傳き來れば山吹は、なほ莞爾やかにさア〜是へと、打招かれて玉葛は、今途中山吹の、事を委しく聞きしかば、何とやらん恥しく、さし俯向いて言葉なし。此方は行衛を失ひし、娘に廻り逢ひたる心地、手をとりにて親しく寄添ひ、かく不束なる身なれども、只今では光氏君の、御館に侍るなれば、見給ふ如く供人を、僅に連れたる道にても、狼籍を爲る者はなし、今宵は取り分け籠人も、大勢入り込み騒しき、中には善らぬ者ありて、田舎人ぢやと見侮り、悪戯せまい者でもない、妾が側におはしませしと、猶物語りもせま欲けれど、讀經の聲銅鑼繞鉢、其の騒しきに催され、佛を拜み奉る。山吹が心の中に、此の人を如何にもして、尋ね出させ給はれと、日頃の願望空しからず、逢ひ見し事の嬉しさよ。光氏君も豫て床しく、覺して仰

を受けたれば、斯くと聞えは歡び給はん、なほ御佛の利益にて、幸ひあらせ給へなど、慇懃にこそ祈りけれ。此頃は取り別けて、此觀音は流行せ給ひ、京の者田舎人、御堂に多く集ひ聚り、此の國司も内君も、今宵参詣給ひしが、その嚴しき勢ひあるを、朽葉は見やりて羨しく、我を忘れて聲を上げ、南無觀世音菩薩、數々の事は願はず、我姫君を郡司の、奥方になし給へ、其折には我々も、身の相應に衣裳を飾り、御禮参申さんと、額に手を當て念じ居る。山吹はいと可笑しく、「あな忌々し田舎めきたる、言葉し浮かとのたまふな、彼方の父御高直殿は、昔よりして御覺え、目出度かりしが今は尙更、執權職にておはするなれば、郡司など云ふ、祿の少き武士の妻に、いかでか送り給ふべき、又光氏君の取り扱ひ、給は〜いよく目出度御身に、成り給はん」と云ふのも朽葉は、聞き入れずして首を掉り、「耳喧しや執權と、やらんも暫時措き給へ、去年筑紫の郡司、何某殿の北の方、彼の國の觀音寺へ、参詣給ひしその勢、帝の行幸に劣りなし。言ひ既し給ひそ」と、拜み入りて餘念なし。扱玉葛は此寺に、三日籠らん願なり。山吹は今宵限り、下向なさんと思ひしが、斯かる序に寛々と、物語り聞えん爲、これも共々籠るに定め、親しき僧に對面し、「御佛に月頃願ひ、行方を尋ねし其人に、此頃廻り逢ひたるなり、貴僧よりもよく御禮を、申して給へ」とありければ、件の僧も打歡び、「夫れは

愛度事にこそ、愚僧も常々間断なく、祈りし效驗にあらんづらん」と、皆佛前に誘ひ行き、いと騒しう夜一夜、執行ひ明けぬれば彼の僧の、坊に人々下りたちぬ。堂は兎角に騒しければ、物語を快く、せんとて此處へ來たりしなるべし。山吹は衣など着換へ、華やかにさし出でて、曇りなき朝日の影に、玉葛を熟々見るに、旅にはいたくやつれたれど、人品の打ち上り、恥しげに覺えし様、いと艶美なりければ、心の中に嬉しくて、手を執り膝の邊に近づけ、昔は一人で歩きし此身が、思ひ懸なく去る年より、嵯峨の御館に宮仕、所々のお使にて、さまんの方々を、見上げたれども嵯峨の内君、紫の上に似たる、御容貌は侍らず、打續いては明石の姫君、これは又父上の、御佛を寫し給へば、麗しうおはす筈、御寵愛も世に並びなし、喃、朽葉殿此様に寢亂れておいでなされど、玉葛様は其の方々、にも劣り給はず、妾が欣喜推してたべ、光氏君は義政公の、御時よりして美といふ、婦人は残らず見集め給ひし、御目にも美人といふは、今室町の御母上、さて其次は我娘、大井の姫とのたまへり。妾もいつぞは見奉り、比べて見んと思へども、藤の方にはお目見えせず、明石様は清らかに、渡らせ給へどお年が足らず、只生先は嘸かしと、推測らるゝばかりなれば、光氏君の御機嫌の、よい折に其事を、申し上げて誰彼より、内君様の上越す人は、世界の中には侍らじ、夫をば何とも仰せられず、お

心憎くやと聞えしかば、なに紫か彼は己れと並んで居れば其様に、美しうは見えぬ筈と、酒の上にて御戯れ、實に見上る度々に、思はず心も浮き立つ程、麗しいは紫様、夫にも貴女は恥かしからじ、物は限のある者なれば、勝れたりとて眉間より、光を放つ女はなし。彼の内君や玉葛様を、勝れたりとは申すべし、と顔をながめて打笑は、朽葉は嬉しくさし寄りて、此のお容姿を怪しき處に、沈め申すが悲しき故、家も寵も皆打捨て、子どもらは女房に離れ夫に別れ、此の母も今は却つて、知らぬ國の心地する、京へ遙々下つたを、哀れと思し山吹様、宜きに導きしてたべよ、今程は高き家に、宮仕へ爲給へる、御身なれば自から、便もあらん姫上の、父御に斯くと聞え上げ、世に出し參らせて、と、涙ながらに頼むにぞ、玉葛は恥しう、後を向いて居たりけり。山吹は打合點き、「此身は數にもあられども、光氏君の御前近く、召使はれ侍れば、立ち歸りなば申し上げん」と聞いて朽葉は小首を傾け、「光氏君のいと愛度、榮えさせ給ふ事は、田舎にも知り侍るが、其様に美しき、奥方や召使も、數多あれば先づ實の、親にておはする赤松殿に、同くは知らせて」と、云へば山吹片頬に笑み、「黄昏殿の果敢なき最期を、忘れ難く悲しき事に、光氏君は思し給ひ、聞けば彼が娘ある由、尋れ出して得させよ、かし、我には子も少きが、寂しきなれば其娘を、我子を尋れ出でたると、人に知らせて慰まんと、豫

ての仰せを受けたれば、君へだに申しなば、御出世は目前、高直殿は奥方の、嫉妬強くて側妾に添へ、近江とやらん田舎へ遣られし娘ももありとやらん、さすれば此事聞えても、御對面も覺束なしと、なほ今の都の様、あるは昔の物語りに、其日は暮れて通夜に上り、又坊へ歸りなどし、漸々に玉葛も心安く山吹と、物語りする其序に、「四歳迄貴女に育てられ、母より御恩の深い事は、朽葉や宮城が常々嘶、お腹が立つか知られども、私は實の母上に、お目に懸かりし心にて、其嬉しさは如何ばかり、夫に私に様付けて、お呼びなされるは聞えませぬ、玉葛然う爲よ斯う爲よと、被仰て下さりませ」と、云ふを山吹押止め、「昔は昔今は今、先刻にも申し上げた通り、嵯峨へお移り遊ばせば、光氏君の貴方は姫君、その時は山吹と、私を召さればなりませぬ、宮城殿宮城殿、斯う云ふたら氣に障らうが、お前も母御も京に居た、時とは姿も物言ひも、變つた中に玉葛様お一人は、都上臈、斯く麗しいお性質でも田舎めいたら玉に瑕瑾、どうしてお育て申したかと、感心して居る哩な」と、云ふ折朽葉も出で來たり、「黄昏様は艶麗に、唯お心よいお性質、彼方は氣高く美しい、中に何處やら吃として、見えさせ給ふは父君の、血筋によるかと彌五六殿、常々申して居りました、赤松様は唯今では、昨日も申した執權とて、此上もなき重き御身、御子も數多侍りて、今室町の内君は、腹こそ變れ玉葛様の、妹君に

て侍ると、山吹が密々聲、玉葛は打ち聞いて思ひ懸なや父上は、去る貴人にておはせしよな、されば人にも知られざる、此の下草も萌え出づる、春に遇はんと頼母しく、心の中にぞ思ひける。此坊は小高き山の、崖造りにて御寺へ參る、人々の有様も、見下されて初瀬川の、流も手に取る計りなれば、欄干に打凭れ、皆々眺めて居たりしが、秋風谷より吹き上り、いと肌寒きに何となく哀を催し打濕めるを、山吹は言ひ慰め、若しまた行方を失はば、悪かりなんと京の宿を、委しく聞いて書き留め、「幸ひ妾が親里は、程遠からぬ六條なれば、便宜好し」とて後々の、事共を語らひ置き、三日の籠も濟みけるにぞ、先一旦立ち別れ、玉葛は報賽に、夫より八幡の宮に赴き、山吹は彼の六條の父の家に足を休め、玉葛が九條の住居へ、まづ文の音づれして、其後嵯峨へ立歸り、此事掠め聞えんと、心は急げど其夜は何か、事忙しくてお前にも、參らで局に臥しけるが、又の日に山吹が、歸りし由を光氏聞き付け、召し出されて、何とやら、晴がましき心地なし、手をつかふれば光氏見給ひ、「などか里居は久しく爲つる、又若返りて可笑しき事の、ありつる故かと、戯れ給へば、山吹は恐れ入り、「御暇願ひてより、七日に過ぎ侍れども、面白いと云ふ事は、何國にもありがたし。夫は差置き又例の、初瀬の山踏爲侍りて、哀の人を見出し」と、聞いて光氏眉を顰め、「夫は何人ぞ」と問ひ給へど、押し並

びて紫の、おはします故山吹は、其御答に行き詰り、もし又此後人傳にて、黄昏の事内君の、お耳に入らば、隔てある様に思してお心に、却つて障る事もやあらん、はや過ぎ去りし事なれば、只此儘明様に、云うてよきやら悪きやら、思ひ亂れて、「其事はハイ、只今に、只今にと、云ふ中人々お前に参り、騒しうなりければ、夫れなりにして言ひさし止みぬ。

修紫田舍源氏第三十二編終

修紫田舍源氏第三十三編序

観音様の御噂を、たびくまをして石山で、噴鼻とのたまはんも、かしこけれ共既にかの、分身し給ふ其數の、三十三編と早やなりて、法はツ華經初音の卷へ、移るにおよば普門品、第二十五帖目の、螢の卷へも近づきしが、刀刃段々趣向につまり、六條の院を光氏が、新館に取なして、其結構を並べたつれば、覗き機振の言たての如く、玉葛の末に至り、人の愛る衣配りを、俗文に直しゝかば、山本土佐が古淨瑠璃の、小袖賣の景事に、どこやらが似たりしも、四句の文の口拍子の、おのづからうつりしなるべし。

天保庚子正月

修紫田舍源氏第三十二編

其次の日も早黄昏、燈を點す其頃に、山吹は光氏の、御前に出でけるが、紫君と打解けて、並びおはする御有様、櫻といはんに香あり、これに譬へん花もなし。内君もはや年増盛、此頃暫時見上げれば、又清らさの勝り給ふ、心地せられて山吹は、吐息を襟の中に隠し、玉葛様を此君にも、劣り給はぬ御纏致と、思ひしは我が此の乳で、四歳まで育てし慾目にて、思倣にや内君は、一際優りし御容顏、それも幸ひ有ると無きとの、違ひたるによるかと人知れず、心の中にぞ見比べける。光氏は座を起ちて、「翌は室町義植公、東山へお出あり、我もお供に従へば、早う寢て早う起きん睡付くまで大義ながら、山吹足を擦つて呉れ、若い者に言付けると、嫌がるやうちや老人は、老人同士が心安くて、宜いではないか」と打ち戯れ、給へば側の女中ども、聲を忍んで打笑ひ、「お心安う遊ばすを、誰か否とは岩橋の、夜の契は及びも無い、私ら風情へお戯談、被仰つた其時に、一言主の一言も、申しやうが無い故に、皆が難儀がるのぢや」と、つきしるひつゝ云ふは實に、明るる佗しき顔なりけり。光氏

は枕をとり、山吹に足揉らせ、「老人同士も又餘り、打ち解けすぎなば喃紫、むづかしう云やるであらう」と、はい老人も老人に、よりけりとやら滅多には、油断のならぬも御座ります、なア山吹」と、聞き傳へし、水原の事など云ひ出し、笑ひなど爲給ふ様、世馴れて一入愛敬あり、光氏は機嫌よく、「己も彼の宗全が、事に就いては浪花に下り、播磨に移りてさまざま苦勞、近年はやう／＼と、長閑に暮してあらるゝ故、明けても暮れても此様な、譯もない事言つて遊ぶ、さて山吹、其方が昨日哀れなる、人を尋ね出でしとばかり、後を云はぬが氣懸りな、何な人ぢや長谷寺に、行ひ澄して尊い法師と、云ふやうな人でも」と、聞え給へば首を掉り、「否々何の其様な、醜い者ではござりませぬ、夫は／＼美しい、彼の黄昏に果敢なく散りし、花の露の消え残りし、玉を見付けて歸りました」と、聞いて少し枕を歇て、「實に哀れなる事にこそ、今迄何處に居たりし」と、問はれて田舎に斯々と、明ら様にも云ひ難くある山里に御住居、私が知己の、昔の人の残りしも、ありて其の世の物語、今更に悲しうて互に袖を濡しました」と、目も打濡めば光氏も、古寺の事思ひ出で、胸塞れば自から、顔に憂のあらはれて、如何なる事かと紫の、疑はんかと心勞、したまふ様を紫悟り、「あら可厭や眠たきに何被仰ても聞えぬ」と、兩袖に耳打塞ぎ彼方を向きて臥しにけり。光氏は起き直り、「容などは彼の昔の、黄昏に劣ら

じや」と尋ね給へば、「私も何かと案じられました、生れ優り給ひし程に、美麗なお容顏」夫は其方もさぞ歡び、まづ誰位の纏致と覺ゆ、是とは如何ぢや」と紫を、指し見すれば、「イヤ左程には、夫なら己に似て居るか」と云ふのは彼を光氏が、實の娘に執成して、此後に呼び迎へ、親しくする時紫の、氣を安うせん爲なりとは、山吹更に心得ず、さしよりて聲を細め、「彼の方の父上は箇様く」と云ふのを抑へ、「高直には數多の子あり、是は同じ胤にもせよ、夫が母とは疾に縁切れ、これ迄音信も爲さざる娘、今更にかの多くの子と、立交りなば、怒に、心苦しき事もありなん、夫よりは此光氏が、實の娘と披露せば、却つて心安かるべし」と、打ち囁きて夫よりは、紫に聞かせんと、高々と打ち笑ひ、「不慮の事にて多くもなき、娘の行方を失ひて、年頃口惜かりつるを、いと嬉しくも聞き出でし、幸ひに當春より、六條へ館を營み、此頃やうく成就して、我もまた珍しく、彼處に住まんと思ふなり、彼をも夫へ頓て迎へ、髪飾の物好き、紫に指圖させ、今様の姿に移し、若殿輩が眼を注くるを、慰みとすべき」など語り給へば山吹は、いと嬉しく思ひつゝ、又も聲を低くなし、「赤松様へは先づ包み、給ふとも又ほのめかし、給ふとも其は我君の、お心任せに遊ばしませ、委しい事は知られども、彼の母上は君故に、敢なく消えさせ給ひしよし、其代りには兎も角も、玉葛様を引き助け、給はゞ罪の

自から、消え給はん」と打ち泣けば、「思ひ掛なき悔を聞く」と、微笑乍ら打濡り、「寶詮議の爲にして、色に泥むと云ふにはあらねど、親切に我をいとひ、自害して母を諫めし、其の真心は今も忘れず、記念と見るは友達の、其方ばかりにて身寄もなし。その玉葛が我が實の、子ならば切て」と言ひ掛けて、口に手を當て紫を、省み給へばすやくと、眠りて實に聞かざる様子、心安しと筆疾に、書いて此文娘へと、投やり給へば山吹は、受け取り部屋へ下りけり。

翌日將軍義植公、香壽丸君諸共に、東山へ参り給ふ。光氏も雲井之丞、引き連れて供奉したり、其外警衛の人々は、晴れたる夜半の星より繁く、華々數道の行装、見る者の眼を驚かせり。さて東山にても、豫て準備の事なれば、書院坐敷は黄金を鑲め、庭には玉を敷列れ、結構いはん方もなし。幸に空晴れ、紅葉は未しき程なれど秋の千草の咲き亂れ、池水清く山青く、眺望に飽かぬ有様なり。今日も生憎義植公と、光氏の衣服の色、同じ事にてありければ、いよ／＼一つ者の様に、輝きて見え紛ひぬ、義尙公もいと清らに、年加はり給ひし故か、一入に位備はり、庭を見晴らすはれの方に、靜に座につき對面あり。今日は通常の文人は省き、その才のいと賢しと、音に聞えし學者十人、呼び寄せ置きて其中に、雲井之丞を打ち交せて、義尙自ら題を出し、詩文章を作らせ給ふ。此は是れ雲井之丞が、

學力如何あるべきと、試み給ふものなるべし。其處より少し隔りし、座敷には嘸あり、まづ笛は義尙公、鼓の役は四郎正尙、太鼓は小五郎晴命と定め、謡は光氏謡ひ給ふ。高砂、つぎに、松風なり。其外遊興種々にて、彼處にては歌を詠じ、此方にては連歌を催す、其等の事を知らずして、詮方なげなる人々は、庭より下り立ち船に乗り、棹さし池に離れ出て、釣を垂るゝものも多かり。此時謡は末になり、須磨の浦浪聲々と、打ちあげ給へば折にあひたる、松風颯と吹き合せ、池の漣さわだちて、いと面白き有様なり。雲井之丞は文章を、綴りながらも彼の池にて、魚釣る様子の目に掛り、耳に嘸の音色を聞き、斯く人は餘念もなく、遊べる中に我許に、何故苦しき目を見せ給ふと、世を恨めしく思ひつゝ、眞先に作り果て、書き果てて差置けば、學者共は、これを見て、若君に先越れしと、心の急げ急がるゝ程、文章の下らぬにや、書き過ち書き過ち、打ち案じてのみ居たりしがやうゝに認めをばり、頓てお前に持ち出でければ、義尙これを熟々見るに、詩も文章も雲井之丞に、及べる者一人もなし。我ばかり斯く思ふにやと、學問を年頃好める、昵近の侍を、呼び集めて見せ給ふに、何れも何れも驚き譽め、冠者の君は眞にこれ、天性の御才智、如何思ひ給ふにかと、學者共に尋ねけれど、十人とも恐れ入り、たとへば、お腹に在しまし、時より學ばせ給ふとも、二十年には遙に足らず、年

老いる迄我々は、何をして居たりし事ぞ、後世恐るべしと云ふ、聖賢の言葉を今、思ひ當りて候しと、口を揃へて言ひければ、義尙は機嫌よく、雲井之丞を是よりは、義植の師と仰がせ、學寮の司とせん、豫て用意や爲し置きけん、其位の装束を、賜ひければ雲井之丞は、更にも言はず光氏も、大方ならす打歡び、親の名迄も揚げよと言ひし、本意は今日こそ叶ひしと、義尙に數度、禮を述べて彼の装束を、次へ立ちて着換へさせ、汝は先へお暇願ひ、赤松の館へ行き、小毬始め何れへも、披露せよと、ありければ、雲井之丞畏り、再びお前に立出でて、不肖の身に有り難き事にこそと拜謝なし、急ぎ赤松の館に至り、装束の儘打通り、今日の事どものたまひければ、小毬當吉はじめとし、二葉の上の頃よりして、館に仕へし者共は、唯嬉し涙に暮れ、暫時は物言ふ者もなく、稍ありて小毬は、冠者の君の手を執りて、佛壇の前に誘ひ、二葉の上の位牌に向ひ、活きたる人にいふ如く、斯々と打語らひ、又伏沈み泣きにけり。

扱東山にては、其日もやうゝ暮れ果てて、嘸換りて樂となり、月ほのゝとさし出で、庭の景色も一際優り、假山、瀧口、中島の、燈籠の火のちらゝと、水に映るも面白し、はや遊興も果て義植公、暇申して立たせ給へば、光氏も御供と立ち出でしが心の中に、香壽丸は富徴前の、正しき孫の

事なれば、逢ひ見たう思されん、是迄來ながら我前を、唯踏過ぎしは中惡き、光氏附き添ふ故ならんと、必ず恨み給ふべし。夜は更けぬれど斯る序は、又有るまじと、義植公の、後に留まり香壽丸を誘ひ彼處へ行きければ、富徹前打悦び、急ぎ對面し給ひけり。顔などもいたく瘦せ、白髪はさながら雪の如し、世に惜しまるゝ花は散り、茨はいつも縁なり、長うも世におはする者かな、佛の説ける宿世の約束、前の世には善根を、施し給ひし者ならん」と、心の中に熟々と、光氏は思ひしなるべし。富徹前はいと疲勞げに、脇息に打凭れ、「老耄て何事も、今は忘れ侍りぬ、嬉しくも訪はせ給ひ、昔の事の夫彼を今更思ひ出でたり」と、打ち泣けば香壽丸、いたいに手をつかへ、「遠く離れて室町に、唯今では住みます故、度々お目にも掛かられませぬ。父君ははやお先刻、先へお歸り遊ばしたれば、今晚は急がれます、又々重ねて参りませう、御機嫌宜う」と言ひければ、光氏も言葉添へ、宜き程に拵へて、匆々に立ち上る。表の方に控へし供人、すは御歸りとひしめく聲、さきを追ふ聲、喧しき、響を聞くにも豐徹前、胸打騒ぎあら奇怪ぬ、光氏の威勢かな、命長くて斯る世の、末を見るこそ口惜しけれ、嗚呼義尙の代なりせば、斯くはあらじと昔戀しく、人目を憚り泣きにけり。さなきだに年老ゆれば、心の僻む者なるを、是は況てや邪曲勝り、實の子の義尙さへ、母の機嫌を取り苦しく、心を痛めし時

もありとぞ。山吹は此日に彼の、光氏が文を持ちて、九條へ行かんと思ひしが、紫の上より召され、一日お側にありて行かず、其次の朝光氏に、斯々と聞えしかば、光氏暫時思案して、「我思ふ仔細あり、さあらば今日午過に、御身まづ彼處へ行き、後より重ねて我使の、行くのを待つて居るべし」と、玉葛の假寓を、委しく問はせ給ひければ、山吹は畏り、仰せの時刻を考へて、さて九條へ赴きて、ありし事ども細かに語り、御文を渡しければ、玉葛は押し戴き、打ち開いて讀み畢り、「世に有難き事ながら、一筆なりとも實の父の、御示に預からば、夫こそは嬉しからめ、田舎に育ちて不束な、此身が争で見も知らぬ、さる上品なる方々の、在る邊に交はらん」と、唯只管に苦しと思ふ氣色の顔に現はれければ、山吹は膝すり寄せ、「先頃も申した通り、高直様は御子の多き、故にやあらん貴方をつひぞ、御尋ねなされた噂もなし、光氏君は黄昏様の、御由縁ちやとて年頃月頃、御心に掛けられし、お行方が知れたとて、殊の外なる御悦、己れが眞の娘を今度、尋ね出したと人にも言ふ、彼にもその事言へとの仰せ、君には御子はたゞお二人、御總領は離れてお住居、お側には姫君ばかり、紫様が何程に、麗ちやとて申さば貴方の、母君様も同じ事、さすれば彼館へお移りでも、お心は置かれませぬ、さうしておゐて遊ばせば、自から高直様も、聞き付け給ひて遠からず、お逢ひなされるは知れた事、親子の

契は絶えぬ者、貴方のお目に掛りたく、眞の雲を纏むやうな、妾が願も神佛の、御導きにて遂には叶ふ、これは況てやおはします、處も知れておいでなされば、必ず御苦勞遊ばすな」と言ひ慰むるその折から、光氏が使の者、唐櫃やうの物を荷ばせ、山吹を尋ね來たり、此れ其方へと渡しければ、春之助が受け取りて、内へ昇き入れ唐櫃の、蓋を取れば玉葛に、贈り越されし帶小袖、堆きまで入れてあり、これは今日紫の、上にも此の玉葛が、事を光氏物語り、彼の方よりの計ひなるべし。織物縫物紋纈、その美しさ田舎びたる目には殊更珍しく、宮城は更なり朽葉さへ、打ち返しては眺めけり。其中に日もたけければ、山吹は用意せし、唐の紙の見事なるを、取り出だして「御返書を、サア是へ遊ばせ」と、勧められて玉葛は、田舎者の片言に、書きたる物をと恥しく、思ひ乍らに只灰に、書き流し、山吹は受け取るより道を急ぎ、嵯峨の館に立ち歸り、直にお前に差し出せば、光氏は打ち抜き、手はまだ手弱く見えながら、筆艶ありて卑しからず、さる山里にて生長ちたれば、如何あらんと案ぜしが、是にて心落着きたり、誰々も知る如く、我れ六條へ館を構へ、近きに其へ引き移つれば、其後彼をも彼處へ迎へん、御身の實家も、六條とか、さすれば一と先づ玉葛を、父の家に呼びとり置かば、愈々便宜よからん」なぞ細々語らひ給ひけり、是よりは六條に、光氏が館を新に、營みたる其の由を言は

ん。素より嵯峨は花桐の、母の住居を次第く、建て擴げしにてありければ、心に適はぬ處多し、同じくは見處ある、地に移りて彼の大井の、山里人など呼び集め、近く住ません心にて、其處此處を撰びしが、桂川の別館は、眺望もありて面白けれど、餘りに人里離れたり、六條は遊女を集へし里の構ありて、騒しきには似たれども、少し道を隔れば、田を見晴して景色よく、此處には富める商人の、別荘と名づけたる、下屋敷多くありて、泉水假山庭なんどの、をかしきもありければ、黄金を積みて夫れを求め、障はる町の家を毀ち、道を附け換へなんどさせ、いと廣き構造として、夫を又四つに割り、築地板垣などにて、十字形に仕切りたり。此の春より打掛り、已に此頃造り果て、吉日を撰みて移り給ふ、さて四ツに割りたる、坤の方は、町家を毀ちし後にて、阿漕が一度住みたる地なり、其の縁により此處へ建てたる、館は磯菜が折節の、遊山所と定め置き、常々留守には空衣村萩、二人を住まさん設なり。長は雲井之丞、例の花里これに傳く、巽は自から夫婦の住居、乾の方は朝霧を、呼び迎へんの用意なり。何れも館の結構は、言ひ盡すべくもあらず、もと在來りし池をも山をも、見る様惡しきは覆し、水の趣山の姿、更に造り更め給ふ。又紫は常々に、春こそ宜けれ磯菜は秋の、眺望に如く事なしと云ひし、其願の心の如く、水草をも植ゑられたり、まづ南東は山高く、櫻

は更なり桃海棠、花の木の敷を盡し、池の様面白く、御前近き前栽には、五葉紅梅藤山吹、岩躑躅などやうの、都て春の玩弄を、専らに植ふ渡し、秋の草をば斑々に、其の中にほのかに交ぜたり。扱磯菜の遊山所の、方には西へ押し回し、をかしき山のありければ、元の儘にて紅葉の色、濃かるべきを繁く植ふ、泉の水は彼の山の、霧を遠く打ち回らし、遺水の音まさるべき、巖を組み上げ其の末は、瀧に落して秋の野を、遙に續けし其の果は、目も及ばぬばかりなるが、其頃盛りに咲き亂れ、錦を布きしに異ならず。武藏野の原宮城野の秋と云ふとも是には争で、及ぶべきとぞ見えたりける。又良には涼しげなる泉ありて夏によれり、軒端に近き吳竹は、下風涼しかるべく思はれ、木高き森のやうなる木ども、木深きもいと面白く、山里めきて卯花垣根、殊更に爲渡して、昔覺ゆる花橋、百合撫子などやうの、花の種々又春秋の、木草をもその中に、彼方此方へ打ち交ぜたり。押し通して東は馬場なり、或は騎射或は打毬、又は五月の競馬、遊所に設けしなれば、堀には菖蒲を栽ふ繁らせ、其向ひは厩なり、西より北を築地にて、隔てし外は御藏なり。唐竹松の木いと茂きは、雪を詠めん爲なるべし。冬の初朝霜を結ぶべき菊の籬、我は顔なる柞原、その外をさく名も知らぬ、深山木までも移し栽ふしが、所柄によるにやあらん、いと面白く見えにけり。さて移轉は一度にと、定めさせ給ひしか

ど、騒がしきやうなりとて、朝霧は従はず。磯菜も重ねて緩やかに、参りて見んとて延べさせられたる何事も宜ふ儘なる、花里ばかり雲井之丞に、傳きて其夜移れり。光氏は世の譏を慎み、供人も大方省き、紫も夫に準じ、密に移り給ひければ、後にて聞きて御供に、洩れたる事を口惜しと、思へる者もありけるとぞ、さて紫の在する方は、春の準備の水草故、此頃には合はざれども、中にも取分館の構造、磨き立てて高樓より、遙に望めば六條の、廊通ひする螺客、編笠を打ち冠り、可笑しげなる姿して、往來ふ様もかすかに見え、いと珍らかなる事多かり。斯くて四五日過ぎて後、磯菜の方は此事を、義植公へ聞え上げ、暇を願ひ彼の秋を、むねとなしたる坤の、此處の館へ來たり給ふ。其の有様は光氏が、移りし時の供人より、遙に多く嚴し。世に幸の優れしとは、是をこそ云はめなんど、偶然昔を知りたる者は、心悪くも思ふもあり、併しながら斯く磯菜を、重く待遇傳くも、これ光氏が威勢なるべし。此處に逗留ある中に、をりよく時雨の降りければ、紅葉斑々色付きて、えも云はれず面白し。風打ち吹きたる夕暮方、硯の蓋にいろく、花紅葉をこき交せて、磯菜の方より紫の、上に夫れを参らせらる。此の館の總構を四つに隔てし築地の上へ、高樓より高樓へ、廊下を架けて往來の、容易きやうになしたりければ、磯菜の使は其の反橋を、渡りて頓て此方へ参る。大きやかなる女の童

折をりに遇あひたる紫苑しぜんの模様もやう、紅もみの裏うらさへ色いろづきし、楓かへでと見みえていとをかし。室町むろまちの奥おく深く、仕つかへ馴なれたる者ものなれば、そのとりまはし外ほかに似にず、取次とりつぎには小辨せうべんが立ち出でて、紫むらさの上うへのお前まへへ、差さし出でせば直すに取とりて、開ひらき見み給たまふ磯菜いそなが文ぶんの、其末そのすえに發句はくくあり。「春はるを待まちつ園のへ紅葉こうじや風かぜの便つて」此方こなたの若わかき腰元こしもと共ども、彼の使つかひをさましく、待まち遇あす様ようのをかしきを、紫むらさは見みやりなから、硯すゐりの蓋ふたに苔こけを布しき、岩いわなどのやうに作つくらせ、返かへしは五葉ごようの枝えだに結むすび、渡わたし給たまへば彼の使つかひ、受け取とりて立ち歸かへる。磯菜いそなは急いそぎ開ひらき見みるに、是こゝも亦また返かへへしの奥おくに、「風かぜに散ちる紅葉こうじは輕かろし松まつの蔭かげ」繰くりり返かへしては打うちち吟ぎんじ、「色いろある紅葉こうじを思おもひも掛かけぬ、綠きぬの苔こけに換かへ給たまひし、即座そくざの發明はつめい通常つうじょうの、人ひとには所詮しよせん及およばぬ事ことと、傍かたはらの人ひと々々に見みせ給たまひしかば何なにれも打うちち寄より、其上そのうへに恐おそれながら、此こゝの御手おんての美うつくしさも、類たぐひはあらじと感かんじけり。此こゝの時とき春はるの館くわんにて、光みつ氏は彼の使つかひの、歸かへりし後のちにて紫むらさに、打うちち向むかひてのたまふは「御身おんみが何なにと書かきやりしか、知られど今は先まづづ、大凡おほよそに棄すて置おきて、年とし立ち返かへり來きる春はるの、花はなの盛さかの頃ころを待まちち、其そのの時とき返かへ書かきは聞きえ給たまへ、此こゝの頃ころ紅葉こうじを惡にくまに、言いひなさんは立田たつた姫ひめの、思おもはん所ところも憚はにかりあり、今は枯木かれぎに等おなしくとも、櫻うづの木こ蔭かげに立たち隠かくれ、おはしましなば其そのの花はなの、開ひらく折をりには自みづから、強つよき言葉ことばも出ででなん」と、まだ年とし足たらはぬ娘むすめなどどもを、賺ずかすやうにのたまふも、いと若わかやかにて見處みどころ多おほかり。實まことに盡まきせぬ御交おんからひ、斯かの

如ごとくに世よを安やすく、思おもふ儘ままに過すし給たまふも、若わかき程ほどより宗全そうぜんが、事ことにてさましく辛くる苦くなし、途みちには彼かれを討うち滅めぼし、世よを平ひらかに人ひとの氣きを、安やすうさせ給たまひたる、其そのの餘慶よけいに因よりてなり。

扱朝霧あつせきりは斯かたく方々かたがたの、引ひき移うつり住すみて後のち、數かずならぬ身みは何時いつとなく、紛まぼして行いかんと思おもひ、神無かみな月つきにぞ渡わたりける。寵愛あやうあい厚あき姫君ひめぎみの、母上ははのうへにておはしければ、自みづからは密ひそやかに、爲な給たまひたれど他人ほかひとより、物々ものものしく待まち遇あ給たまひ、夏なつの館くわんの結構けつこうは、春はるにも劣せむらざりけるとぞ。光みつ氏は玉葛たまかくを、我われが住すむ方かたへ迎むかへんと、初はじには思おもひしかど、客きやくを接待もてなす書院しよゐん座敷ざしきの、他ほかには明あきたる處ところもなし、其上そのうへに紫むらさを、人ひとの敬うやむ勢いきほの、日ひ々に増いりて出い入いり、人ひとの餘あまりに繁しげければ、再またび又また思案しよんをかへ、坤ひつしほなる彼の秋あきの、館くわんへ行いきて打うち見みるに、磯菜いそなの來きたるは稀たま々々にて、空衣からぎぬ村萩むらな親おや子このみ、斯か様の人ひとを預あづかりんには、いと靜しずかに宜よろしけれど、此處こゝへ置おきなば玉葛たまかくをも、村萩むらなと一ひと列つらに空衣からぎぬが娘むすめと思おもひ、我われ子こと人ひとの聞き知るまじ。又また君きみ一ひと郎らうも繁しげ々に、來きりて逗留とどますることあれば、惡わるき名なをや立たてられん、良よの冬ふゆの館くわんは、淋しみしげなれど花里はなぢは、打うちち語かたらふにも心こゝろ安やすく、昔むかしの蓮葉れんがに引ひき換かはり、身みを慎しんめば召めし使つかふ、者ものまで自し然ぜんに靜しずなるを、見究みきゆうめて雲井くもゐ之の丞じやうを、已いに去さる年とし預あけたり、玉葛たまかくをも彼かれに任まかせて、置おかんに如ごとく事ことあるべからず、さる山里やまぢにて成なり長ながたれば、華はなやかに騒さわがしき、邊あたりよりは忍しのびやかなる方かたこそ却かへつてよからめと、或ある時ときに紫むらさに打

ち向ひ、いつぞや御身を俄に語らひ、小袖を贈りし我娘、玉葛を生みたるは、黄昏とて卑しき者の、
 娘ながら故ありて、予故無慙の最期を遂げたり。嗚呼人の心立は、氏素性には更に因らず、父君の御
 血筋に、疑ひもなき女にだに、執念の恐しきが、ありしを見たる事のあり。彼の黄昏が母は世に、類
 ひ稀なる邪慳の性質、娘は夫れに引換へて、心素直に然も利發、さは云へ息女と崇めらるゝ、武士の娘
 の一種ありて、屹度したには及ばれども、只何となく愛敬あり、縮々として情深き、方は類ひもなく
 覺ゆ。さる故に人に隠し、墓は營み取らせたり。其が形見の娘の行方を、不圖した事より失ひて、い
 と口惜しと思ひしが、圖らずも山吹が、尋れ出して此頃は、近き邊に居るなれば、頓て呼び取り花里
 に、預け置かんと思ふなり。御身も逢ひて給はれしと、いと哀れげに昔の事、思ひ出ださせ給ひたる、氣
 色の顔に顯はれければ、紫も打ち濡り、「それは悲しい御嘶、さほどの事を何故妾に、今まで包ませ給
 ひし」と、恨み給へば光氏打笑み、世に在る人の事ならば、問はず語りを不圖爲出す、事もあらうが
 彼は早、夕の露と消えたる身、玉葛が事の序に、語るが心に隔てなき、證と思し給へよかし」と、聞い
 て紫なほ摺り寄り、「世に亡き人とのたまへど、それならいよくお物語り、遊ばしても宜い筈の事、
 假令は賤の娘でも、君のお胤を宿せしもの、年忌月忌の墓参りは、私が致すが道、君ゆゑ最期とのた

まへば、非業の死とでも云ふ様な、事では無いか夫れなれば、いよく憫然に侍るなり。玉葛とやら
 んをば、少しも早く迎へ給へ、母も存生へおはしなば、打ち添ひ渡り給はんを」と、云ひさし涙さしく
 めげ、光氏も吐息をつき、「存生にて居つたなら、大井の里の人程には、して据置かんと果敢なくもし
 と、のたまへば首を振り、「世におはしても夕暮を、朝の景色と一列に、押し並べては見給ふまじ」と、
 云ふは常々朝霧を、餘りに重く待遇ひ、給ふによりて自からも、心置かるゝ故にてあり。その傍に明
 石姫、何心なくうつくしげに、此の物語りを聞き給ふ、其の愛らしさを紫は、不圖願みて此姫を生み
 たる母の事なれば重く待遇給へるも、道理ならんと思ひ返へさる。斯く云ふは九月の事にて、まだ朝
 霧が良の、彼の夏の館へは、引き移らざる前の事なり。此折に遊佐の國助、お目見え願ひ候ふと、御
 取次の言の葉が、申し上ぐれば此方へと、直にお前に召し給ふ。國助末座に蹲り、「まだ此の御殿へ罷
 り出でず、拜見旁御機嫌を、伺ふ由を述べければ、光氏紫夫々辭を掛けてさて其後、これへ」と
 光氏の、膝元へ近く呼び寄せ、「汝はや當年は、四十九になれる由、紫に此頃聞けり。年賀を祝ふは誕
 生日に、するが昔の例なれば、來年其方の生れし日に、紫の住居へ參れ五十の賀を珍らしく、新館に
 て祝はせん。其の用意も言付けて、大方に整ひし」と聞いて國助恐れ入り、「世に有難き御意を受け、

中々に御禮を、申上ぐべき言葉も無しと、なほさまぐに浮世語り、聞え上げて御前を、退くより直に乗物を、飛ばせて館に立ち歸り、此上もなき吉事ありと、神に御酒を捧げさせ、先祖の位牌に打ち向ひ、披露に及びなんとすれば、妻の梓總領民部、國茂をはじめとして、先年一色多京へ嫁せし、娘の賤機折よくも、父母の機嫌を聞かんとて、館に來たり居たりしかば、それが生みたる巻衣とて、まだ幼き娘をさへ、引き連れて國助が、邊に居流れその仔細を、問へば國助莞爾く打ち笑ひ、「來年某五十の賀を、此度新に營まれし、御殿にて内君に、祝はせて給はらんと、仰せを云々蒙りたり。先年光氏君、須磨明石への御留守中、糺へ貢を怠りし、申し譯に腹切らんと、なしたる折も寛仁の、御沙汰によりて命を助かり、今又老の末に至り、斯くまで厚き恵に預る、己れが果報も娘ゆゑ、御寵愛の人々も、多かる中に取り別けて、御思ひの勝れしかば、内君と仰がれ給ふ、結構言葉に述べがたく、春を旨と造られし、御園に栽ゑし梅の薫、我が家までも匂ひ來て、面目にこそ思ふなれ」と、語れば國茂進み出で、「光氏君の御仁徳は、世に隠れなくおはしながら、我輩へは只今まで、左程に情も懸け給はず、懼りながら父上の、御不首尾故ならんかと、心の中に思ひしが、御館にて御年賀を、祝はれんとは家の譽、世の聞えといひ此上の、御喜びは候ふまじ。仰せの如く是全く、内君の御執成に、

候ふべし」と其他の子供も齊しく口を揃へ、愛度よしを述べけれど、妻の梓は澁々に、答のみして左迄には、歡ぶ氣色の見えざるを、氣の毒にや思ひけん、まだ九歳か十歳ばかりの、巻衣は手を支へ「祖父君様を其様に、光氏様が御大切に、遊ばしますは被仰るとほり、紫様のおいで遊ばす、夫故でござりませう。此頃は又薄雪様、義植君の御心に、叶はせられて磯菜様と、同じやうに御寵愛、さすれば頓て御祖母様の、賀の御祝ひの其時は、室町様で遊ばすに、屹度違はござりませぬ、喃母上」と言ひければ、賤機は吐息をつき、「眞に申すも恐れながら、妹二人は又と世に、比類稀な幸福者、妾が連れ添ふ多京殿も、香壽君の御傳役、立田様との御縁もあれば、人の用ひも格別にて、何の不足はなけれども、兎角に止め他心、私が年が二つ許り、上ぢやと言つて己れが姉、己が姉とて賤機と、名を呼び給ひし事もなし、私をも今些と遅く、お生みなさつて下さつたら、此様辛苦はあるまいと、梓の機嫌を直すべき、その言ひなしを幼きものに、教へられても夫れを言はず、我が迷憫のみ並べ立つる、心よりして自から、遂に夫に飽れしなるべし。これを手本に格氣嫉妬は、慎しむべき事にこそ。山吹は光氏の、仰を受けて六條の、新館より程近き、父の家に一先づ歸り、玉葛をも忍びやかに、其の家に移しける。腰元女は御迎への、其時に君よりして、參らせ給はん筈ながら、心安く使ひ給は

ん、人もなくては悪しかりなんと、思ふに折よく筑紫にて、都の様を玉葛に、見習はせんとて抱へたる、女の先年暇を乞ひ、京に歸りて住居するを、宮城が不圖聞き出し、其所へ急ぎ尋ね行き、其の手筋より彼所にて、使ひ馴れたる女共、幸ひにまだ夫をも持たず、都の中に奉公なら、又願ふよし云ふ者を、彼方此方より索め出し、夫にてもまだ足ざるをば、女商人やうの者に、云々と頼みければ、都は廣き處にていとよく尋ねて連れ來り、玉葛が衣服の類は、光氏よりして贈り來し、支度大方整ひけり。此の趣を山吹より、聞え上げたりければ、さらばとて光氏は、彼の乾の館へ渡り、花里を近く呼び、「我まだ若き其頃に、哀れと思ひし女ありしが、世を憂きものに思ひとり、果敢なき山に隠れたり。夫れに擧げし幼き人、年頃行方を尋ねしかど、更に知れる者もなく、艱盛は疾く過ぎて、花ならばはや散方に、なりしを此頃思ひも掛けぬ、處よりして聞き出でたり。此の西の書物藏を、外へ移して館を廣くし、此處へ呼ばんと思ふなり、雲井之丞を預けし上、重ね／＼に心なき、頼み事にはあんなれど、彼をも後見して給へ、賤女めきて成長たれば、言葉も囁や横詭り、聞き悪き事多からん、折に觸て能く教へ、武家の行儀を見習はせ、主と思はず妹と思ひ、躑て呉れるが肝要ぞ、母も疾に亡せたれば、今は不憫のものなり」と、いと仔細にのたまへば、花里は打ち驚き、「實に左様の御方の、お

はしますとは知らざりし、姫上はたゞ御一方、お淋しう思さんと、存じ上げしが夫れこそは、愛度事に侍るなれ、御文庫を他の處へ、移し給ふ迄もなく、此お館はなほ廣し、雲井の君は男御子殊には日に増し温良く、ならせ給ひて私共とは、御遊も遊ばされず、明暮閑暇にて徒らに、たゞ浮々と暮すばかり、是よりは賑やかにて、嬉しき事に侍ると、例の通り安らかに、いらへければ點頭き給ひ、「彼が母は心優しく、云ふが儘なる性質、御身の心によく似たれば夫故預け置くなり」と、是より彌々玉葛を、迎へ給ふ催は、頼なれども内々の、人にも光氏自らの、子と云ふ事を包みしかば、何れも何れも不思議に思ひ、御微行と言ふ事の、近年なければまだ須磨へ、下られざりし其昔の、舊者を何處よりか、尋ね出させ給ひしならん。御辭はまだ直らずやと、譏れる者もありしとぞ、其頃は神無月の、末つ方とも霜降月の初とも云ひ確なる、事は知られど玉葛を迎へ給ふ其日になりぬ。山吹が此頃うち、それぞれ指圖をしたりしかば、宮城を始め附き添ふ女の、姿なども田舎びす、御迎は疾く來たりしかど、態と日暮れて新館の西の門より打ち通り、山吹が何事も、よく心得て導きなし、まづ玉葛を花里に、對面させて假の部屋に、準備置きし一間所に、誘ふ程なく其夜直に、光氏君渡り給へり。廊下の戸口にイみて、「此處明けよ此處明けよ」の、お聲に山吹打ち驚き、走り行きて掛金を、かい放てば笑はせ給

ひ、けしからぬ是は用心、宵の約束なければと妾に人は入れぬ氣か、雪洞の火のいと闇し、是は又忍ぶには、何か便が宜さうなと、設の席を打ち過て、彼の玉葛が落着きたる、一間所の近邊へ坐り、屏風の陰のが玉葛ならん、親の顔は床しき者と、昔よりして言ひ習はず、御身は左程に思はずかと、屏風を少し押し遣られ、玉葛はたゞ只管に、羞かしければ打ち側み、顔を背けて居る有様、麗はしければ光氏嬉しく、今少し光を見せよ、昏き方に隠るゝが心悪しとのたまへば、山吹心得燈を掲げ、少し此方の方へ寄す、まア聡しい事をする、人やしと、少し打ち笑ふ、口元目元愛らしう、實に山吹が去りし頃、彼は母にも優りしと、云ひつる事の違はざるを、心に思ひ光氏は、なほ親めきて甚親く、御身の行方を不圖失ひ、今は何處に住む事と、忘るゝ隙の無りしが、不思議にも斯く廻り逢ひ、さながら夢の心地して、過來し方の事共を、思ひ出していと悲しと言ひつゝ指を折り數へ、「親子の中の斯く年月、隔て、逢はず音信だに、聞かで過ぎしは稀なる事、今は左程に初々しく、若び給はん年にも非ず、年頃の物語、聞え杯も爲給ふべきを、俯向いてのみおぼするは、如何なる事ぞ」と打ち恨み、給へど何と云ひ出でん、言葉もなく顔打ち赧め、父母は如何にあはれと思ひけん、三年になりぬ、脚立たずして、夫は姪子を詠し歌、岩樟舟にあられ共、筑紫の海へ突き流され、沈みし後は何事も有るか、

無きかに世を送り、物も更々覺えずと、仄に聞ゆる其聲の、彼の黄昏にいとよく似て、若びし様も其儘なり。光氏は微笑て、「其沈みしを知らずして、今迄心を痛めし」と言ひつゝ彼が今の答、卑しからぬをほとゝ感じ、居給ふ所へ雲井之丞、罷り出でて手をつかへ、「姉上のおぼする事、只今迄は努勞存ぜず、數ならずとも私へ、昨日にも御物語、これあらんには最前これへ、渡らせらるゝ其時の、御迎へに參らんを、今承はり驚きし」と、仰せを山吹打ち聞いて、心の可笑さ自から、顔に出づるを光氏は、目まぜにて押し止め、「人に深く包むの餘り、其方へ云ふのも忘れたり、是より随分中よくせよ」と、後々の事山吹へ、「言ひ付け置きて起ち給ふを、彼の玉葛が腰元ども、襖障子の隙間より、差覗いて密々聲、「光君とは小供の時より、お噂を聞いたれど、其後は浮世の事に、係けて思ひも出さなんだが、不思議な御縁で見上げた」と、云へば一人が引き取つて、「大兒様に居た時に、廣さも廣し此様な、立派な御家はあるまいと、思つて居たが此のお館を、見たれば彼方は影もない」と、言ひ懸けて不圖宮城が顔、見やりて口に袖覆ふ、宮城は莞爾打笑ひ、「夫は知れた事ながら、思つたよりも亦格別、物凄きまで光氏君の、優美に在するは、其苦の事でもあらうが、彼の若君の麗しさ、どれくも、御様子容貌の、風流やかなと磨き立てた、此の御殿の結構に、目移りがして悸々する、日外初瀬の觀音で郡

司の奥方に、玉葛様を爲たいとて、母上が一心に、拜んでおはしなされたを、山吹様に笑はれたと、被仰たが此の御様子を見上げて初めて合點が行た、況てや信樂現太夫が、押し掛けて姫君を、貰ひに來たを今更に、思ひ出しても思々しいと、小聲に語りあひにけり。光氏は我が住む方へ立ち歸へりて紫に玉葛を迎へたる、由を語りて扱ふやう、「さる山家にて育ちしかば、田舎めきて可笑からんと、心に悔づり居たりしが、中々に都の者も、恥しき迄優にて、尋常なる性質、花里が靜なる、心になりしに引かれてや、彼所の館は物淋し彼を置きなば正尙晴命、其外若き者共が、聞き傳へて問ひ音づれ、さし覗きなどして、賑やかにこそなるべけれ。まだ言ひ約束せぬ娘ある、家には常に浮れ人、集るが世の習ひぞと、云へば紫打案じ、「さういふ事を制するが、親のやくにてはんべるを、人の心を浮き立たせ、御慰みになさらんとは、奇怪ぬ思召し、正尙様晴命様は、玉葛の叔父上なり、昔は姪を妻共せし、事のなきには非ざれど、今はさう云ふ事を聞かず、さすれば何程玉葛が、麗はしきとて戯れがましき、事を何とてのたまふべき」と、言ひ詰められて光氏手を拍ち、「問ふには落ちず語るに落ちると、言ふ諺はこれなるべし、日外も聞えし如く、黄昏は實に我が、可憐と思ひし女ながら、夫より前に赤松高直、彼に通ひて擧げしが、彼の玉葛にて我が胤ならず、夫れを何故館へ迎へ、傳かすると思

はんが、紛失なしたる家の寶、小烏丸の在所を、確に知りしは黄昏が、命を棄てて其の母を、諺めし故にてあんなれば、其恩に酬はんため、假に我子と言ひ做したり。さりながら此事は、人に沙汰ばなし給ひそ、雲井之丞も姉なりと、思ひ居りなば同じ館に、住みたりとて亂がましき事のあるべきいはれなし。我も只管親めきて、待遇ながら實の血統に、非る故に思はずも、慰みがましき事を言ひ、告められてはほとく赤面、否慰みには御身を一人で、置きなば此所らの若侍が、さまんくに氣を焦みて、さぞ面白かるべきを、不量見に我妻と、定めて後悔するなり」と、笑ひ給へば紫は、面赧みておはする様、いと若やかにてをかしげなり。少し程經て光氏は、山吹を近く招き、「玉葛に傳きの、多くなりて乾の館は、混雜すべきと思ふにより、別に廚臺所は、營みて其所を預くる、役目は即ち春之助と、名は知られども宮城の夫、兩人に言ひ付けん。彼等が父彌五六郎と、やらんよりして忠實しく、仕へし事を玉葛が、深く歎び居る由なれば、今更國へ歸へすのも、本意なし」とのたまふにぞ、山吹は此事を直に傳へたりければ、二人は更なり母朽葉も、悦ぶこと大方ならず、急ぎ筑紫へ使をたて、妻と夫を迎へけり。春之助は年來田舎に、沈みし心地も新まり、人の羨む御館へ、朝夕に出入し、人を隨へ指圖して、刀指す身となりたるは、此上もなき面目と、尙も忠義に仕へしとぞ。紫は玉葛を、高直

が娘と聞き、假令は深く我君の思し、婦人の子にもせよ、御胤にも非ざれば、急ぎ逢ふにも及ぶまじと、其儘に打ち過ぎて、年の暮にぞなりにける。

さて光氏より方々へ、春の準備の帯小袖、贈り給ふが年々の、習慣にて有りければ、玉葛はじめ其腰元に、召し使ふ女迄、いよく田舎めかざる姿に、し爲さんと思しければ、常の年よりなほ多かり、狐熊の紺掻は、濃き赤きなどさままゝに、世に無き色合匂ひを染め、西陣の織殿は、我もくと手を盡し、目もあやなるを工みたり、それごとくに縫ひ上げて、小袖簞笥小袖櫃、數多に詰めしを言の葉小辨、其外數多の腰元共、打ち返し、其下着の上にはこれ、彼には夫れが適らんなど、取々云ふを光氏は、差覗き見て、「色數の多きこと哉方々に、恨みなき様これを頰くるは目移りせん」とのたまへば、紫はさし寄りて、「優劣は更になく、どれくも見事ながら、着給ふ人のお姿に、思ひ比べて參らせ給へ、假令は何程美しい、模様にもせよ其人に、似合はぬは見苦しい、ものに侍るといひければ、光氏は打ち笑ひ、「知らぬ顔してまだ逢はぬ、人の姿を推測らんと、斯くはのたまふものなるべし、されば御身は此中にて、何れをか着給ふ」と、云はれて紫顔背け、「それを手本に遊ばすとや、私にはどれが似合ふか、存じませぬ」と恥らひ居る。「夫なら己れが見分けてやらう、名に似合ひたる濃紫、くでん鼠

の今様色、友仙染の櫻咲く、遠山眉の銀通し、手を盡したる縫の糸、勝れたるをば御身の着料に、爲給ふべし」とて衣桁へ掛けさせ、「是は模様も愛らしき、手鞠羽子板ぶりく、毬杖、肩より襟は烏羽玉の、闇の黒きを微々と、曙染は明石姫、島に洲崎に立波を、染めたる色は薄縹、海松の緑にしやれ貝の、白く亂れて勾當向き、梅も櫻もその貝の、名にはあれども匂ひやか、ならぬのをば彼の花里へ、次は隙行く駒とめて、盛を見んとや山吹の、縫の小袖に曇りなく、赤き肌着を取り添へて、なほ水色の抱へ帯、其の玉川の玉葛に」と、贈るを紫見ぬやうにて、心の中に山吹の、花は見事にありながら、枝態すげなく香も無し、あの高直が華美に、清げなれども莞爾やかならぬ、夫にこそ宵たらめと、推量れども色には出さず、光氏早く色目を悟り、「此定めを聞き付けなば、必ず腹立つ人ありなん。衣の色の良きは良し、悪しきは悪しと見ゆれども、人の心は姿によらずと、言ひつゝ又小袖を取り除け、「柳に蹴鞠唐草の、裏を付けしは何事ぞ、今程は京見物の、田舎娘もこれをば着ず、夫よ是は糺の腰元、紅に彼の大原の、神事の時の練物に、來た褒美ぢやと云うて遣り、文をも添へて贈らん間、返事をとりに來るべし。稻舟には何をがな」と、田面に鳴子の綱を引き延へ、簀笠着たる鳥威を、襪上りに染めしを撰り出し、「是こそ宜けれ」と傍に除け置き、「村萩には秋の野に、蟲盡しの散らし縫、梅の折枝蝶鳥の、

飛交ひしに唐様めきし、文字を鹿子に結び分けて、摺箔したる時代模様、艶やかなる白綾に、打ち重
 れて村濃染の、くび帯を朝霧にしと、撰り出で給へば、紫は其色品に眼を留め、彼は田舎の者なりと、身
 は謙遜りてありながら、其心は打上り、假初にも卑しげなる、事をば嫌ふと豫て聞く、噂に違はず尋
 常の、女にあらじと是も亦、人知れずこそ覺しけれ。空衣の尼に迄、梶色の小袖を見つけ、光氏自ら
 着んための、淺黄無垢を添へ給ひ、文かい認め何方へも、同じ日に使を立て、それく贈り給ひけり。

修紫田舍源氏第三十二編終

修紫田舍源氏第三十四編

寛政の頃東園といひし軍書讀。同事ト並べいふ口辭あり譬へば狼煙天を焦し、合圖のけぶり立登る
 と、一むら茂る森の裡より、馬烟うまげぶりを蹴たてゝといふ類なり。笑ふ人も多かりしが、うま煙
 では語勢弱し、音では聞えの悪るきが故、又訓にいひかへす、是も一派の釋法なるべし。予此の草紙
 に打ち咳きて、聲づくり、手道具調度なんといふ添言重言は、是よりの案じなれば、物識人の若し
 たましく、見給はんにはいとをかしと、おぼす事の多からんが、お子様方にわかり易きを專とすれ
 ばなり。さて是から面白き、所で後は明晩とは、常連のある講釋師、又來る春を待給へば、上手の作
 者でなければゆかぬを、お人集の前座の予が、長い物を説き出し、應仁の修羅場が濟で、張扇の張合
 ぬけ、いよく眠氣が御見物に、さすも承知のうへながら、まだ席亭の仙鶴堂、行燈をひかざれば、
 この三十四編目は、取わけてをかしからぬ、初音胡蝶の讀切なり。

柳 亭 種 彦

修紫田舎源氏第三十四編

此衣配の使には、小辨犬吉其外も、みな御廻りの女にて、とりと返書を持って歸る、其外に言の葉が、打ち笑ひつゝ光氏へ、密に出だし返辭あり。うち點頭きて押し聞き、讀みては片頬に笑を含み、又繰り返して莞爾と笑ひ、暫くうち置き給はれば、紫は不審く、さし覗きて見給ふに、返魂紙とか云ふ紙ならん、ちらく塵の交りたるに、「唐衣うちおかでのなきぬた哉」文字は鐵釘、假名は鹿角菜と、いふ海草の亂れし如く、夫に似合はぬ文章は、いと嬌しく辻褄合はず、呆れて佇みおはします。紫の其の風情を、言の葉は打ち見やり、思ふに違ひ給ひたる、御心の中察しやり、笑を隠して滑り出ぬ。光氏は彼の文を、紫の前に投げ遣り、「いと珍しき返書なるべし、大原祭の學びをせし、其時に糺より、若やかに粧ひて、小百合が誘ひ來りたる、彼の紅が筆にてあり、五文字が足らぬと夏冬の、差別も無くて砧哉、去りし年に紅が、父より譲り受けたる草紙、大事の品にはんべると、贈り來せしを何ぞと見れば、阿彌陀のむねわり三莊太夫、彼が父は糺の門守、その親父奴が若い時、語りしならん淨瑠璃本、今は詮方無き物故、返し遣りし」と云ひければ、「夫は併し珍しい、書き寫して明石にも、お見せな

さればよかつた物、果敢ない双紙も昔のは、哀れな事のいと多し、彼方此方の持ち傳へも、今は大方蠶蝕て、見分け難し」と紫が、いふを光氏押し止め、「否々女は何事にも、餘に深く立ち入りて、夫に染みるは却つて悪し、幼き時より種々の、双紙を見するは益無き事、如何にも心は正しく持ち、さればとても角立たず、柔順に育てば左迄に物を、識るにも女は及ばぬ者、さはいへ餘り文盲にて、薄雪や錦木の、双紙を手本に書いたる文は、其れその様に婀娜かし」と、のたまへば紫とり上げ、「紅は愚しい、性質と日外御話、夫にしては優しいこと、此のお返書を」と勧められ、心安げに光氏筆取り、「粗のきぬたの鴨の空衣」門守が草鞋を造る、藁砧を聞き習ひ、口癖になりたるも、道理なりと笑ひ給ふ。(作者申す。乙女の巻と玉葛を、打ち交へて作りしも、茲に終り、是より初音の巻に移る。)

年立ち歸る空の景色、曇り勝なる去年とは變り、麗かに晴れ渡れば、賤が垣根の中だにも、雪間の草の若やかに、色づき初めて霞み行く、山に木芽も打ち烟り、人の心も自ら、延やかに見ゆるかし。況ていはんや玉を布ける、此六條の新館、庭より初めて見處多く、研き立てたる其有様、筆を執りても記し難く、日に言はんと言足らず。其中にも彼の春を、主と作りし巽の御前は、取り分けて清潔を盡し、軒端に近き梅の香も、空焚の香氣に紛ひ、極樂淨土も斯くやと覺ゆ。女共も若やかに、勝れた

るを明石姫の、傳に撰ませ給ひ、相手の童も多ければ、此處彼處に群れ居つゝ、手鞠突くあり、羽根突くあり、斯く綺麗なる館ながら、室町御所とは事換り打ち解けて安らかに、住なし給へば仕ふる人も、心おきなく遊び戯れ、今日の元日は、子日にてありければ、庭へ下りたち小松を引き、轉び仆れて打ち笑ひ、屠蘇酒過して蹠蹠けば、蓬萊食摘引き寄せて柑子を剥き櫃を割り、火に打ち投べて食ひなどし、我を忘すれて高聲に、言ひたい儘をいひ散らすを、不圖聞き付けて光氏は、障子の隙より差覗き、千歳の蔭を寫すてふ、鏡餅大内の、例にてあれど如何様武家の、齒固めの祝には、堅きに勝栗夫れこそ宜からめ、何事ありてか喜見布、面白さうに笑ふのが、いと羨ししとの給へば、皆々はつと打ち驚き、懷手引直し、俄に行儀作るやら、袖にて口を押拭ひ、逃げ行く機會に三方を、踏み覆すやら譯もなし。今日は未明に室町へ、光氏は出仕を遂げ、歸りて後も新年の、賀を述べんとて、立ち代り入り換り、人々此處へ參り込み、物騒しかりけるが、夕つ方やうくに、事鎮りて三處の、館を一先回らんと、衣を着更て引き装ひ、立ち出んと爲給ふ處へ、姫君へとて朝霧より、割子霽籠五葉の松の、造り枝のよき處へ、絲にて作りし鶯の、美しきを止らせたるを、お使の千鳥が持て來、文諸共に差出すを、光氏取りて見給ふに、「鶯の初音聞かせよ小松原」と文の奥に書いて有り。打ち吟じて明石

姫に、渡しながら熱々と、打視りて吐息をつき、明暮見てすら顔色の、今日はよき今日は悪しと、心もとなく思へるに、況てや年月隔りて、如何に戀しと思ふらん。去年よりしては取り分けて、間近き處に住みぬれば、對面さすべき折もなし、哀の事やと心に思ひ、此の返辭をば今直に、自ら聞え給ふべし。他とは違ひ初音を惜しみ、給ふ方にもあらず」とて、硯取り寄せ兎角賄ひ、書かせ給へば姫君は、いと美しげに筆とり上げ、臆しもやらず、「巢立ちせし松は忘れず鶯の」幼心に任せし文章、くだくしく共其儘に、やるこそ宜けれと光氏は、此の返辭を千鳥に渡し、今年の惠方に當りし故か、まづ西南へ渡り行くに、秋を主との館には、名も因ある村萩が、衣の模様の萩芒、その七草も春なれば、菘蘿蔔鈴蟲と、並べていはん散らし縫、去年贈りしを着て居れり。序ながら空衣の、尼衣の住む局をも、さし覗きて見給ふに、我身は狭き所にかゝまり、佛壇ばかり大きく取り做し、蓬萊には引き換へて、佛經をあはれに飾り、闕伽桶花皿とり散らし、心ありげの有様にて、念佛讀經のその外には、梔色の無地小袖、肌着の袖の裏のみに、昔残りし紅の、ほの見えたるが懐しく、不圖光氏は中川の、螢の夜さり逢坂の、紅葉の朝思ひ出で、「某嗟峨へ移る時、御身の家へ方違へ、宿りし時に村萩と、思ひし故に戯言、云ひ掛けしもはや二十歳ばかりの、昔語となりしも夢の間、今斯く近う住みつ

るも、これ假初の縁にも非ず、如何なる故に尼となり、斯く佛には仕へ給ふ、左程に思ひ切らず共、又詮方もある可きに」と尋ね給へば空衣は、涙ぐみたる顔を上げ、「此様に淺間しい、姿をお目に掛くるのが、娘と偽り御心を、暫時が間も苦しめし、其の報にて侍るなり。若き程は前後の、辨別もなき戯れより、川次郎に帯を盗まれ、富徴様へ其事を、申しあげしが御越度となりて都を御開きと、聞いたる時のその苦しさ、君のみならず夫にまで、恥を與へし身の惡戯、年を積む程思ひ知り、佛に懺悔するより外、今は爲やうも侍らず」と、元日をも打ち忘れ、聲立て、實に打ち泣きぬ。古よりも恥かしげさ、増りて行儀いと正しく、化粧せざるがなほ優美に、見ゆれど果敢なき事など、のたまひかくべき人なられば、昔今の物語、唯何となく聞え給ひ、「我は日に／＼暇なし、されば心に思ひながら、久しく間はぬ時もあり、これ等閑に捨て置くなられば、必ず恨み給ふまじ、命のあらんその限りは、世を安く送らせんと、眞實に語り給ひ、さればとて座を立ち給ふ。今此君は室町の、御後見にて上もなき、身におはすれども假初にも、心高ぶり我意に暮り、傲顔なる事はなく、その人の程々に、心易く打ち語り、遍く恵み給ふ御蔭に、年月を送るもの、更に數へも盡し難し。夫より乾の館へ行けば、雲井之丞は室町より、未だ歸らず花里のみ、夕方なれど光氏が、送りし小袖を其儘にて、今は化

粧も薄縹、匂ひやかには粧はず、額に波は寄せれども、海松の縁の黒髪、盛りはいたく過ぎにけり。今は強ち近やかに、語りひなどは爲給はれど、其の睦しさは昔に變らず、去年ありし事今日の事、夫れ彼れの物語、聞え給ひて其後に、彼の建て添へし玉葛が、住居へ行かんと廊下の戸口に、イみ中を覗へば、山吹は疾くも知り、御迎へに立ち出で、送り來たりし花里が、歸るを待ちて新玉の、賀辭を先づそこそこに、聞え上げしが折よくも、邊に人の無かりしかば、近く寄りつゝ聲を秘め、去年の暮、一色多京泥廉がお來なされ、山吹に逢はうと仰せ、一度もお目に掛らぬ御方、不思議な事と思ひながら、お目通りへ出ましたれば、彼方ではよう御存じで、此處へ此處へとお側へ召され、光氏君の御娘を、迎へ取られて傳の、女頭は其方のよし、何卒して某が、婦妻に下し給はるやう、申し做して呉れまいか、まづ其前に密にこれをと、玉葛様への御文を、お出しなされてわりないお頼み、私は驚愕して、貴方様の奥様は、お腹こそは異りますれ、紫様の御姉上、その様なお媒介が、出來ますものかと申したら、さればさ我妻賤機は、母の粹の氣性を受け繼ぎ、その心頑固く、嫉妬の深きが年々募り、詮方なくて近き日に離別と、心の中に定めたり、妬めば去るの故事あれば、道に背きし事にも非ず。然れども此處に難義なるは、紫の上の父たる、國助の惡みを恐れ、然する時は我後妻に、娘を

送り越さん者、都の中にあるべからず、光氏君の御息女なら、流石の遊佐も口を閉ぢ、一言も云ふ事ではないと、被仰から貴君はまづ玉葛様の御事を、何處から御聞き遊ばしたと、問ひましたれば沓廉様が、己が知行は大和の國、初瀬寺の近き邊、奥賤機が久しい願、去年參詣した時の、坊が其方と同じ事、襖越に玉葛殿と、其方の話を洩れ聞いて、歸りし後に斯々と、其事我に物語り、夫より後に人の、噂するに耳を留め、さてこそ委しく知つたるなれと、被仰たので考へれば、其の夜さり彼の觀音へ、此の國司の奥方ぢやと、嚴しう人を拂ひ、參られたのが賤機様と、心の中に思ひながら、仰せの事は一々に、畏つて侍れども、御離縁のない其の中には、申し出さん様も無し、承れば奥様には、姫君もおはすよし、上流でも下流でも、繼しき中の美しう、見ゆるのは表面ばかり、底には針を持つのが習慣、恐れながら姫上を、御大切と思召さば、假初にも仇々しき、御心をお慎しみ、左様なさると奥様の、お心も何時となく、和らぎ給ふは知れた事と、御異見を申したらお腹をもお立ちなされず、其文持つて悄悄と、お歸りなされた其後に、雲井の君を御問ひなされた、御歸掛けぢやと正尙様が、私をお呼びなされ、其方が今傳き居る、玉葛を兄光氏の、娘と云ふは偽りならん、物の蔭より此頃姿を、瞥と見たがまだ島田に、結びては居れど二十の上、彼年迄行方を尋ねもせず、棄てて置くべ

き理由無し。予添馴れし妻を失ひ、獨身なるこそ幸ひなれ、媒介せよとこれは又、お主筋だけ殿しい御意、深い様子は存じませぬが、實の御子ぢやと被仰ますと、人の來たのを幸ひに、逃除いてから其後は、四郎の君は随分お目に、掛らぬ様に致しますと、語れば光氏打ち笑ひ、「何で何處へか縁附けて、やらねばならぬ玉葛なり、左程に心を痛めずと、文を持って來し者あらば、受け取り置きて我に見せよ。品によりては返書をさせ、又眞實に志、深きがあらば贈りもせん」と、彼の建て廣げし方へ通るに、まだ住み馴れざる館ぞと、思ひしよりはをかく爲なし、手道具類も細なるは、まだ揃はねど夫れ彼れの、取合せ見事に飾り、物清げに構へたり。玉葛もいと麗しく、着なす衣紋は六重七重、八重山吹の縫模様、裾を流るゝ玉川に、しなへる花の水鏡、曇ると見ゆる處なく、いと鮮明にきら／＼し。年月田舎に詫住せし、其の物思ひの所爲にや、髪の少し薄らぎしも、なほ清げなる様したり。光氏は靜に居寄り、始めて逢ひしは去年ながら、早年換はれば久しく側に、置きつる様に思はれて、一入に心安く、本意叶ひて此の春程、目出度ことは又あらじ、御身も物事遠慮せず、我が住む方へも來ませよかし、まだ幼き琴習ふ、姫も彼處にあんなれば、諸共に聞きならし、心置きなく遊び給へ、人の姿の善惡を、目に稜立て、譏りあひ、又は言葉の言ひ過ち、耳に留めて笑ひなど、總て左様のはしたなき、

心を持ちたる人は無き、處にこそしとのたまへば、「世に有り難き御仰せ、只何事ものたまはん、儘にとばかり玉葛は、言葉少なに答ながら、斯く光氏がいと親しく、語らひ給へば給ふ程、親にもあらざる其人の、何の故にか此様に、待遇給ふといと怪しく、夢のやうにて心の隔は、いよく止まず顔と顔、打ち對ふのもいと苦しく、さし俯向きて居るのををかし。「さあならば機會もあらんには、迎への人を送來さん」と、光氏は立ち上り、暮方に成る程に、心急がれ良の、館へ夫れより渡り給ふ。朝霧が居間に近き、南向なる廊下の戸、押し明くるより帳臺の、追風颯と嬌かしく、吹き匂はして方々の、住む方よりも亦殊に、氣高く思ほし入り給ふに、朝霧は其處に見えず、東京錦の縁とりたる、事々しき茵の前に、をかしげなる琴打ち置き、古き形や模しけん、由ある火桶に焚物を、燻らし、が衣桁に掛けし、小袖に染みし掛香の、香に紛へるも甚艶なり。何處へか行きけん、見回し給ふに書棚の上なる、硯の邊賑はしく、双紙畫巻を取り散らし、手習の反古ども、ありしをとりて見給ふに、世の人の筆に任せし、戯れなど、は事變り、言葉の續き卑しからず、悉く文字なるさへ、我が才を現さず、見るに見易く書き戯び、小松の返しを珍しと、見たりと覺しく哀れなる、古事どもを書き交せて、「珍しや古巢を訪ひに人來鳥」光氏は打微笑み、筆を把つてさし濡し、其傍へ何やらん、書かんとする折朝霧は、

肅然に立ち出で、まづ新玉の賀辭を、恐れ多げに聞え上げ、身を謙り敬ふ様も、人に異りて位備はり、彼の摺箔の輝く迄、粧はれども自から、清らを盡し鮮明なる、髪のさらりと肩の邊へ、掛かりしもいと嬌し。はや火を點す頃なれば、光氏は袴を脱り、打ち解け姿が恥しき、心地なすのを見てとりて、朝霧も衣服を更へ、居蘇白散も温め酒に、換りて攝待參らする、其中に夜も更ければ、新しき年の初に、巽の館の騒がれも、厭はざるにはあられども、今宵は此處に泊り給ひぬ。果して此夜紫の傳までもお歸館の、なきを恨みつ御寵愛、外に異なる朝霧を、妬しと思ふ者多かり。また曙に光氏は、起き別れ給ふにぞ、朝霧も急はしく、姿装ひ廊下まで、御送りに出でたるが、斯く紫の妬心、はしたなき迄あらんとは、我打上りし心に比べ、思ひ掛けれど此處とても、同じ館の中にして、御微行と云ふにも非ず、何の效にか斯う夜深く、歸らせ給ふと思ふより、一入名残の惜まれて、哀にイみ居たりけり。光氏は我が住む方へ、立ち戻りしが紫の、嘸待ち詫びてありつらんと、心の中に推測られ、「昨夜は奇しき假寝し、思はずも夜を明したり、いと若々しく打ち仆れ前後も知らず眠りしを、何故此方より人を送來し、搖覺しては給はらぬ」と、機嫌をとるも可笑と見ゆ。紫は顔を背け、「村萩所へお迎へ、人を上れば花里の、方へと云ふ故花里へ、遣はしますれば玉葛の、住居へお出で又天で、問は

せますれば日の暮れぬ、うちにお歸りなされたと、承はつて夫からは、驚かし参らすも、憚りのある處ゆゑ、たゞ徹夜にお待ち申し、皆も休まず居まりしたと、ばかりに物も云はざれば煩しくて夜着引き被ぎ、空寐をしつゝ日の高く、昇りて後に起き出づる。折から糺の紅を、去年賜りし衣のお禮と、いつもの早百合が連れ來たる、今日は眉毛は引かれども、柳に蹴鞠の模様を着し、その姿の可笑げなるに、紫もやう／＼に、打ち笑ひ杯爲給ひて、「女の腰の細やかなに、譬へし柳が其方には、よく似合うて愛らしい、着なし賜へる人品に、よると云ふに違はない」と、聞え給ふを紅は、翻らるゝとは更々知らず、「お上でさへ其様に、被仰ものを此の早百合が、其方の小袖は柳より、立白にする松の木、模様をつけるが相應ぢや、併し蹴鞠は頼端の、高いによく似てまんざら縁の、ないでも無いと悪い口、お叱りなされて下されませ」と打ち解け頼み聞える様、あはれに見ゆれば紫は、華やかなる帯取り出させ、「夫は早百合が心得違ひ、炙でも點ゑて懲してとらさう、其の光澤もなく黒い帯を、棄てて之を結めたがよい」と、投げやり給へば打ち笑ひ、「醍醐のお寺へ参つた時、阿闍梨様とかいふ御方が、此様に光る袈裟掛けて、御坐つたを羨しう思ひました」と嬉しげに、押し戴いて滑り出でぬ。今日は年始の客あるに、打ち紛らして元日の、夜泊りしたる面目なさを、光氏は隠しけり。昨日一日室町

に、詰めたる者は残りなく、皆此館へ参り給ふ。四郎正尙五郎晴命、其他數へも盡し難し、まづ新年の盃を、法の如くに取交し、其後は打ちくつるぎ、雀小弓蹴鞠茶の湯、さまざまの遊びありて、光氏より年の賜物、夫々に贈り給ふ。物數ならぬ奴僕さへ、此館へ参るには曠がましようて身の程々の、心遣ひをなすに況てや、若やかなる公達は常の年より綺羅を飾り、花の香誘ふ夕風の、長閑に吹きて御前の、梅もやう／＼紐解きて、物の調も面白き、折にこそとて光氏に、琴とり出でて勸むれど、柱の立様も忘れしとて、明石姫に弾かせつゝ、時々聲を添へ給ふが、なほ懐しう愛度聞こゆ。彼方の館の高樓に、朝霧は耳を澄し、聞きとれて居る心の中を、譬へて云はゞ極樂に、生るゝにも品々あり。蓮の中に年を経る者、三つ足らざる事のあり、一つには佛を見ず、二つには説法を聞かず、三つには佛を供養せず、此の蓮の中の世界に、其身は在りてまだ花の、開けざらん心地なるべし。(初音の巻をばり)

彌生廿日餘りの頃。春の館のその景色、櫻は更なり花の種々、數を盡して咲き匂ひ、はや山並には聞きふるしゝ、鳥の聲さへ珍しう、見る者聞くもの面白きに、まだうら若き腰元の、心はいとゞ浮き立ちて、泉水の舟に棹さし、山の木立中島の、邊の苔さへ青々と、色増さりしを見回るめり。此舟は唐

土の、形を模して造らせられ、去る頃下させ給ひしなり。さて秋の館に、此程より磯菜の方は、逗留しおはしましたりければ、春待つ園へと去年の秋、言ひ來し給ひし其の返書、今こそななめと紫は、心に思ひ光氏も、此の盛りを磯菜に見せんの、心はあれど義植の、今は寵愛厚ければ、軽々しく我が住む方へ、呼び寄せて遊ばせんも、憚りあれば先づ磯菜が腰元女に盛の様子を見せなば歸りて斯々と、物語らんは必定なり。而して床しがらせんと、船にて迎へを遣り給ふ。抑此處の泉水は、いと廣くして秋の館と、全く隔てしやうには見ゆれど、山の陰に水門ありて、夫より彼方の池迄も、通ふやうに爲置きしかば、夫より遣はし給ふなり。頓て磯菜の腰元を、取り乗せて彼の山の端より、此方の方へ漕ぎ回ぐる、其船の唐めきたる、のみにも非ず柁取棹さす、童部は皆鬘面結び、衣服までも唐土めかせて、然る大きなる池の中に、さし出でたれば眞に知らぬ、國に來たらん心地して、あはれにも面白く、女共は皆思ふ。中島の入江なる、岩陰に差寄せて、見れば石の組方も、唐繪に書きたる様に思はれ、此方彼方霞みあひ、楢は錦を引渡し、紫の住み給ふ、方は遙々見遣られて、色を増したる柳の糸、枝を垂れたる桃の花、えも云はれぬ香を散らし、外は盛の過ぎたる櫻も、今眞盛に微笑て、廊を繞る藤の色も、濃に開け行き、況てや清き池水に、影を映し、山吹は、岸より翻れて黄金を散らす、水鳥

共の番を離れず、群れつゝ遊び細き枝など、喰ひてはげつと飛び交ひ、浪の綾の紋柄に、五色の絲にて鴛鴦は、縫ひたる如く小袖の模様は、附けまほしき風情したり。實に斧の柄の朽つるも知らず、我が行方も歸らん家も、忘れぬべうぞ思はれける。斯くて此の船屋作りの、座敷の下にさし寄せられ、皆々上りて打ち見るに、丸木の柱萱の軒、田舎めきたる造り様、奥床しきに紫の、側仕への若き女、われ劣らじと衣裳を飾り、いと嬌しき其姿、柳に花をこき交ぜたる、錦に劣らす見え渡る。此の女共磯菜の方の、腰元を座敷に迎へ、夜に入る迄さまざま攝待、諸共に遊びけるが、光氏の方にも、今宵は例の正尙はじめ、年若き者を呼び集め、亂舞管絃の催しあり、夫々の樂の師も、召に應じて皆參り、折に合ひたる双調に、吹き立つれば光氏は、琴の調べを花やかに、振立つるが此方まで、仄に聞えて彼の磯菜が、側仕の女共、心あるは感に堪へ、空の色も物の音も、春の調べ響きには、誠に秋も及ばずと、今こそ思ひ知りしなるべし。其中に夜も更ければ、お暇賜はり女共は、件の舟にて歸りけり。此處邊に住居すれば、何事も辨へ知らぬ、賤男さへも此館の、門の前に隙もなき、乗物馬の立場に、管絃亂舞のある時は、小首を傾け耳を欽て、美々しき御殿に面白き、遊を爲して暮してこそ、誠にいける甲斐はあれと、思はず打ち笑む者多かり、今宵磯菜も物隔て、響を聞きたる其の處へ、腰

元共が立ち歸り、斯様くと物語らば、今は足らざる事もなき、身にてはあれど羨しと、心の中には思ひしなるべし。抑此頃磯菜の方、この館へ來たりしは、全く遊山のみにも非ず、僧を請じ經を讀ませ、佛を供養し奉らん、願ありて其事を、室町御所に聞え上げ、七日の暇を乞ひたるなり。光氏も其由を聞き、さあらば我が建立せし、名双寺の槿花尼を、招きよせ給ふべし。名僧智識を請ぜんより、女同士は相互に、心安くて宜らんと、已に用意も整ひければ、彼寺へ言ひやり給ひ、槿花尼は弟子數多、引き隨へて入り來り、讀經の始りしは、前段の次の日なり。されば光氏が方に昨夜より、遊び明せし公達殿輩、遙に此聲を聞き、何の法事か知られども、いと尊げにて哀れなり。御供に召し連れられ、拜ませ給へと云ふもあり。又は今日は去り難き、用事ありとて歸るもあり。今日紫の御志にて、佛に花を奉らんと、其使の女童、をかしきを選ませ給ふを、光氏は打ち見やり、「夫れこそはいと宜からめ、とてもものに舞まふ事を、心得たるに言ひ付けて、法樂を舞はせ給へ。昨夕呼びたる樂人をば、はや先へ遣り置きたり。此の頃由縁が姫の相手に、來て居るこそ幸ひなれ、葦野に後見させ、何の用には立たずとも、其中へ打ち交せて、送し給へ」と言ひ置きて、秋の館へ午の時、ばかりに渡り給ひければ、彼の公達若殿輩、後に續いて彼處に赴き、坐に就きて見渡すに、中央に槿花禪尼、その外も

うら若き、尼どもありて美しき、有様ながら婀娜かず、佛の莊嚴經の裝飾、其法蓮の嚴重さ、目を驚かしこれ全く光氏君の御光に、よりてならんと息を呑み、思はず頭を下げにけり。斯る折柄紫より、花奉る童部八人、蝶と鳥と四人宛、模様を分けし振の袖、姿を異に調へさせ、鳥の方には白銀の、花瓶に櫻を挿し、蝶は黄金の瓶に山吹、何處にもある花ながら、其の取り合せ面白く、例の船にて山際より、此方の岸に漕ぎ附けて、手に手に花を捧げつゝ、いと麗かに空晴れし、霞の間より立ち出で、籥筆築の響に合せ、静にお前へ練り來たるに、風打ち吹きて瓶の櫻、少し打ち散り山吹の、枝も搖きほろほると、落つる露さへ美しく、頓て童は縁に上り、花どもを獻れば、槿花の徒弟にて今日の事、よろづ預る染園と、いふ尼が取り次いで、瓶に水をさし加へ、佛前へこそ直しけれ。此舟に雲井之丞、氏仲も乗り來たり、磯菜の方の前行き、御法蓮の其始に、空晴れ風も靜にて、悦しきなど聞えつゝ、紫よりの文取り出し、渡せば磯菜押し戴き、披き見給ふ其奥に、「花の蝶秋まつ蟲や疎く見る」紅葉の返辭なりけりと、微笑ながら眺れば、昨日彼方へ行きたる腰元、此文をさし覗き、實に春の景色の宜さは、言ひけなし様も無しと、花の盛に我を折りつゝ、密に聞え上げにけり。此時に奏するは、迦陵蘇といふ樂なり、調の靜なる中は、鶯の麗かなる、音色に通ひ調べの急に、なり果つる程池の水鳥、

幾何と無く轉り渡るに、自から打ち合ひて、面白き事限りなし。彼の紫の園の胡蝶も、山吹の籬の下に、咲き翻れたる花の蔭より、飛び交ひつゝ舞出でぬ、是れ花をもて來し童なり。彼方の館を出で立つ時、光氏は俄に舞に、心得たるをとのたまひしが、紫の上の館には、豫てより其用意、ありしと覺しく全くの、舞樂に非ず新に作りし、今様を聲美きものに、習はせて夫を樂屋に、人知れず廻し置き、歌はせ給ひたりしかば、一入に華やかにて、琴琵琶笛に打ち合はする、舞振のいと興あり。然れば衣裳も蝶鳥の、模様を染めし常の小袖の、上着の袖を脱ぎ掛くれば、下は實に蝶鳥の、羽交の如く做なしたり。人々飽かず見る中に、日も西山に傾きければ、舞も終り讀經も、日暮れて後迄暫時の間、打ち休まんと法廷を、一先づ退き夫々の、準備の席に歸りて後、磯菜の前に舞童、八人を呼び出し、蝶には露の玉の櫛、鳥には塙の花の簪、その取り合せをかしきを、皆々に賜はりつゝ、雲井之丞には獻る、物も無きとて打ち合はれど、女の衣服を參らせなどし、扱紫への返辭には、昨日は思はぬ風に誘はれ、御園の花に遊びたる、我宿の鶯の、羨しかりしなど、種々の事書きたる末に、「胡蝶にも誘はれなまし垣なくば」八重山吹の」とばかり記し渡し給へばさあらばと、皆打ち連れて立ち上り、舞童にも暇を賜はり、歸りけるが光氏の、指圖によりて葦野は、由縁と共に残り居るを、頓て光氏呼び出し、

此方へ來よと奥深く、誘ひ給へば靜なる、一室の中に磯菜の方と、槿花尼とたゞ二人、物語りして居給ひぬ。其末座に葦野親子を、居らしめて光氏は、手を淨めんと縁を回り、立ち行く様子を槿花見遣り、遙か彼方に控へたる、築園を打ち招き、「御手洗を參らすべき、女中をも連れられず、お供をして」と指示し、又磯菜に打ち向ひ、佛の利益の事など、物語りする其中に、厠の方にて何やら、物音の爲しければ、心得難く差覗けど、一室隔てし其先の、板縁長く様子は知れず、葦野も之を聞きつけ、打驚いて立上ると、等しく光氏入り來り、障子引き閉て座に着けば、槿花葦野言葉を描へ、「今彼處にて物音せしは、何事かは」と尋ねれば、「否其事はまづ後にて、寛々と語るべし、夫よりは先磯菜に、密に問ふべき事のあり、抑今日の法廷は、何の故に執行ふと、云ふ事を我にも告げねど、豫め推測るに、御身の父石卷善齋、歿したる年月を、此光氏は知らざれど、其の年忌に當りたる、故にてあらん此席には、憚るべき者を置かず、包まず語り聞かされよと、ありければ磯菜の方、涙を淨め手をつかへ、「仰せの如くにはんべるなり、父の亡せさせ給ひし年月、母の阿古木が存生の、其中に聞き置きて、十七回忌に當りし時、願ひ出んと心には、思ひながらに機會もなく、打ち過ぎたる申譯、今年は年忌と云ふにもあられど、明日が則ち命日故、追善供養の營も、皆御光によりての結構、世に有り難き

事なりと、父も悦び侍らん」と目を押拭へば光氏點頭、「オ、さも有らん、其序に此者をも、用うて遣られよ」と、一片の紙取り出し、渡し給ふを槿花尼受け取り、「花生釋の田貫、此法師は私の、寺に元住職致し、即ち墓も山に在り、何の故に磯菜様の、御父上に此僧を、」されば夫れには仔細あり」と、言ひつゝ、此處へと葦野を、光氏は近く呼び、「その由縁を擧げし御身の、夫の名を未だ知らず、委しく語れ」と思ひも掛けぬ、仰せに葦野顔打ち扱め、「由縁の父の苗字は奥墨、名は剝三郎と申す者、父宰左衛門へ申し込み、婚禮致した其時は、浪人者と云はれしを、眞の事と思ひの外、元は何とか言ひし僧、身を持ち崩し墮落の還俗、實は斯うとの物語、よしない人に連れ添ひしと、思へど最早居馴染し、その上なれば詮方なく、是も縁ぞと諦めて、浮々暮して居りましたが、一年ばかりは酒をも飲まれず、身を慎みて學問を、申立に奉公すると、東西口を聞き合せ、目見などにも出られしが、不圖又好きな酒に亂れ、三筋町の茂鹽屋の、夕坪といふ遊女に、馴染異見する程なほ慕り、呆れ果て、宮内の、家へ私が歸るのを、待たれるもよく知り乍ら、因果と此子が腹にあり、なくなく其處で生み落した、其程も無く剝三郎は、家出して行方知れず、茂鹽屋でも夕坪が、脱走したと難かしく、云うて度度來たれども、相手に取るべき剝三郎が、居られば詮方無いかして、彼方の騒動は其れぎり鎮り、私

は木屋町へ、歸りし後の事どもは、豫々知るし召す通り、子までなしたる夫に飽れし、御物語致すのは、恥かしけれど仰せなれば、是非なく聞えはんべると、袖もて顔を打覆ふ、「ウ、概略聞きしに違ひなし、名双寺の前の住職、田貫といひしが即ち、その剝三郎がなれる果、磯菜が父の善齋が、弟にして陸奥産、今より五年ばかり前、切腹して此世を去れり。オ、驚愕は道理々々、彼の御身を捨てて後、丹波の國に暫時隠れ、復元の僧となり、田貫と名を更ぬ、再び都に立ち歸り、此の光氏に恨みある、人に頼まれさまなくと、手段を運らし法を修し、我を却かさんすと、桂川の下館へ、赴きし其時は、徒黨の人数を集めしかど、其の陰謀を早く悟り、南蠻の火術にて、彼を却つて驚かせし、夫より心臆したる、有様なりしが守袋の、片帛より由縁を我子と知り、終に惡念發起なし、大井の里の朝霧が、住居に某宿りし時、馬刀と云へる徒弟を殺し、云々言ひて腹切つたり。其時の彼が懺悔に、六條の遊女に、馴染を重ねとばかり聞え、流石面目なかりしか、連れ退きたりとは云はざりし、我も用なき事なれば、遊女の名をも田貫が、俗なりし其時の、姓名をも終に問はず、今聞きたるが初なり。是れ由縁、其方が父は惡人ながら、善に返りて潔く、命を捨てしが哀れさに、責めては父の死顔なりと、見せて遣らうと其方を千鳥が、抱いて出たれど正體なく、眠つて居る故手を持ち添へ、拜ませて

やつた時は、朝霧はほろ／＼泣く、己れも悲しう見て居たと、なほも委しく彼が最期に、物語りし事
 共を、聞え給へば葦野は、坐涙に掻き暮れて、「打ち棄てられし其時は、仇討より憎かりしが、此子が次
 第に物心、ついて私の父様は、何處に御座ると問はるゝに、附けつゝ昔の腹立も、忘れて何卒心立、
 直つて尋ねてござれかしと、心に思へど未練らしく、口へは出した事もなし、夫なら彼方でも由縁が
 戀しく、其故悪念發起の御最期、其心が今些早く、附いたら假令元の様に、夫婦にならずと折節の、
 訪ひ音づれして暮したら、此の子の便宜にならうもの、果敢ない事を」と嗚咽れば、由縁もしく／＼
 打ち泣きて、「父様は遠くにお在、温順うして居ると、おしつけ呼んで逢はせて遣ると、何故お騙しな
 された」と、母に取り着き押し揺し、不圖光氏が顔を見て、涙を隠し手をつかへ、「然様なら幼さい時、
 私は父に逢ひまして」と、しとやかに問ひければ、「オ、サ覺えて居はせまいが、大井へ来た立派な僧、
 子の愛憐に悪念發起、さすれば其方は孝行者、名双寺へ墓をば己が、其時建てて置いた程に、參つて
 念佛申してやれ、千部萬部の經よりも、彼は嘸かし歡ばう」と、慈愛の言葉聞き分けて、歎の中に歎ぶ
 由縁、磯菜も哀と打ち見やり、「名を聞くだにも初めてなれど、妾が爲にも正しき伯父、父の菩提と諸
 共に、弔ひ給はれしと、槿花尼を、打頼み給ふ折、障子の外にて、「恐れながら、此處明け給へ」と云ふ

者あり、誰にかあらんと葦野は、つと起ち障子おし開けば、彼の染園が小腕を、後に捻上げ揃めてあ
 り、こは何者の所爲かと、立寄る槿花を光氏推し止め、「我厠より立ち出でて、手を淨めんする時に、
 其尼に渡し置きし、我が短刀を抜き撃ちに、斬らんとせし故踏落し、簾を巻きし紐ひきちぎり、其儘
 揃めて置きつるなり。「やい尼此處へ列なる者共に、言ひ聞かす事ありて、心急ぐ儘最前は、其仔細
 を問ひ窮めず、何の恨に某を、害せんとは爲たるぞ」と、問はせ給へば染園は、恐る／＼顔を上げ、「只
 今聞こし召れたる、三筋町の夕坪は、此尼が事にてあり、剃三郎に誘ひ出され、六條を脱走し、丹波
 の國に聊なる、知邊ありしに身を寄せて、私をば密なる、所に隠し又元の、僧となつて愚しい、媼嫁
 をたらし込み、道に背きし金を得て、身の服裝を取整ひ、京へ出でしは田貫が、申し上げしに違ひ無し、
 思ひ掛けなく富徴様の、御心に叶ひて出世、私も後より上り、太秦邊に圍れ女と、なりて居たるは知
 る者なし。仰ありし桂川の、御下館に事ありし、其夜半過ぎ太秦の、隠家へ田貫が、顔色變へて立ち
 歸り、今宵は豫ての計策の、如何にして漏れたりけん、光氏に恐しき、目を見せられしと物語り、其
 次の年春の末、夕暮方に田貫が、徒弟の馬刀を誘ひて、私の住家へ參り、光氏最前大井の館へ、來り
 し由を確に聞けり、云々爲てと何やらん、馬刀と暫時密談し、曉頃には歸らんと、袈裟も衣も預け置

き、暮るを待ちて立ち出でしが、夜は明け果てても音づれなし、兎角する間に其日も暮れ、彼の姿にて名双寺へ、直に歸りはされまじと、思ひながらに心もとなく、彼寺へ密に行き、様子を伺ひ居たりし處へ、田貫も馬刀も昨夜、大井の館に死したりとて、二人の屍骸を身き來れり。田貫の死體ははや、棺の中に納められたれば、確に見留る事もならず、馬刀の屍骸は席にくるみ、是は殊更悪き奴、赤裸にし埋めてよと、下男が言ひ騒ぐを、素知らぬ顔して立ち寄り見れば、咽より頭へ突疵、朱に染みて死してあり、扱は昨夜二人とも、大井にて切害されしに、疑ひなしと思ひ極め、恐れながら良人の仇、一太刀恨みまゐらせんと、狙へど近づく手段なく、空しく月日を送りし處、不圖名双寺の尼公の徒弟と、なりなばお前に立ち出づる、便宜もあらんと心づき、近頃斯様の姿となり、世に有難き此度の、御法蓮に列ねられ、田貫が跡弔ひ給ふ、御仁心をば努々知らず、抵抗なしたる御詫は、尼公よりして聞え上げ、給はれかしとぞ打ち泣きける。光氏は始終を聞き、「田貫が死する迄、隱妻を持ちたるは、惡むべき事乍ら、慚愧に自殺なしたれば、今更昔の罪をば言はず、汝は心得違乍ら、遊女に似合はぬ貞婦なり、槿花にはよい徒弟を、羸けられし」とありければ、珠數爪繰つゝ首を下げ、「君に野心を挟む、者とも知らず差し置きしは、妾が落度にて待れど、折も折とて田貫が、最後の事ともいと委しく、御物

語遊ばしたを、障子の外に漏れ聞いて、彼も慚愧後悔なし、今こそ實の菩提心、起りし様子は見え候ふ、是も偏に佛の慈悲、やま染園、元より廣き惠ある、君に向ひて中々に、お諮申すは恐あり、嗔恚の炎は消えて涼しき、風に心の塵を拂ひ、只御佛に仕ふるが、肝要なり」と靜に起ち、繩解きほどけば染園は、只伏し拜みく、葦野に打ち向ひ、「お目に掛るは初てなれど、名をば互に聞き知りて、定めて昔は私を憎う、思はれもせん今とても、恨もあらうが姿を變へ、今日より心も變へたれば、許してこれから睡しう、打ち語らひて給はれしと、泣き口説などする中に、日はとく暮れて又讀經を、始むる鐘を打ち鳴すを、聞いて磯菜は槿花尼諸共、準備の一室へ行き給へば、光氏は葦野由縁を、引き連れて彼の春の、住居へ歸らせ給ひけりとなん。

玉葛は容も勝れ、心も優しき性質にて、光氏君の重く待遇、傳せ給ふ氣色、世に洩れ聞えたりければ、心を靡かす人多く、便につけつゝ氣色ばみ、言に出でて聞ゆるなど、數あるうちに正尙は、實の姪に非る事を、何處にてか聞き出し、文を通はす事繁し。又高直が總領の、柏之助は姊なる事、夢にも知らず光氏の、婿にならんと思ふから、己よりは年増なるを、厭はず心を懸くるも可笑し。一色多京も思は止す、斯くて人々の玉葛を、望むといへど光氏は、未だ何れへ送らんと、いふ事を定め兼ね、

高直に先彼が事、知らせんと折々に、思へるのみにて口へは出さず、雲井之丞は實の姉と、思へば何の隔なく、暇ある日は打ち解けて、遊び杯爲給ふを、女は却つて恥しと、思へど此方は心付かず、此の若君の御供に、柏之助梅之丞も常に参りて諸共に、戯事など言ひ掛くるを、玉葛は弟ぞと、能く知るからに心苦しう、少しも早く實の父、高直に我身の事、知らせまほしく人知れず、思へども言葉に出さず、偏に打ち解け光氏を、頼み聞ゆる様子なると、似るとは無けれど黄昏の、氣色の思ひ出されて、一層哀と光氏は、見る度毎にぞ思ひける、更衣の頃にもなりぬ。霞消えたる空の氣色も、蒼々として心地宜きに、光氏はさせる用も、無くて長閑に在し、かば、動もすれば玉葛が、住居へ渡り給ひつゝ、山吹に豫て言ひ付け、受け取り置かせし人々の、文どもを見給ふに、正尙はまた言ひ寄りて、程もなきを年月こがれ、返辭なきに心焦れし、様なる事共書き集めつ。光氏は密々笑ひ、「兄弟多き其中にも、取り分けて睦じきは、正尙なりしが若きより、斯様の事は深く包み、氣振に出し、事も無きを、今大人しくなりて後、初めて見るこそ可笑しけれ。玉葛を妻にせんと、思ふ心の眞實あらば、先づ我にはのめかし、仕様模様も有るべきを、仇々しき振舞は、心得難き事にてあり」と、打咄きて玉葛に、此文を見せ給ひ、「まづ試みに此返書を、打ち解けずまた稜立ぬ、やうに程よく書き給へ、弟を譽るや

うなれど、彼は容も風流にて、文書く事も尋常の、人には遙に勝りたれば、又何とか言ひ送來さん、妻も失せて此程は、獨住にてありなん」と、聞え知らせ給へども、玉葛は恥しう、思ひてしかく答もせず、又彼の一色汜廉の、文を取りて見給ふに、いとまめやかに書きなしたり。髯廉と云ふ綽號をとり、日頃は女を顧る、氣色だになく嚴格しき、顔に似合ぬ事哉と、釋迦も孔子も戀には迷ふと、昔諺ひし小唄さへ、思ひ出されて光氏は、心に可笑しく彼方此方、見比べて取り集め、山吹に渡し給ひ、「人の心の深さ淺さを、試した上にて玉葛を、送らんと思ふにより、其文は留めおかせたり。されば先方の人を選び、答などは爲さすべし。今様人に誘はれて、仇し浮名を立てらるゝは、男ばかりの咎にはあらし、洒落にもせよ言ひ寄りし、其時女の無情應答を、あな情無し恨めしと、思ふは常の習ながら、年月たちて其後に、彼時打ち解け語らひなば、我身の爲に悪かりなを、思ひ量りて心強き、返辭をこそはしたらめと、心附いて男の却つて、歡ぶ事も世に間々あり、無情き答なほ増すあり、夫にて思ひ絶るあり、心にさまで思はれども、人のぞめきに言ひ寄るあり、左様の者は省みも、せぬが女の慎みぞ、後の難儀と爲る事あり。扱正尙は御身の今迄、山里にて成長を、知りたらんも測り難し、然れば物の心も知らず、返書をも書き得ずと、思はれんのも口惜かるべし。疾々筆を執り給へ」と、云

へども玉葛打ち背き、恥らふ様子もいとをかし。撫子の縫模様、此頃垣根に咲く花の、色の肌着に紅絹の裏、容姿坐作今めきたり。さは云へど田舎風たる、名残には只悠然と、細に心配らざる、様子に見えしが六條にて、人の有様見習ひて、此頃は姫上らしう、化粧なども注意して、淡らかに付ければ、此處ぞ悪きと云ひ立つべき、處もなくて華やかに、美しく見えたりけり。光氏はなほ年よりもいと若やかに見え給へば、押し並びておほするを、山吹は熟々見上げ、親と聽え給はんに、誰かは眞と思ふべき、よき似合の御中ぞと、心の底に打笑みけり。

修紫田舍源氏第二十四編終

修紫田舍源氏第二十五編序

虚を實に、見するは凡夫三千人に、式部ひとり歟なり。實をいうて嘘吐きになる事、拙きが故なりと、齒がみをなせども是非なしとは、其角が著したる、吉原源氏五十四君の、序に書たる述懐なり。其名を隠して、作者淺茅の尼と記す。予も亦式部小路の、お藤の名を假りしばかりは似たれども、粉白粉の雪と墨染、黒人に向ひて面かぶり、争頭のおがるべき。夫文の走る事、山風のおろし節、陀羅尼をよむよりいちはやく、此詞のくだく敷は、うる覚えなるめりやすの、爪弾よりも最まだるし。おもふに尼が實を説いて、虚に聞かれんを歎ぜしは、才力のあるが故なり。娘は初編にいひし如く、歌の兩家は松永岡安、物語は實盛か、熊谷かといふしどけなし。空言と見よとてうそを綴る、妄語の罪に沈みなば、彼淺茅の尼公を請じ、田舍源氏の供養をたのまん。

天保十二年辛丑初春

修紫田舎源氏第二十五編

田 舎 源 氏

卯月の末となりぬ。或日小雨の打ち降りしが、程なく空の晴れ渡り、甚静なる夕つ方、光氏は常に住む、一間に寂しく居給ひて、柏の梢若楓、青やかに茂り合ふ、庭を眺めて又例の、玉葛が事如何にかと、思ひ出して忍びやかに、行かんと覺し紫に、聞え給へば打點頭き、「假にもお子と名が附けば、其様にもお可愛い者か、左に付け右に付け、繁々に彼方へお出で、彼が母は氣弱な性質、餘りに内場過ぎし故、心の張の無かりしが、玉葛は夫れに引き換へ、人の目顔に心も悟り、世馴れて見ゆると日外も、お褒め被成た其利發で、何故まア貴方のお心の、底をば知らず眞實の、親同然に思ひ做し、裏なく打ち解け頼まるゝが、妾は笑止に侍る」と、嫉妬を含みて云ふぞとは、知れ共光氏知らず顔「我より外に頼母しう、語らふ者は無き玉葛、何とて打ち棄て置かるべき」と、云へば紫つれなくと、光氏の顔打ち視り、「妾が身にて覺えあり、初めの程は實の父、國助よりも心安う、親と思ひて甘えしが、終には夫に引き變り」と、言ひ掛けほつと吐息をつき、「昔の事に今の事、思ひ比べて見ますれば」と、打ち微笑みて聞ゆれば、光氏も莞爾と笑ひ「夫れば御身が年足はず、物の心を知らざりし、其時なれば

第 三 十 五 編

是なく、然思うても居たらんが、玉葛は早廿歳の上、我に曇りし心のあらば、何連打ち解け頼まんと、言ひ掛かりしが何とやら、むづかしければ其儘に、勿々に立ち出でつ、彼處へ渡り見給ふに、玉葛は手習などし女ばかりの中なれば、打くつろいで居たりしが、光氏が来るを見、起き上りて亂れたる、衣引繕ひ羞ふ顔の、色合なんどもいとをかし。光氏は見ぬ振を、造りて庭を打ち眺め、扱山吹に打ち向ひ、「其後に又文を、持て來りし者やある、去頃も言ひし如く、迂濶に返辭をせさすな」と、のたまへば膝行出で、「御覽に入れたる三つ四つの、外には假令持ち參りし、者ありとても留め置かず、御返書は殊更にて、是々へは聞えよと、御指圖のありしに、玉葛様はいと苦しう、思ほしてしかなく遊ばさず。只難儀なは赤松の、若殿達が姉上と、知ろし召されば折節の、事に託け給ひつゝ」と云ふを光氏押し止め、「はて夫れとても自から、聞き傳へなば自然と止む、高直に彼が事、物語らんと初より、思ひしかども都の様、まだ見習はぬ其前に、繼しき、母や異腹の、只弟多き其中へ、差し出でんには心苦しき、事もあめりと今日が日迄、包み藏くして置きつるは、彼に素性の卑しからぬ、夫を持たせ其後に、高直に仔細を聞え、對面させんと思ひてなり。扱正尙は獨住、年も似合ひの程ながら、我は顔に悪げなる、妾のありと豫て聽けり。されば如何にも柔和に、心を持たれば美しく、彼とは連れ

添ひ難からん、少しも心に癖あらば、彼の妾に讒言せられ、飽かるゝ事の出で來なん。夫彼れの心配
 を、さするは我も心苦し、一色の泥廉は、我身より年増したる、妻を持てるが其心、荒々しきのみな
 らず、悋氣強きに持てあぐみ、扱こそ只管玉葛を、乞ひ求むるにあらんすらめ、其舊妻を離縁せし、と
 にもあられば是とて、身を任せなば煩しき、事もやあらんと人知れず、心に思ひ定め兼ねぬし、と、宣
 ひがら襖の陰に、半ば隠れし玉葛を、光氏は差覗き、「箇様な事は親などにも、明ら様に我が思ふ、胸
 をば語り出で難き、ものにはあれど御身は早や、顔打振袖のみ、玩弄りて居る年にもあられば、
 了見なき事よもあらじ、我を昔の黄昏に思ひ比へ何事も、隔てず明し給ひなば、嬉しからん」と、眞實
 にのたまふがいと苦しくて、玉葛は差俯向き、暫し言葉も無かりしが、斯くては餘りに若々しと、思
 ばさん事も恥かしと、思ひ直して顔を上げ、「幼き時より親と云ふ、者は見習ひはべられば、斯う云ふ
 事は云うて宜い、是は悪いの差別をも、更に辨へ侍らす」と、いと安らかに聞ゆれば、光氏は實にもと
 思ひ、さあらば浮世の譬にも、後の親を親とせよと、云ふ事のあるれば、愚ならぬ志、我も見せん
 御身も夫を、見究めて後打ち頼み、給へしなどと語らひつゝ、庭に植ゑたる吳竹の、いと若やかに
 成長て、微吹く風に打ち靡くを、眺め遣りて居給ひしが、はや寒からず暑からぬ、程にてあれば心地

よく、光氏頻に眠氣さし、脇息に打ち凭れ、思はず微眠む様なれば、玉葛は心を付け、騒しくては惡
 しからんと、女共は次へ遠ざけ、其身は御目の醒むる迄、宿直心に容姿を正し、御側に付き添ひつゝ、
 眠り給ひし光氏の、顔熱々と打視り、實の父の斯くばかり、親しく語らひ給ひなば、愈々嬉しかるべ
 きを、何時の折にか聞え知らせ、給ふならんと心元なく、不圖涙さしぐみしが、思ひ返して否々々、
 父上なりとて遂に一度、見給ひもせぬ妾をば、斯う細やかに御心を、付けては下し給ふまじしと、世に
 有り難き光氏が、情愛の程を思ひ知り、人に云ふべき事なられば、心の中に種々と、打ち案じて居
 たりける。光氏はなほ前後も知らず、打ち休みて居たりしが、賢き人も夢の中は、愚になれる者にてあ
 り、目は醒めぬ共目覺し心地に、光氏四邊を打ち見れば、凌晨が五條の家にて、傍に黄昏は、三味線
 弾いて遊び居たり、怪しき事を怪します、怪しからぬを却つて怪しみ、黄昏が側に寄り、扱ても不思
 議にいと長き、夢をこそ今迄見つれ、御身は死して忘形見の、玉葛と云ふ娘ありしを、或山里より尋
 れ出し、云々して置きつるが、初の程は左まで御身に、似たりと心も付かざりしが、見馴るゝ程に姿
 容顔、物言ふ聲まで其身其儘、それかと思ひ紛へられ、可憐に覺えし時多かり。彼の玉葛に打ち向ひ、
 御身の母をば心に掛け、未だに忘れず其代りに、見ん人もなく年月を、徒に過ぎぬるに、今斯く御身

を呼び迎へ、夢にやと思ひ做すと、云しは眞の夢なりけり。玉葛は昔の事、度々聞くをむづかしと、思ひやしけん俯伏に、背きし姿も懐しう、思ひしなんと蕭然と、語り給へど黄昏は、更に答もなさざれば、光氏は不審う、何故に物をばのたまはぬ、心地にても悪しきやと、袖を捉へて曳かんとし、今ぞ實に夢覺めて、我身を見れば何時の間にか、脇息を傍に押し遣り、褥も離れて玉葛が、邊近く臥して居れり。玉葛は光氏が、寢惚れて何やらん、云ひつゝ近く寄り來るに、驚きながら呼び覺ます、事も流石に憚りあれば、只心憂く如何にせんと、覺えて隅に打ち屈まり、戰慄るゝ有様の、いと著ければ光氏も、漸々に心附き、さては夢に黄昏と、見えつるは此の玉葛なるべし、いと親しくは語らへど、常には行儀を假初にも、崩さざる身が寢惚れて、打ち解け姿の締なきを、見習はざれば玉葛は、嘸疎しと思ひしならんと、心の中に恥かしく、云ふべき言葉も無かりしかば、吐息と共に打ち背き、不圖庭を打ち觀るに、日暮れてより又一類、降り荒みたる雨止みて、風の竹に鳴る程に、月華やかにさし出で、いと靜なる夜の様なり。腰元共は光氏が、寢惚れたる聲を聞き、御目の覺めて濃なる、物語を爲給ふぞと、憚り思ひて遠く退き、風に煽ちし燈火を、掻き立つる者もなく、微になりたる光にて、光氏は不圖玉葛を、透し見れば覺めてもまだ、昔の心地のみせられて、可憐に思へど氣を取り直

し、元の褥に立ち戻り、をかしき夢を今まで見たり、其事を語らんと、思へども早二十日餘りの、月さし昇り夜は更けぬ、昔戀しき慰草は、御身を除けて外に無し、果敢なき事共打ち交せて、重ねて寛聞ゆべし、同じ心に答へ給へしと、言ひつゝ衣紋掻い装ひ、人も怪しと思ふべければ、取り急いで出で給ひぬ。是より後は繁々に、渡り給へる事も止み、今迄程に親く待遇、給ふ事もあらざれど、左に右に玉葛は、此夜光氏寢惚れて、浮きたる舉動せし事の、只管に氣に懸り、夢に託ちて自らが、心を誘ひ給しと、思ひ違へて浮名にも、なるべき哉と淺間しく、實の父におはしなば、假令これ程眞實に、爲て下されずと此様な、辛苦き事はあるまじと、夫れ彼れ萬安げ無う、思ひ亂れてくよくよと、歎くは年こそ重ねたれ、浮世の中の有様を、田舎に育ちて見習はぬ、故にやあらん夫よりは、顔の氣色も悪しければ、腰元共は御心地、惱しげに見え給ふとて、薬よ加持よと持て騒ぎぬ。扱又沘廉正尙の、二人は兎角玉葛を、思ひ焦れて山吹は、物堅きにより袖の香とて、都にて抱へたる、まだ若く小賢しき、玉葛が腰元女と、親しくなしてたらし込み、光氏が年の程も、相應はしと言ひたるを、正尙は彼より聞き、いと頼母しき事に思ひ、沘廉は又妻ある上には、送り難しとのたまひしを、是も彼の袖の香より、聞きて殆力を落し、愈工夫を運せば、柏之助は眞の血筋を、今以て努々知らず、何卒して

光氏が、許を受けて娶らんと、坐に浮れ惑ふめり。(胡蝶の巻爰に終り、是より螢の巻に移る。)五月五日の眞晝の頃、光氏は華やかなる、帷子に弓籠手を懸け、乾の館を差覗き、「氏仲氏仲」と近く呼び、「今日は東の馬場にて、まづ競馬騎射を催ほし、末に打毬の遊をせんと、人に知らさず心構を、密に爲しが正尙はじめ、若殿輩の聞き付けて、室町より大勢來らん、其由只今言ひ越したり、自からに事々しき、催しとこそなるべけれ、御身も用意し給へしなど、聞え給ふ花郷も、漏れ聞きて頓て立ち出で、「犬追物や打毬の折の、御装束には華やかか、宜いとか豫々承る、御帷子は辻が花、御袴は撫子の、若葉の色」と選出し、着せ參らすれば光氏も、機嫌よげに打ち眺め、「東の館に並び、常には人の住まざる高樓、構への中へ建て置きたり。其處より馬場を見通すに、程遠かられば腰元の、若き者共彼處へ參り、渡殿の戸を開けて見物すべし。馬の達者弓の上手も、多くありて大内の、眞手結に劣るまじし」と言ひ流し雲井之丞を、引き連れて立ち出で給へば、左までもなき事をさへ、見たがるが若き女の、常なれば皆打ち悦び、玉葛の傳へも、此事を直に言ひ遣り、取り急ぎ彼の高樓へ、連れ立ち行き渡殿の、戸を取り放ち青簾掛け渡し、押し合うて見物する、顔は定かに馬場より、見え分れ共簾の隙に、飄れ出づる衣の色々、或は裳濃あるは曙、色の司の紫は、いと好ましき振の袖、長き五尺の菖蒲草、蓬を

交せて染めたるは、今日の祝の装ひなめり。三所の館の童、さては若き女共、一處に集ひしなれば、我れ劣らじと挑み顔なる、其の舉止も見所ありげに、思ひ遣られてまだ若き、殿輩などは其方のみ、目を留め鬢を掻き撫でて、衣紋を装ひ氣色ばむ。未の時ばかりにぞ、光氏馬場へ出にける。實に室町の公達も、残りなくおはし集ひ、彼の大内の眞手結の、作法とは又事換り、若殿輩は我馬の、達者を見せんと合圖も待たず、乗り出して制せられ、後れて恥を掻く者あり。思ふ矢壺を射當て、歡び、思はぬ方へ矢はそれて、無念とあせり馬より落ち、笑はれつ又響められつ、其日は遊び暮し給ふ。女共は弓の良否、馬の達者不達者は、更に見分け難けれ共、附き従ふ侍さへ、小袖袴に綺羅を盡し、汚げなるは一人も無く、面々主人を大事ぞと、馬に添ひて馳せ回るを、いと面白くぞ見居たりける。此の馬場は遙南へ、押通していと長ければ、巽の館の二階には、居乍ら箇様の若き人、明石姫に傳きて、見物なして居たりしが、打毬は殊更興ありて、白き毬赤き毬、飛び交ひ飛び交ひ、勝負を争ふ聲、いと騒がしく罵るも、夜に入りぬれば何事も、見えす成り果て人々は、暇を告げて立ち別れ、女共も夫々の、館へ歸り鎮まりぬ。光氏は若殿輩と、争ふも大人氣なしと、只一渡り騎射の手練を、見せて傍に引き退き、指揮のみして居たりしが、夕暮前に密に馬場を、脱け出でて花郷を、住まする館に立ち

戻り、休息する中日も暮れて、さらぬだにまだ影薄き、夕月に雲覆ひ重り、一層小暗き庭の面、燈籠の火の細々と、見ゆるもをかしと庭下駄を、穿きて其處此處打ち回り、眺めて佇立む後より、密に寄り来る者のあり。光氏は不審く、誰ならんと願れば、「玉葛が腰元女、彼の物よく云ふ袖の香なり。彼は前にも記し、如く、まだ新参の者ながら、浮世に馴れて馴染を重れぬ、人にも早く馴れ易き、女にありければ、正尙はじめ氾廉などに、媒介の事を頼まれ、光氏の機嫌を伺ひ、取り繕ひ程よく聞え上げし故、をかしの女と光氏も、覺して此頃心安げに、語らひ給へば大方夫と、推して聲を低くなし、「又玉葛へ何者か、文を贈りし事なるべし。密に見せよ」と宣へば、袖の香は土に手をつき、「仰せの通り正尙君、馬場よりのお歸りに、立ち紛れておはしまし、今宵は是非に玉葛が、返辭を取りて我に見せよ、館に歸らずそこくに、待つて居るとの御仰せ、玉葛様の御覽に入れれば、少しは御心解けしやら、見入れ給ふ様なれど、お返書は思ひもよらず、如何計ひ侍らん」と、件の文を差し出せば、光氏は打ち抜き、燈籠の火影に透し、「神代よりして五月雨は、婚禮にこそ忌むと聞け、近き程の許を受け、聲だに聞かせ給ひなば、積る思ひは晴れなん」と、讀み掛けて巻き收め、「心ありて言ひ寄りしを、取りても附かぬ返辭せば、情知らずと却て人に、笑はるゝ事のありと、玉葛に教へても、心地悪

しとて聞入れず。幸ひ其方は手なども宜しく、書く由を山吹が、噂に聞けり」と小座敷へ、袖の香を連れ行き給ひ、料紙硯を取り寄せて、靡きもするやと悪からぬ、程の返辭を言ひ教へ、給へば袖の香憚らず、仰せ書きを認め終り、彼正尙が待ちおはする、處へ頓て持て行きけり。玉葛は光氏が、寢惚れて近やかに、寄り添ひたるを只管に、心を誘ひ給ひしと、打ち心得て夫よりは、思ひの外なる辛苦の添ひ、さまざま思ひ亂れけり。彼の筑紫にて信樂の、現太夫に思はれて、憂かりし様子とは一列に、あらねど是は假初にも、親と名乗らせ給ひし君、淺間しき名の洩れんかと、心一つに思ひつゝ、船にて遁れ出でしとは、事は異れど疎しく、早や何事も思ひ知る、年にてあればさまざまに、思ひ集めて母上の、此世におはせすなりにける、口惜しさも亦繰り返し、惜しく悲しくのみ覺ゆ、されば此頃光氏が、何心なく云ひ出づる、言葉も兎角玉葛は、御心ありてのたまふと、聞き違へては胸潰れ、苦しきものからはしたなく、言ひ聞ゆべき人なられば、素知らぬ風情に持做す様子、重くせず又卑からず、愛敬附きて何時とても、心輕げに胸の中の、辛苦を更に見せざれば、正尙ななどは信實に、貴め聞え給ふ文、折に觸れては打ち眺め、此方に身を任せ參らせ、斯く心憂き光氏君の、御景色を見の事もがたと、流石に戯たる心づき、扱こそ見入るゝ時もありしか。今日は菖蒲の節句なれば、薬玉など美

しう、造り做して諸所より多く、贈り來し給はるを、見るに付けつゝ玉葛は、筑紫の波に沈みぬる、憂身が思はず咲き出でし、花の都の此の榮は、歡び乍ら人に暇、付けず我身も後指、さゝれず世を経る爲様もがなと、思へば心浮き立たず、夜はまだ左迄に更けれ共、臥處に入らんと帷子を、單衣に脱ぎ替へ引き廻し、簾屏風へ打ち掛けて、まだ布き設けぬ夜具に凭れ、只一人寂しげに、暗き庭を眺めて居れり。扱も四郎正尙は、光氏が袖の香と、語らひ合せて待つぞとは、夢にも知らず玉葛が、宜しき返書を珍しと、忍びやかに來りしかば、袖の香は打ち心得、此方なる小座敷に、先づ褥を參らせつ、是竹屏風ばかりを隔て、玉葛が部屋近き程なり。光氏も心して、空薰物心惡き、程に匂はし床しげに、思はせ給ふは實の、親の爲べき所爲にあらねども、正尙が心の眞實を、見て許さんと覺してなるべし。袖の香は光氏が、差圖に斯くは計らひしが、若し山吹が聞き附けなば、腹立ちて叱られん、又正尙への返答をば、何とか云はんと氣も臆し、引き退くを光氏が、後より突き出し、心弱しと小聲にて、打ち笑はれてうるゝと、詮方無げに跪居たり。早や夕月は疾くに入り果て、空一面に打ち曇り、黒白も分かぬ五月闇、打ち濕りたる正尙が、姿容も兄には及ばずながら、人に比べていと艶なり。彼の屏風を廻らしたる、内より仄めく追風に、深く薰りの盈ち來るは、彼方に隠れし光氏が、衣にと

めたる匂ひのいとゞ、立ち添ひしとは正尙知らず、豫て思ひ量りしよりも、をかしき氣色と心を留め、透し見れどもいと暗く、夫かと思ふ人影だに、見えれば此處とは隔りて、居るなるべしと推量し、斯く傳へよと袖の香に、打向ひて正尙が、かね々思ふ心の丈を、言ひ續けたる其言の葉、温順やかに一向に、女を蕩す浮世人の、様子にはあらで通常の、若殿輩と異なるを、いとゞをかしと光氏は、微聞てこそおはしけれ。玉葛は少し引入り、襖に凭れて居たりけるに、此仰せを聞えんと、膝行入る袖の香を、光氏密に傍に招き、玉葛はいと餘りに、情を知らぬ待遇なり。何事にもあれ其の程々にするこそ宜けれ今は早、只管に恥しと、隠れてのみ居ん年にも非ず、よくゞに思へばこそ、一人忍ひて問ひ寄りし、彼をさへ遠く置き、人傳に聞えん事は、世にある間敷事なりかし。聲を愛みて此方より、物のたまはずと少しは近く、進みて彼方の言葉は自から、聞き給へよなど密々と、諫め拵へ給へるを、玉葛は聞き乍ら、いと苦しくて動きもやらず、打案じてのみ居たりしが、已に前にも記し、如く、此の程は光氏の、心を深く疑へば、若し此事に託けて、近く在さば如何せんと、夫も此も佗しければ、するすると膝行出で、彼の隔なる竹屏風の、許に身を寄せ袖の香を、頼みと爲しつゝ俯向けり。正尙はなほ何くれと、事長く言ひ給へども、只一言の答も爲さず、休息ふに光氏は、衝と寄り

來て屏風に掛けし、帷子を引き下ろし給ふと等しく、さつと光れるものゝあり、手燭を誰かさし出でたる、袖の香も呆れたり。是れは此の夕暮方、螢を多く羅に、包みたるを光氏持て來、庭に放ちて眺めんと、思ひし中に袖の香を、引連れて茲へ來り、此の脱掛けし帷子の、ありしを幸ひ其の袖へ、光を隠して置きつるを、素知らぬ様にて斯く俄に、放ちて驚かしたるなり。玉葛は此の明かなる、光に照され打解けし、姿の見ゆるが淺間しくて、扇を抜きさし隠す、容貌もいとをかしげなり。思ひ掛けなき光を見せば、正尙も覗きなんと、光氏が斯く設けしは、娘と偽り傳ける、噂を聞いて不具には、非じとばかり正尙は、打心得て言ひ寄るにて、姿かれば斯くばかり、瑕なき迄は推測らじ、然ればいとよく其の様を、見せんと覺し、故にてあり。實の娘ならんには、斯く持騒ぎ給ふまじ。只黄昏が眞實ありし、心を忘れず其の形見を、世に出さんとて尋ねしのみ、不憫と思ひて大切と、思はさぬ故に戯れがましき、事を構へて其身は頓て、人の心の付かざるうち、竊かに抜け出で返りけり。正尙は玉葛が、居る處まで遠からんと、推測りしより近やかに、正しく夫れと覺しき氣色、聞くに心も動悸きて、屏風の隙より見入るれば、少し隔てし向ひの方に、打屈み居る様なりしが、思ひ掛けなく打ちほのめく、光ををかしと見る程なく、袖の香が團扇にて、煽ぎ散らして取り隠しつ。されども

残りて消々に、なりし光もなほ艶にて、心を留る端と見ゆ、微なれども、玉葛が、羞ひながら俯伏たる、容態の悪からぬが、暗うなりても目に残り、げに光氏が案の如く、正尙の心に染みて、「消えはせじ、聲なき蟲の光だに」思ひ知り給ひぬや」と、云ひ掛けられて斯様の返り、深く思ひ廻さんも、心倭けしやうなれば、早きをせんに玉葛が、「身は焦れ云ふに勝らぬ螢こそ」と果敢なく聞え袖の香に、傳へさせて自からは、奥に退入り打散りし、螢と共に影だに見せず。正尙は屏風に身を寄せ、今玉葛がいと遙に、隠れし體を窺ひ知り、爲方なくて袖の香に、恨など云ふ時こそあれ、俄に五月雨降り來り、四邊も寂と鎮りければ、人無き處に浮々と、長居せんもはしたなく、軒の滴も苦しさに、濡れく、夜深く出で給ひぬ。郭公など斯る折には、必ず鳴きもしつらんが、煩ければ聞きも留めず。光氏は彼處を脱け出で、巽の館へ歸らんと、思ひしが早夜も更けて、五月雨頻に降りしかば、花郷が方に泊り、物語など聞え交し、暗き空を打ち仰ぎ、見給ふ折に螢三つ四つ、垣を越えて飛び來れば、前にやあらんすらんと、心にをかしと思ひつゝ、「正尙が此頃は、繁々に來る由、容など勝れしと、云ふにもあらねど用意景色、由ありげにて悪からず、此程は心安く、語ふならん」と問ひければ、花郷は會釋して、「御弟にておはすれど、君よりはお年上の、様に見えさせ給ふなり。嵯峨にて密に見上しより、

左迄に年は経れども、俄に老けさせ給ひしかば、若殿様とは申されず、さり乍ら晴命様の、當に比べて見ますれば、盛は過ぎさせ給ひても、御人柄の打上り、位備はる花の大君、櫻に譬へんお姿と答ふれば只點頭計り、光氏は人の善悪、いふ者を忌み嫌へば、今花郷が人をよく、見知りし答も快からず、心の中に一色多京は、晴命にも又劣れり、若し夫を玉葛の、良人となさば彼はいよく、譏るならんと疎しく、思へど更に言葉に出さず。只何げなく打微笑み、朝夕に隔りて、住め共斯くて逢ひ見れば、心安くこそあれしなど、戯れ言をのどやかに、のたまひながら花郷に、暇を賜ひ枕屏風、引隔て、光氏は、靜に獨臥しにけり。扱又前に記したる、玉葛が住居には、忍ぶとすれど此夜の事、腰元女は能く知りて、次の朝お手水など、持ち出でたるが次へ退き、若き者共打ち擧り、正尙様の信實に、物のたまへる御聲音、御姿迄も光氏君に、似させ給ひて優美なと、一人が云へば又一人、「そりや御兄弟の事なれば、御顔は何處やらが、お宵申しては御座らうが、御親切なは光氏様に、所詮及ぶ事では無い、玉葛へ何から何迄、御心附けての御介抱、女親の遊ばす様、お側で見えてさへ有難い、事ぢやと涙が溢れると、密めき云ふを洩れ聞く玉葛、はやく實の父上に、回り逢ひて赤松の、娘と知られ人がましく、成りし上にて此様に、刺り給はば御心の、儘になるとも似合しからぬ、程とは人も

思ふまじきを、偽りにもせよ親と呼ぶ、人に此身を打頼まば、末代までも汚れたる名を残さんかと心中に、思ひ悩むを光氏は、素よりさせる志、あられば夢にも知り給はず、花郷の住居より、歸途に忙はしく、此方へ來り差覗き、「正尙は如何ぞや、夜の更る迄居たりしか、只釣り寄せて心の深さ、淺さを試し見る迄にて、餘り近く寄せ給ふな、彼も頗る烏滯の者、迂濶に心許されじと、唆かし又教訓し、活けつ殺しつおはする様、いと若やかにて着たる衣の、光澤も色も溢るゝばかり、薄き單衣を打掛けしに、透き徹れるがなほ清く、此世の人の染め出し、たるとも見えす掛香の、程よく薰るも思ふ事、なくて見るなら一入に、なかしかるべきお姿ぞと、玉葛は人知れず、心の中に思ひけり。正尙より忍びやかに、使ありて文持て來る。只白き薄葉に、品位ある手にて書きなしたり、引く人もなしや六日の菖蒲草、長き菖蒲の根に結びつ。光氏をかすと見なしながら、雨霽れ高くさし昇りし、日の影を打ち仰ぎ、「返書をも見まほしけれど、今日も亦室町へ、出仕なせば心に任せず、はや其時刻と忙はしく、立ち歸れども玉葛は、いと懶氣に送りも遣らず、また正尙の文も其儘、打ち棄て、手にも取らざれば、詮方無くて又例の、袖の香が御代に、似つこらしげの返辭を認め、急ぎ使に渡しけり。正尙は夫れとも知らず、いと若々しき書風かな。手に今少し品位のあらばと、思ひながらに好ましく、

飽かず眺めて居給ひけん。
 今年に取り別け五月雨、降り續いて晴れ間なく、徒然なれば何れの館も、物語り畫の巻物など、讀みては心を慰め給ふ。朝霧は是等の事も、心得て珍しく、人の知らざる昔語を、取り出して畫を描かせ、明石姫の方に贈りぬ。紫も明石に見するを、詫げにして人々の、秘め置くを借り或ひは新に、作らせなど爲たりしが、其中に取り別けて、いと能く書きし古満野と云ふ、物語畫を見給ふに、まだいと小さき女君の、何心なく午睡して、居たる所のありければ、昔の事を思ひ出で、「此の姫上も目が覺めなば、折角伏籠に飼ひたる雀、何故逃がしたと腹立ちて、呵るであらう」と側に居る、犬吉を見て微笑めば、光氏も差覗き、「其處は何やら御身の事に、似たやうなれど己がやうに、其姫の成長まで、心長う待つては居ぬ、其の後を開いて見給へ、同じ様に小さい若衆と、戯狂うて居る處があらう、明石姫の前などにて、此の世馴れたる物語は、必ず讀んで聞かせ給ふな、まだ何の頑是なく、可笑しと心は注ぐまじきが、斯る事も世にありけりと、見習はさんは宜しからじ」と、そとした事迄大事をとり、實の娘を生育つる、教を玉葛漏れ聞きなば、愈々親とは頼み難き、御心なりと疑ふべし。紫畫巻を傍へ差置き、「空談は知れてあれど、蓮葉な女の上を、さもありさうに書いたのは、讀むにも心恥し

う、面白うも侍らず、さればとて又うつばの中の、藤原の君の姫君、發明で艶麗で、瑕なき人にはおはすれど、思ひ思うて言ひ寄りし、數多の男に恥掻かせ、餘に無情爲たりし故、皆々姫を打ち恨み、髪を剃るやら死ぬるやら、氣が狂うて我家を、焼いたもあるに知らず顔、作りて我身は大内へ、参りて事を濟したは、操正しい様なれど、偏屈過ぎて婦人らしい、處が無いかと存じます」と、云へば光氏打點頭き、夫れも是れも今の浮世の、人にも多くある事なり。餘りに心を頑固に、持つのも悪し、不品行なは、愈以つて人の瑕瑾、たゞ宜き程と云ふ事を、忘れず身をば慎むべし、賢き者と人も云ふ、親が心を随分に、注げて育てし其の娘が、唯大様にばかり見え、是こそ宜けれと言ひ立つる、處のなきは今迄何を、教へし事ぞと親迄も、人の譏を受くるなり。夫に引きかへ子が宜ければ、親をも人が輕蔑す、えては乳母や傳きの、女共が此の館の、姫上はお聲も宜し、琴も能う遊ばす杯と、云ひたがるは主人への、追従でもなく育てた慾目、言葉の限り譽めしを聞き、扱其業を見し時に、實にもと思はゆる事のなきは、興の覺むるものなれば、心無き者共には、常々によく言ひ教へ、譽めさせまじき事なりしなど、のたまふは只明石姫へ、人に點を打たせじと、心配をし給ふ故なり。今日も亦姫君に、見せんと覺し此頃より、描かせ給ひし巻物を、多く取り寄せ夫彼と、撰り分くる其中に、たいのや姫

と云ふがあり。是には心頑固かたましき、繼母が娘を深く、悪くも事のありければ、紫が是を見て、慎めといふちか當言かと、思ひもせんかと心付き、夫をば手早く袖に隠し、其處を立ち出で明石姫の、部屋の間近く来りしが、何やら賑やかに、笑ふ聲など聞えければ、襖の隙より差覗くに、雲井之丞と機嫌宜げに、難事ひいなごとをして居たり。我顔を差出ださば、氣を詰めんかと立ち寄らず、乾の館へおはしけり。抑此氏仲をば、紫の方へ親しく、來ることを制し給ひ、去頃までは明石姫とも、遠ざけてのみ置きたるが、或時光氏思ふやう、己れが此世にある中は、夫々に心を配り、人と爲さんは易けれど、老少不定若し今にも、命終らば兄妹の、其中餘りに疎々しく、互に心置かるべし。幼き時より習はして、おくには如かじ彼は素より、温順やかなる性質なればと、氣は許しても女のみ、集まる茶の間はまだ許さず、只姫の部屋のみは、心任せとのたまひければ、雲井之丞は悦びて、繁々渡り給ふなりけり。光氏が斯く嚴重に、待遇給ふも一人の、男子にておはすれば、殊に大事と思はしてなるべし。氏仲は明石姫を、いと優しく爲給ひつゝ、まだ幼き難遊の、側についで諸共に、今日も遊びて居給ひしが、不圖雁金と幼き時、一處に住みしを思ひ出で、難の給仕など、いと能く爲ながら折々に、打低首給ひけり。嗚呼氏と言ひ容色と言ひ、並ぶ方なき公達なれば、彼處の姫上此處の娘、見しは更なり聞いてさへ、

思ひを掛けて灰めかすも、少かられど戯言に、ただ言ひ做して愈々深く、思はぬ様に程よく待遇ひ、己れが心の留れるも、あれど能々思ひかへ、身を慎むは高直が、侮り思ひて引き放ちし、口惜しさを忘れやらず、今押して言ひ出さば、許しもせんが夫よりは、此身いよ／＼世に出で、娘を何卒参らせたしと、彼方より手をつかせんと、心に思ふ故にてあり。されば住居に引き籠り、學問のみに氣を凝せば、いよ／＼其事胸に絶えず、忘れんとして此處へ來れば、難事にて思ひ出る、實に波の音聞かじとて、山路へ入れば松風の、音喧しき浮世ぞと、心疚しく思ひしなるべし。其次の日も次の日も、愈降りて雨止まず、玉葛は取り別けて、畫物語の珍らしく、或は讀み或は又、畫に心ある腰元に、描寫させ採して、夫にて長き日を暮す、實にや偽にや、様々に珍らかなる、人の上を言ひ集めし、中にも我身の有様に、似たるは無しと見る中に、住吉といふ哀れなる、物語に優美な、姫君を宮仕に、参らせんとしたりしに、其の繼母が父君へ、さまざまに讒言し、七十計の汚げなる、翁を語らひ姫君を、既に盗み出させんと、爲たる處を危くも、彼の姫上は遁れ出て、住吉の知邊の許に、隠れ住み給ひしと、云ふ處を讀み乍ら、彼現太夫に思はれしを、不圖思ひ出で心に可笑しと、思ふ處へ光氏は、何心なく来りしが、此頃は行く先々に、繪巻物ども打ち散りつゝ、目に離ればほと／＼飽き、嗚呼

見るだにも煩しや、女はうるさき事ともせぬ、大凡何れも同様に、實は少き物語、根も無い事と知りながら、浮々夫れに心を移し、只居てすら暑くろしき、五月雨時に寢亂の、髪をも結びず書き寫す一體女は虚事を、作りし物に欺かれん、爲に生れし者ならん」と打ち笑ひしが思ひ直し、「さは言ひながら昔の風俗、其世の様子を知らんには、物語より外便なし、實に何の所作爲もなき、此徒然を是なくば、争でか紛れ給ふべき。さて物語に作りたる、其の偽にも品々あり、まづ一つにはさもあらんと、哀れを見せて言葉の續き、よく道理に適ひしは、痕跡なきこと、知りながら、自からに心動き、いと美しき姫君の、物思へる様子なんど、我身の上に取り做さば、女は胸も塞がるべし。又二つにはこれは世に、いとあるまじき事かなと、初の程は思ひながら、事々しく執成したる、書き振に目も驚かれ、不圖實かと思ふもあり、靜に讀みて考ふれば、道に背き義理に缺け、惡むべき物語も、打見にはいと清うありて、是は誰が身の上の、事かと思ふも亦あるべし。明石姫が腰元の、女なんどに讀まするを、時々立ち聞けば、昔よりして物よくいふ、人も多くありけるかな、虚説をよく言ひ馴れたる、口より出でし事ならんと、我は思ふが御身は如何に、さは思ばさぬか」と問ひ給へば、玉葛は例の如く、打羞らひて聲低く、「宣ふ如く偽なれ、浮世に馴れたる人達が、さまざまに計畫しとは、浮世になれ

たる人の眼には、了解も致しませうけれど、わたくしなどには唯實の、やうに存じられます」と、彼物語を寫し掛けし、硯を傍に押遣れば、光氏は猶打笑み、「イヤ、是は粗忽な事を申した、氣に當つたら堪忍しや、神代よりして世にある事を、記し置きける日本紀などは、唯聞き傳へをよ程に、書いた物にて取るにも足るまじ、此畫卷物の中にこそ、道理に適ひし事があらう。讀んで手本に爲るが宜い」と、笑ひ給ふは玉葛が、誠の様に思はるゝと、言ひしを可笑しと思ひし故、態と正しき日本紀を、惡様にいひつるなり。光氏少し膝を進め、「今も已に言ひし如く、物語に品々は、あれども作者の心を用ひる、處にかはりは敢てなし、是は誰が身の上と、有の儘には云はれども、善きも惡きも世を経る人の、有様にまづ心を附け、見て面白く語りても、人に飽の來ぬ筋にて、我が胸にのみ籠め置き難き、事ある時は後の世に、言ひ傳へま欲きより、作り初る者にてあり。善人を譽むる時は、善きが上にも愈々善く言ひ、又惡人の様子をも、尾に尾を付けて珍しき、事共を取り集む、夫も是も皆此世に、無き事にてはあらかし、漢土にて作りし書は、才の用ひ方の違へり、日本のも昔と今とは、變る事もありぬべし、唯人情の深きと淺きは、萬里を隔て千年過ぎてても、聊違ひはあるべからず、只管に物語を、虚談なりと言ひ消さんも、頑固過ぎて又惡しく、世に有り難き慈悲心にて、佛の説きし經文にも

方便と言ふ事ありて、悟りなき愚痴の者は、疑を起すべし。其の道理を説明かせば、善もなく悪もなく、煩惱即ち菩提なり。然ればとて又邪も、正しきもこれ一つぞと、悟り立てして我儘に、身を持ちなすは人の瑕、これ見給へよ善人の一旦は世に落魄、さまざま辛苦なしたるも、末は必ず世に出づる。悪人の榮えは暫、天罰來りて身を亡ぼす、果敢なき是等の物語も、見様に由りて空しからず、教訓となりぬ」と細細と語り聞かせ給へども、左に右に玉葛は、光氏が心を疑ひ、彼の珍らかなる世語に、此身の上を殘さんかと、顔を襟に引き入れて、しかる答もなさざりけり。

柏之助は光氏が、勢強きが羨ましく、此君を舅と爲すは、人の用も格別ならん、玉葛は早二十歳を、越したる様には聞きつるが、幸に若やかにて、似合からぬ程にもあらねば、何卒妻に乞ひ受けんと、おもへど流石に打出し、光氏には聞え難く、外に傾らん方も無ければ、雲井之亟が心やすげに、語らひ給ふ機を見て、諷示したりければ、打笑ひつゝ斯かる事を、人傳にてはもどかしかるべし。姉玉葛に直に云へと、のたまふ人には姉ならで、言ひ寄る人には姉なりと、夢にも知らぬで淺間しき、此の氏仲に戯たる心、おはしましたなばかへんに、又雁金へ斯々と、柏之助を頼まんが、已に前にも記しし如く、高直に手を下げさせんと、打上りし心故、斯く無情は答へしなり。扱或日赤松の、高直は柏

之助を初とし、子供等と呼び集め、密やかに語りて云ふ様、「御身等の知らざる娘、二人までを某持てり、若き程は打ち忘れ、更に思ひも出さざりしが、年を積むに従ひて、人知れず心に掛りぬ。折も折とて光氏君、何處よりか姫上を、尋ね出だして傳き給ふと、聞くより頗に羨ましく、近江の國へ預け置きたる、娘は當春彼方より、音づれもありつる間、去頃人を下したれば、おしつけ連れて歸らんが、今一人は如何になりけん、其行方更に知れず、それが母ははや疾くに、空しく果てしを他所ながら、見窮めて置きたるが、我娘といふ事は、母無きとても人より告げん、假令さなく共書き残して、置きたるも亦知るべからず。世に落魄れて淺間しき姿となりて赤松の、實は娘と言ひ歩りかば、此上もなき家の恥、さる名乗する者の噂、其方等は聞かざるや、今更思へば母と縁、切つたればとて娘をば、我目に掛る近き邊へ、忍ばせて置かんには、今の思ひはよもあらし、彼を産みしは氏も無き、女乍らに卑しからぬ、心なりしが其母の、貪慾邪慳に倦じてより、多くもなき女の子を、失ひぬるこそ口惜けれしと、子には語りて聞かせ悪き事を語りて聞かすも、富世の前は磯菜の方に、寵愛を奪はれ給ひ、雁金を又室町へと、思ひ寄せしも氏仲の、事にて心の儘ならねば、左も右もして黄昏が、産みし娘を尋ね出だし、母に肯ば容貌も宜からん、行儀を教へ義植公へ、又差し上げんと思ひてなるべし。柏之助

は斯く聞きても、まだ玉葛が夫れなりとは、心も附かず打案じ、「昔御手を掛けられて、御子を擧げし女ありしを、近江へ下し給ひし事は、承り及びしが、今一人姉上の、おはし」と申す事は今伺ふが初めてなり、此上は人の噂に、心を留めて御行衛、知る手掛りも候はゞ、直様申し上げんとて、皆其席を退きけり。斯くて後に高直或夜、怪しき夢を見たりしかば、其頃夢を能く占ふ、巫女のありしを招き寄せ、斯々と語りければ、かの巫女まづ高直が、年を問ひ扇の骨にて、何やらん數へなどし、是はいと善き御夢なり、若し年頃御行方の、知れぬ御子の侍らば、それが思ひも掛けぬ人の、御子となりておはしますを、きこし召し出づる事の、候へしとぞ判じける。女が人の妻となり、婿取などば常なれど、昔は養女と云ふ事の、いと稀なれば此の判断、よく當りしをさも覺えず、如何なる事にてあらんなど、柏之助にも打語らひ、まだ光氏が子と披露、したるは心附かざりけり。(螢の巻終、これより常夏の巻へ移る)。

いと暑き日東の、池水へ造り掛けし、座敷の縁に立ち出で、光氏は涼み給ふ。小五郎晴命雲井之丞、其外親しく語らひ給ふ、國司の子息ども御側にさぶらひて、桂川より參らせたる、鮎を始め程近き、加茂川の石伏魚とか、稱へる魚の類のものを、夫々に料理する、折柄赤松梅之丞、氏仲君を訪

ねつ、御學問の御相手に、繁々出づる若き者ども、誘ひて參りければ、光氏は打見やり、「餘り淋しく睡氣を催す、折に宜うこそ宜うこそ」と、冷やかなる水を取り寄せ、夫に飯を打ち入れたるを自らも食ひ皆々にも、相伴を言ひ附けて、酒打飲みなど爲給ひしが、此ごろは水無月の、名も著るく雨降らず、風はいとよく吹きながら、曇らぬ空の晃々しく、西日になる頃蟬の聲、いと苦しげに聞ゆれば、光氏は吐息をつき、「水の上も頼みにならぬ、扱堪へられぬ今日のあつさ、無禮は御免と打戯れ、羽織も取つて肱枕、かうして居ても暮し難いに、室町へ勤仕する、者共は皆帯紐も、解れず嗚や苦しからん、これ皆の者此頃世に、聞き及んだ珍しい、事があらば睡覺に、話して聞かせよ己もはや、老人のやうな心地に何時となく、なつたで世間の事は知らぬと、仰せに皆々はつとばかり、御受はすれど是れぞとて、聞えん事も覺えれば、涼しき欄干へ脊を押し向け、慎みてこそ居たりけれ。光氏扇をはたと置き、夫れよ聞いたる事のあり、高直が妾腹の、娘を此頃尋ね出し、傳くと云ふ噂せし、ひとのありしが實かと、梅之丞に問ひ給へば、手をもじくと顔を垂れ、「御耳へ入るべき程な事々しき事にも非ず、兄柏之助は其事を、疾くより、承知仕り、當春彼が住む田舎へ、人を遣はし其實否を、委しく糺させ彼方より、名乗り出でて歸るやう、父にも知らせず計ひしと、申すも實の人の噂、さりとして迎へ

を下したる、其の後に父高直、私共へは斯々と、只一通りの物語、委しき事は更に存ぜず、扱呼び迎へは迎へたれど」と言ひ掛けて莞爾と笑ひ、「實に珍しき世語に、人々の申すべし、えては箇様の事よりして、家の名までも出だす事、世界に多く候」と聞え上ぐれば扱は噂を、聞きしは實なりけりと、心の底に打笑み給ひ、「澤山に子を持ちながら、慾に限りはさて無いもの、我は子の乏しければ、名乗り出でて呼び寄せんと、思ふもあれど却つて先方で、迷惑がらうと棄てて置く。高直も若き程は、龍王の使となり、明石の月をも問ひたる者、其處や彼處に影留めて、置きしもあらんが底清く、澄まぬ水では曇りなき、眺望とするは覺束ない、氏仲や、左様な落葉も拾ふ人、苔の花は殊更に、大事であらう夫れよりは、外の楢で慰めん、何の別儀は無し」と嘲弄めきてのたまふは、此の若君を輕しめて、彼の雁金を膝元へ、引き附けたるを快らず、豫て覺し、故にてあり。梅之丞は今の仰せ、心得難く何とやら、御氣色悪き其上に、いと不肖なる姉堅田を、迎へし事を知らし召し、に、恐れ入つて差俯向き、心苦しき思ひけり。夕告げ行く風いと涼しく、光氏は心地宜げに、打ち解け休み涼みつゝ、次第々々に此の様な、若い者の中に交ると、氣を詰めらるゝ年にも成つたと、言ひ流して玉葛の、住居へ行けば此人々、御送りにと皆參る。光氏行く行く心の中に、高直は仰々しく、宜きと思へば事々

しく、待遇つ又惡きをも、輕しむる事大層なり。我が嘲弄を梅之丞、假令ば彼に語るとも、思掛けなき其の處へ、彼の玉葛を差出し、對面させなば腹立も、忘れて俄に持てはやし、可笑しからんと一人領き、彼處に到り差覗けば、山吹一人端近く、居たるを呼び出し聲潜め、「玉葛を些と庭の方へ、出るやうに勧めてくれ、誘ひて來りしは、いとよく駈ける若駒を、欲げに思へる若殿輩、氏仲が偏屈故、更に爰へは連れて來ぬ、さりとば子ながら心なし、さも無き人の娘すら、深き窓に籠め置けば、床しと思ふが世の人情、我此館の内々は、汚穢しくても他よりは、美々しき様に言ひ囁せば、夫にて傳く姫上はと、見たう思ふもこれ道理、度々うるさう云ふ様なれど、人の氣色の深さ淺さを、見習ふも亦却て、女の嗜となる事もあるしと、囁き聞え給ふ。彼方の庭には件の若殿輩、心々に遊び戯れ、離面白く結びなして、唐土と大和の撫子の、種を盡して植ゑたるが、夕日残りし雲に照り、いと美しきに立ち寄りながら、心の儘にも折り取らず、立ち休らふを光氏は、遙に見やり玉葛を、呼び出して彼處の方を、扇にて指示し、「彼見給へよ假初に、花を愛るも心を用ひ、行儀正しき者共なめり。今日は見えれど柏之助、これは殊更靜な性質、年積みし身も彼には却つて、心措かるゝ程にてあり」と、聞え給へば玉葛が、「何々も同様な、お姿と言ひ殊には黄昏、定かに見分難けれど、氏仲様お一人は、綺羅々々

として紛ひは無い、腰元共がお噂を申上ぐるを微聞けば、赤松の息女の中に、御心に適ひしも、おはしましたと申す事、夫聞かれなば歎んで、催馬樂にも謠ふ通り、大君來ませ婿にせんと、云ふべき處を引換へて、イヤ御轍には何宜けん、もてはやさんも願はしからず、只幼きとち結びおきし、心も解けず年月を、隔てられしが些きつくわい、まだ部屋住にて位もなきが、不足と思はゞ知らず顔、作りにて己に任せて置けば、まさかに彼が家の恥と、なる様には計らはぬしと、發と吐息をつき給へば、玉葛心の中に驚き、さては昔に引換へて、今は御交際宜からじと、人の言ひしは偽りならず、斯くては父に我身の事、急に明かし給ふまじと、只何氣なくもてなすさま、泣くよりもまた哀なり。月もなき頃なれば、銀燭あまた持て來るを、光氏は押し止め、「火のちかいは暑くろし、此處は仄に照し置き、それ庭の燈籠を、洩らさぬやうに點して」と差圖しつゝ玉葛が、涙ぐみたる體を見て、思はず知らず高直を、惡様に言ひたるが、心に障りしものならん、由なき事を語りしと、心に思ひ傍の、琴引きよせて少し調べ、「御身が琴の好なること、此頃までは知らざりし、秋の夜の月影の、涼しき頃に端居して、蟲の聲に掻鳴し、合せたる時などは、堅くろしい簾筆築より、締氣無いので面白し。全體女の弾く爲に、拵へたる物なれば、むづかしい事はない、様にはあれど又上手に、弾き得るのは難い事、

高直は武藝の暇、ほんの心慰みに、覺えたれども何として、今では及ぶ者はなし、誰れが弾いても同じやうな、管搔なども彼がのは、萬の物の音も籠り、雲井に響き登るかと、思ふ許りに面白しと、語り給へば玉葛も、おろく知れる道なれば、耳に止りて左迄によく弾き給ふ事不審しく、「御館のお遊の、其折などに承はる、事が何時ぞはござりませうが、田舎などにも習ふ者、數多ある故押し並べて、あんな者であらうと許り、愚な心で存じましたが、貴方が夫程勝れたと、被仰らばまア何様でしと、床しがれば、「オ、然か、筑紫琴と一口に、云へば其方の住んだ國の、やうに聞えてをかしけれど、唐土は知らず日本では、まづ音曲の是が祖、親と云へば高直に、不日御身習ふが宜い、扱彼が弾くの先づ、聞かせたいものなれど、何れの道も上手となれば、輕々しう手は下さぬもの、されども遂には聞くであらうしと、調べ少し弾き給ふが、いと面白きに玉葛は、熱々聞き惚れ是に勝る、音はよもあらじと思ふより、親の床しさいよ〜勝り、嗚呼此琴にていつの世か、打解け弾かせ給へるを、聞かんと思へば又涙の、胸までせぐり來るなるべし。光氏は細聲に、「貫川の柔手枕やばらかに、寢る夜は無くてくよ〜と、思ふも愚痴かさりとては、無情い親に隔てられしと、唱ひしが不圖氏仲と、彼の雁金が其中を、云ふ様なるに心付き、笑ひつゝ琴押遣り、「いざ弾きたまへ何の藝も、人に恥ぢては上達ぬ

ものしと、切に勧め給へ共、片田舎にて怪しげなる、老女などが都の者と、云ふのに少し習ふた許り、
 嘸かしたも訛言だらけ、手も違つて居りませうと、唯恥入りて手も觸れず如何なる風の吹き添ひて、
 斯うは響き侍るぞと、感に堪へて居たる様子、火影にいと美し、光氏又庭を眺め、皆の者は遠慮
 して、此處へは來ずに撫子を、面白さうに眺めて居たが、何時の間にも皆歸つた。嗚呼高直にも此
 の花園、早う見せん」と玉葛が、顔打視り世の中は、定めなきこそ定めなれ、烏瓜とかいふ物の白く
 咲きしを手折らせしも、唯此頃の様なりと、ふつと昔を思ひ出でぬ。

修紫田舍源氏第二十五編終

修紫田舍源氏第二十六編序

石山形の硯石は、二ツ連れて鯉と牛と、木瓜の裡に彫りてあるは、濃墨淡墨の印なりと歎。鯉に濃
 の響きはあれど、牛は何なる由縁歟知らず、日讀の丑の前は子なり、鼠色の次なれば、薄墨であらう
 とは、あまりに廻りくどい料簡、それはどうでもよいにして、偕この草紙の初編の刊行、文政己丑の
 年なりし、其丑に因あれば、被古硯を表紙の裏に、寫させて置きたりしが、石山よりは遠からぬ、勢
 田の長橋ながく續き、大津八町牛車、ぐるりと轉つて今年天保辛丑の春となり、牛の角文字二ツ文
 字、鯉の鱗の三十六編、はじめは何の意もなかりし、それさへ用にならしに似たり。若龍門へ逆のぼ
 る、運も來らば獅子飛の、浪に鯨ふり宇治十帖へ、渡りて全部となさんといふ。

天保辛丑孟春

柳 亭 種 彦

修紫田舎源氏第二十六編

田 舍 源 氏

斯くて後に光氏は、人の怪しみ思はんかと、繁々には玉葛を、訪はねど折に觸れては渡り、琴など教へ給ひければ、自然近やかに、馴寄りなど爲る事あり。玉葛も初めこそ、いと恥しう不快も、覺えたりしが斯くの如く、平穩なる御心を、漸々に知り目に馴れて、今はさまでに心も置かず、答なども馴れしからぬ程には聞え交すを、見るに付けつゝ光氏は、愈々可憐の者に思ひ、茲に据置き折々に、果敢なき事を言交はし、慰みなんやと思ふ折も、無きにはあらねど然する中に、若し我が命なくなりなば、憫然なるべしさまでに祿は、重からず假令位の卑き、侍士にもせよ其が妻と、定まりていと睦じう、添ひなば夫れこそ彼が幸福。さて何れへか送らんと、心の中に思ひけり。

扱赤松の高直は、近江の國より堅田と云ふ、娘を去る頃迎へしが、物言ひ忙しく訛り、舉動不束なれば、館の者も左右に輕しめ、世に傳へ聞く者も、何の故にか高直は、さる女を呼び取りけん。まだ老耄るゝ年にも非すと、譏り言ふを梅之丞聞くも苦しく或時に、父高直に打ち向ひ、「姉上を近江より、尋ね取り給ひしを、何人よりか光氏君、聞し召されて眞實かと、思ひ掛けなく御尋問、何と御答申さ

第 三 十 六 編

んかと、ほと／＼當惑致せし」と、云へば高直打笑ひ、「彼方にこそは年來音にも、聞えぬ賤女を迎へ、事々しく傳かるれ、迂濶に人の上の事、譏り給はぬ君が何故、我等しきの内證事、耳に留めて輕蔑し、仰せは更に心得ず、よし／＼それも高直を、人がましく覺してなれば、嘲らるゝが却つて手柄」と、打ち笑へば又梅之丞、「君の呼び取り給ひしは、田舎に育ちしまゝには非ず、正尙君など御心に、掛けさせられてさま／＼に、思ひ煩ひ給ふの噂、見ぬ人さへも尋常の、姿容にあらじと推量り、心浮かるゝ者多し」と、言ひ掛くるを押し止め、「否さ夫れも光氏君の、姫上なりと思ふから、腫物の痕も醫と見るは、今の世の大概の人情、必ず左程に勝ればせじ、はて何故と云へ人がましき、程なら年頃斯々と、人が噂を是非する筈、世は十分に行かぬ者、御才徳世に過ぎたる、御身なれども紫の、上の御腹に御景色の、ありし事だに今になし、之に姫君おはしなば、愛度からんと人々の、願へど前世の約束にて、君は御子の少きなめり。お腹こそは劣りたれ、明石に生れ給ひしは、必ず他日幸福あらん、今事々しく云ひ喚ぐ、その玉何とか呼びなすは、思ふに實の御子にあらじ、光氏君は事なき事を、事有る様に取做して、人を惑し打興じ、給へる御辭常に有り、これも必ず其類と、言ひながらまた我が娘と、いふなば更に心附かず。さて何れへか縁邊を、定めらるべき正尙君とは、御中も取別よく、その

上確此程は、獨住みにて居給ふ由、大方是にと言ひ掛けて、雁金が事胸に浮み、冠者の君の事なくば、彼をも左様に深く傅き、人にも見せず若殿輩に、床しがらせし其上にて、本意の如く爲なさんと、尙も心に口惜しく、光氏君の怨に、口を容れさせ給はぬ中は、許し難しと氏仲が、心靜に此方より、手を下ぐるのを待ち給ふ、とは知らずしてさまざまに、思ひ回らし不圖起つて、物をも言はず雁金を、住まする部屋の方へ行く。梅之丞は何とやら、父の素振を不審と、思ひながら後に付き彼處へ行くに雁金は、午睡を爲しつゝ餘念なし。薄き物の單衣を着て、透徹りたる肌付も、いと美しく可笑しげなる、手附をなして半開きし、小さき扇を持ち乍ら、腕を枕に打休らふ、いと尋常なる姿ゆゑ、暑かはしげには更に見えず、亂れし髪の眞白なる、手に掛りしものと艶なり。腰元共も皆物の、後に隠れ打寛ぎ、居眠りして居たりしかば、殿の渡らせ給ひしと、揺り驚かさる者もなし、高直は立ち乍ら、持ちたる扇を打ち鳴せば、雁金何の心もなく、見上ぐる目元愛らしく、顔の少し根めるも、親の目にては一入に美しく見るなるべし。高直靜に座に就いて、轉寢は宜からぬ事、枕だにせず物果敢なき、様して何故に打ち休みし、腰元共も邊に居ず、心得難き振舞ぞや、譬見る人無き連も、女は心配して、常々に身を正しく守り慎めるこそ肝要なれ、心を安く打ち棄て、我儘なるは品もなし、望あり

て願掛けを、爲るにも觀音地藏などとは、迂遠とて不動尊に、向ひて陀羅尼を讀みなどし、印相作りて居るのも悪し、是れ神佛ばかりでなく、女の身に相應しきと、相應しからぬがあり、人交際はなほ大事、狎れて善い人、悪い人、夫を見別けず誰にもあれ、近附けもせず言葉も懸けず、餘り隔てがましきは、氣高きやうには見ゆれども、人に惡まれ美しき、心といふには非ざるなり。光氏君が室町へ、末は參らせんと、彼の姫君を習はし給ふ、教は萬づ溫和かに、物識めきて稜々しき、事を戒め、又何の藝の道にも疎々しくは、有らせじと其の程を考へ、いと寛かに候け給ふ、道理はさにもあるべきが、人は専ら好く道と、好かぬ業とは自から、持ちて生るゝ者なれば、思ふ様には行かぬ者、此の姫君の成長り、室町御所へ出し立て、給はん時の世の氣色が、今から床しう思はるゝ。扱御身をも我が思ふ、様になさんの心懸げ、不慮の事にて違ひしが、如何にもなして後指、人にさゝせぬ仕様もと、思ふにつけて人の上、さまざまなるを聞く毎に、色々思ひ亂るゝぞや。親切めきて云ふ人の、辭に迂濶と欺れ、給ふな密に某が、思案して置きたりしと、いとほしげに顔視りつゝ、云ふのを聞きて雁金は、言葉はなくて差俯向き、昔は何の分別なく、我身のみかは若君の、善からぬお名まで立てまゐらせ、館の騒ぎを引き出し、よく其時はおめくと、父に面を對せしと、今ぞ熟々思ひ知り、胸塞りて恥し